南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

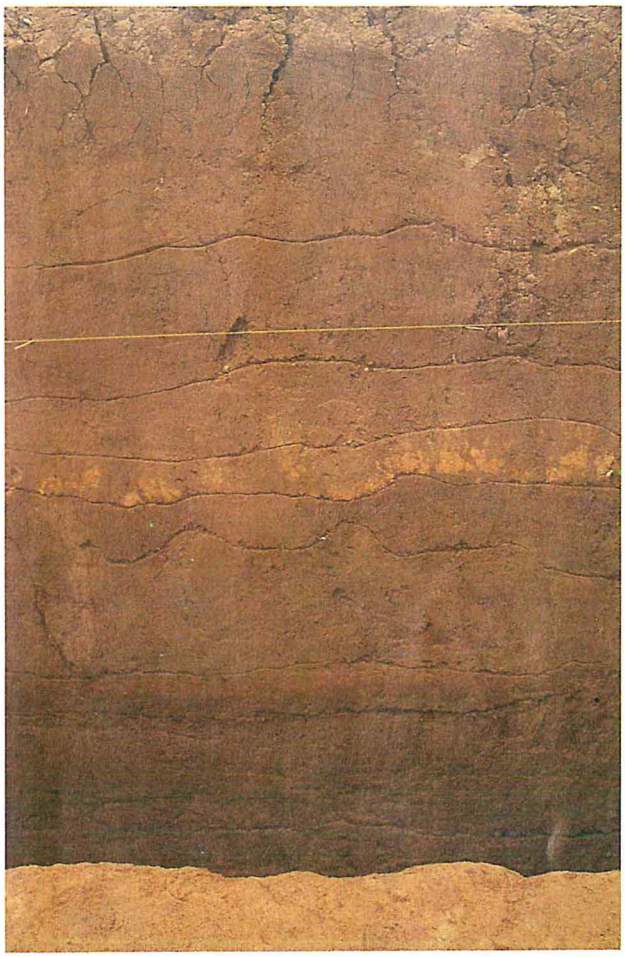
県営緊急畑地帯総合整備事業（横峯地区）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告

横　峯　遺　跡

1993年3月

南種子町教育委員会

巻頭カラー１



土　　層

１号礫群検出状況

巻頭カラー２

１号礫群

１号礫群断面

序　　文

南種子町教育委員会では、横峯地区緊急畑地帯総合整備事業に伴い、事業区域内の横峯Ｂ・Ｃ遺跡の発掘調査を実施しました。

調査は、県の助成を受け、鹿児島県教育庁文化課並びに鹿児島県立埋蔵文化財センター、県熊毛支庁土地改良課、発掘作業従事者、土地所有者等多くの方々の全面的なご協力・ご援助を得て、平成４年10月19日から11月17日までの20日間実施しました。その結果、この遺跡からは、縄文時代早期の土器や石器類が多数出土したほか、約３万年前の旧石器時代の調理場跡と思われる「礫群」２基が見つかり、極めて価値が高いもので、貴重な遺跡であると関係者の注目を集めております。

この調査結果報告書の発刊に当たり、ご協力いただいた関係機関並びに関係者の方々へ深く感謝申し上げるとともに、この報告書が広く活用されることを願い、今後も文化財の保護・保存に努めてまいりたいと思います。

平成５年３月

南種子町教育委員会
教育長　川　田　孝　雄

例　　言

1．この報告書は、1993年10月～11月にかけて実施した、緊急畑地帯総合整備事業（横峯地区）に係る発掘調査の報告書である。

2．本遺跡は、平成４年度に南種子町教育委員会が、県農政部（熊毛支庁）の委託を受け、調査主体となり、調査員の派遣を県立埋蔵文化財センターに依頼して、実施した発掘調査の報告書である。

3．本書で用いたレベル数値は、県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海抜高である。

4．遺物番号は、本文及び挿図・図版の番号と一致する。

5．発掘調査における測量・実測・写真撮影は、倉元・堂込が主に行い、調査中県立埋蔵文化センター調査課　宮田栄二に一部助力を得た。

6．本報告書の執筆分担は次のとおりである。

第１章、第２章、第４章―第３節・
第５節……倉元
第３章……成尾
第４章―第１節・第２節・第４節、
第５章……堂込

7．報告書の編集は、倉元・堂込が行った。

本　文　目　次

巻頭カラー１　横峯Ｃ遺跡土層、１号礫群検出状況
　　２　１号礫群、１号礫群断面
序
第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の経過 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　横峯遺跡の土層について　成尾英仁 …… 7
第４章　調査の概要 …… 18
　第１節　調査の概要 …… 18
　第２節　トレンチの状況 …… 20
　第３節　遺　　構 …… 23
　第４節　遺物―土器 …… 29
　第５節　遺物―石器 …… 50
第５章　ま　と　め …… 61
付　章　横峯Ｃ遺跡出土炭化物の^{14}Ｃ年代測定 …… 64

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表 …… 6
第２表　遺跡周辺の火山噴出物 …… 8
第３表　火山ガラスの屈折率 …… 10
第４表　火山ガラスの化学組成 …… 10
第５表　出土土器観察表(1) …… 47
第６表　出土土器観察表(2) …… 48
第７表　出土土器観察表(3) …… 49
第８表　出土石器計測表(1) …… 60

挿　図　目　次

第１図　横峯遺跡の位置と周辺遺跡 …… 5
第２図　横峯遺跡の位置（模式図）―番号は第３図に対応 …… 7
第３図　横峯遺跡周辺の火山噴出物の対比 …… 11
第４図　遺物・遺構の出土層位 …… 13
第５図　横峯Ｂ遺跡地形図及びトレンチ位置 …… 15
第６図　横峯Ｃ遺跡地形図及びトレンチ位置 …… 16
第７図　横峯Ｃ遺跡工事施工後の地形図 …… 17
第８図　各トレンチの土層 …… 21
第９図　グリット図及び遺構配置図（10㎝コンタ） …… 22
第10図　１号集石・２号集石 …… 24
第11図　３号集石 …… 25
第12図　４号集石 …… 26
第13図　５号集石検出面 …… 27
第14図　５号集石掘り込み …… 28
第15図　１号礫群・２号礫群 …… 29
第16図　遺物出土状況 …… 31～32
第17図　出土土器(1) …… 34
第18図　出土土器(2) …… 35
第19図　出土土器(3) …… 36
第20図　出土土器(4) …… 37
第21図　出土土器(5) …… 38
第22図　出土土器(6) …… 39
第23図　出土土器(7) …… 40
第24図　出土土器(8) …… 41
第25図　出土土器(9) …… 42
第26図　出土土器(10) …… 43
第27図　出土土器(11) …… 44
第28図　出土土器(12) …… 45
第29図　出土土器(13) …… 46
第30図　出土石器(1) …… 51
第31図　出土石器(2) …… 52
第32図　出土石器(3) …… 53
第33図　出土石器(4) …… 54

第34図　出土石器(5) …… 55
第35図　出土確器(6) …… 56
第36図　出土石器(7) …… 57
第37図　出土石器(8) …… 58

図　版　目　次

図版１　横峯Ｃ遺跡の遺跡遠景、トレンチ調査状況、拡張トレンチ遺物出土状況
重機使用状況 …… 66
図版２　横峯Ｃ遺跡トレンチ出土状況
≪１トレンチ、２トレンチ、４トレンチ≫ …… 67
図版３　横峯Ｃ遺跡遺物出土状況
≪遺跡南側から、No.154、No.128、No.３≫ …… 68
図版４　横峯Ｃ遺跡遺物出土状況
≪No.30、No.45、No.42≫ …… 69
図版５　横峯Ｃ遺跡１号集石、２号集石 …… 70
図版６　横峯Ｃ遺跡１号集石断面、３号集石 …… 71
図版７　横峯Ｃ遺跡４号集石、５号集石 …… 72
図版８　横峯Ｃ遺跡１号礫群検出状況、１号礫群 …… 73
図版９　横峯Ｃ遺跡１号礫群出土層位、２号礫群出土層位 …… 74
図版10　横峯Ｃ遺跡１号礫群土層堆積状況、１号礫群半裁 …… 75
図版11　横峯Ｃ遺跡１号礫群断面、２号礫群 …… 76
図版12　礫群部分埋め戻し、発掘調査参加者 …… 77
図版13　出土遺物 …… 78
図版14　出土遺物 …… 79
図版15　出土遺物 …… 80
図版16　出土遺物 …… 81
図版17　出土遺物 …… 82

報告書抄録

フリガナ	ヨコ ミネ
書名	横峯遺跡
副書名	県営緊急畑地帯総合整備事業（横峯地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	4
編著者名	倉元良文・堂込秀人
編集機関	南種子町教育委員会
所在地	〒891－37　熊毛郡南種子町中之上2793番地1
発行年月日	１９９３年3月３１日
フリガナ	ヨコ ミネ　　ヨコ ミネ
所収遺跡	横峯Ｂ遺跡、横峯Ｃ遺跡
フリガナ	カゴシマケンクマゲグンミナミタネチョウシママ
所在地	鹿児島県熊毛郡南種子町島間
調査期間	１９９２．１０．１９～１１．１７
調査面積	3，０００㎡
調査原因	農業基盤整備事業

出土遺物・遺構等	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量	特記
	縄文時代（早期）	集石5基	縄文時代（早期）	土器、微隆起突帯文土器、貝殻条痕文土器など（苦浜式） 石器 石鏃・石斧・磨石・敲石・剥片	パンケース　20箱 パンケース　5箱	姫島産黒曜石出土
	旧石器時代	礫群2基				^{14}C年代測定約3万年前

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、各開発機関との間で、事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（農地整備課・熊毛支庁土地改良課）は、熊毛郡南種子町横峯地区の緊急畑地帯総合整備事業を計画し、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について県文化課に照会した。

これを受けて、平成３年４月に当該地区の埋蔵文化財分布調査を実施したところ、横峯Ａ・横峯Ｂ・横峯Ｃ遺跡の存在が明らかになった。

この結果に基づき、農地整備課、県文化課、南種子町教育委員会の間で事業の推進と埋蔵文化財の保護に係る協議が行われ、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を実施することとなった。ただし、横峯Ａ遺跡については、すでに包含層まで達する削平が行われていることから確認調査の対象外とした。

発掘調査は、南種子町教育委員会が調査主体となり平成４年10月19日から11月17日まで実施した。その後、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて整理・報告書作成作業を行った。

第２節　調査の組織

調査主体	熊毛郡南種子町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	川田孝雄
調査事務担当者	〃	社会教育課長	崎田　宏
	〃	係長	上園和信
	〃	主事	日高孝之
発掘担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	倉元良文
	鹿児島県教育庁文化課 （兼）鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	堂込秀人

発掘現場において、遺物について鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、地層について鹿児島市立鹿児島玉龍高校教諭成尾英仁氏の指導を受けた。

なお、調査の企画等に関して県教育庁文化課および県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得た。

第３節　調査の経過

発掘調査は平成４年10月19日から11月17日まで行った。当初、確認調査だけの予定で開始したが、横峯Ｃ遺跡周辺が本年度事業区で設計変更が不可能のため協議の結果、破壊される部分につ

いては緊急発掘を行った。以下調査経過は、日誌抄により略述する。

10月19日（月）　横峯Ｃ遺跡発掘作業開始。作業用具点検。作業員へ発掘調査の手順と安全確保の注意。１～４トレンチ設定・掘り下げ。２トレンチで土器出土。２・３トレンチ掘り下げ終了。

20日（火）　１トレンチ破砕礫多く出土したため、拡張・掘り下げ。４トレンチ掘り下げ。５トレンチ設定・掘り下げ。４トレンチ赤ホヤ火山灰の下より土器出土。２・３トレンチ土層断面写真撮影・実測。４トレンチ掘り下げ終了。

21日（水）　６～８トレンチ設定・掘り下げ。赤ホヤ下層まで削平を受け、出土遺物なし。掘り下げ終了。10～13トレンチ設定・重機による表土除去・掘り下げ、５トレンチ南側拡張・掘り下げ。12・13トレンチ土器出土。トレンチ配置図作成。
現地において熊毛支庁土地改良課、南種子町農地整備課、町教育委員会、調査担当者で今後の調査について協議。埋蔵文化財センターの指導を受け、緊急発掘を行うこととなる。

22日（木）　１・４トレンチ清掃・遺物出土状況写真撮影。２トレンチ遺物実測。10・11・12・13・５拡張トレンチ掘り下げ。４トレンチ遺物取り上げ。

23日（金）　Ｄ・Ｅ・Ｆ区重機による表土剥ぎ・残土処理。６～８トレンチ写真撮影・埋め戻し。

26日（月）　Ｄ・Ｅ・Ｆ区重機による表土剥ぎ・残土処理。Ｄ・Ｅ・Ｆ区掘り下げ。

27日（火）　Ａ・Ｂ区重機による表土剥ぎ・残土処理。Ｄ・Ｅ・Ｆ区掘り下げ・グリッド設定。

28日（水）　Ａ・Ｂ区重機による表土剥ぎ・残土処理。Ｄ・Ｅ・Ｆ区掘り下げ。グリット図作成。

29日（木）　Ｃ区重機による表土剥ぎ・残土処理。Ｄ・Ｅ・Ｆ区掘り下げ。Ｅ区遺物取り上げ。

30日（金）　Ｃ区重機による表土剥ぎ・残土処理。Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ区掘り下げ。下層確認のため２トレンチを重機による深掘り・礫群出土。
横峯Ｂ遺跡
　１～３トレンチ設定・１～２トレンチ重機による表土除去。

11月４日（水）　Ａ・Ｂ・Ｃ区掘り下げ。２トレンチ深掘りの礫群清掃・写真撮影。Ｅ区遺物取り上げ。

５日（木）　Ａ・Ｂ・Ｃ区掘り下げ。２・３号集石実測。

６日（金）　２トレンチ周辺拡張、掘り下げ。１・３・４号集石実測。Ａ・Ｂ区掘り下げ、成尾英仁氏火山灰についての現地指導。

９日（月）　２トレンチ拡張区掘り下げ。Ａ・Ｂ区掘り下げ。

河口貞徳氏調査方法等についての現地指導。

10日（火）　2トレンチ拡張区掘り下げ。A・B区掘り下げ。

11日（水）　A5区集石実測。2トレンチ礫群写真撮影、実測。A区遺物取り上げ。

12日（木）　A・B・C区遺物取り上げ。2トレンチ拡張区掘り下げ。A・B区掘り下げ。

横峯B遺跡

1・2・3トレンチ掘り下げ。

13日（金）　4号集石実測。A・B区遺物取り上げ。

横峯B遺跡

1・2トレンチ掘り下げ終了。遺物遺構無し。3トレンチ遺物出土。

16日（月）　2トレンチ礫群埋め戻し。5号集石実測。

横峯B遺跡

トレンチ位置図作成。3トレンチ土層断面実測。1～3トレンチ土層断面写真撮影。

17日（火）　5号集石実測。発掘用具撤去。調査終了。

第2章　遺跡の位置と環境

南種子町のある種子島は、大隅半島南端の佐多岬の南東約33キロメートルの洋上に浮かぶ南北52キロメートル、東西12キロメートルの北北東から南南西に細長く伸びた島である。南種子町は種子島の南に位置し、北は中種子町と接し、他の三方は海に囲まれた面積110.2㎢の町である。

南種子町の地形は、海岸線に数段の海食崖が発達し変化に富む景観を呈し、内陸部は海抜200m内外の海岸段丘で中央部の台地とは急傾斜で分けられている。また、南端の門倉岬は1543年に鉄砲の伝来した地として有名で、南東海岸には種子島宇宙センターがある。

周辺の遺跡分布を見ると、縄文時代早期の遺跡としては吉田式土器の出土した長谷遺跡（10）、昭和62年に発掘調査を行い塞ノ神式土器を出土した小牧遺跡（8）、今回の発掘調査で出土した苦浜式土器の示標遺跡となった苦浜貝塚、前期の遺跡としては田代遺跡（17）・赤石牟田遺跡（9）、後期以降の遺跡としては平成2年に発掘調査を行った野大野A遺跡（14）・上瀬田遺跡（15）・田尾遺跡（5）・長崎鼻一陣貝塚（22）がある。弥生時代になると平山の広田海岸に面する砂丘に立地する広田遺跡（24）が著名である。他には本村塚の峯遺跡（18）・本村丸田遺跡（19）・本村宇都遺跡（20）・浜田遺跡（23）がある。歴史時代では、昭和60年に発掘を行い平安時代の掘立柱建物跡の検出された本村丸田遺跡（19）が知られている。

今回調査を行った横峯B・C遺跡は、鹿児島県熊毛郡南種子町島間に所在する。役場所在地である上中から島間に向う国道58号線の沿線で横峯B遺跡から南東の方向へ国道を挟んで約1㎞に横峯C遺跡がある。西海岸から約2キロメートル内陸部に向かい、約20キロメートル離れた屋久

島を望む標高約120mの台地上に位置する。遺跡周辺には幾つもの小さな谷が入り込み、八手状に伸びた台地の基部に両遺跡は立地する。各台地は圃場整備が行われ、横峯C遺跡の立地する台地も先端部はすでに大規模な圃場整備が進んでいる。

≪参考文献≫

1、南種子町教育委員会「小牧遺跡・平六間伏遺跡」
南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（2） 1988

2、南種子町教育委員会「野大野A遺跡・上瀬田A遺跡」
南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（3） 1991

3、角川書店 「角川日本知名大辞典」 『46 鹿児島県』

第１図　横峯遺跡の位置と周辺遺跡

遺跡地名表　南種子町

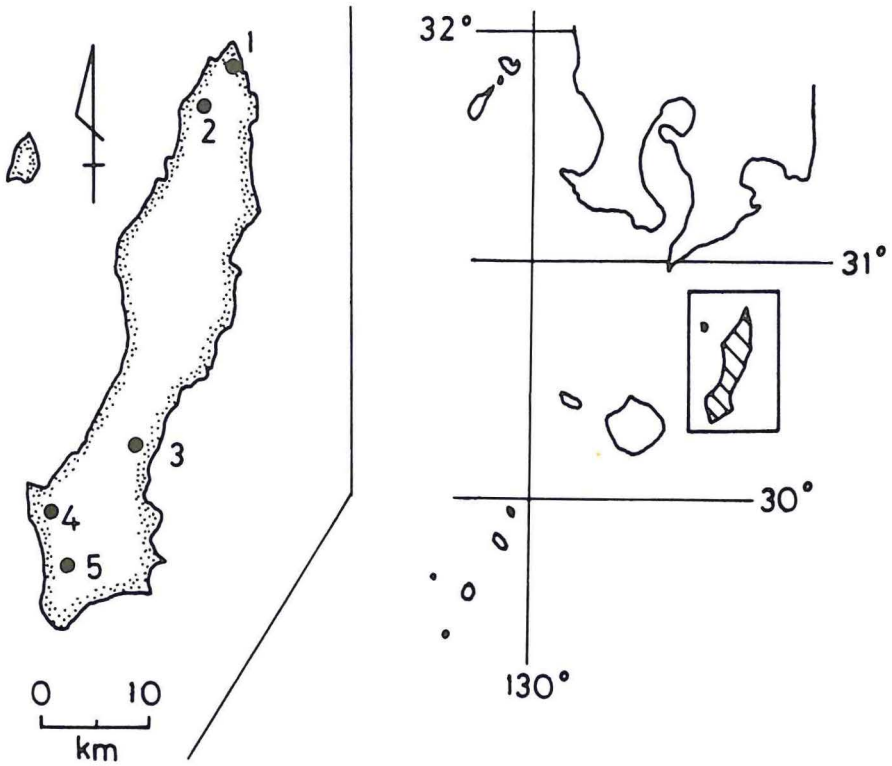
番号	遺　跡　名	所　在　地	地形	時　代	遺　物　等	備　考
1	横峯B	島間　横峯	台　地	縄文	土器片	平成３年分布調査
2	横峯C	〃	〃	縄文・旧石器	土器片・石鏃	〃
3	横峯A	〃	〃	縄文	土器片	〃
4	下鹿野	島間　下鹿野	〃		石鏃	平成２年分布調査
5	田尾	島間　田尾	〃	縄文（後期）	市来式土器・磨製石斧・すり石・敲石・石皿	表面調査による出土
6	上妻城跡	島間　向方	〃			中世城館跡（昭58県文化課調査）
7	平六間伏	中之上平六間伏	〃	縄文	土器片・石斧	昭和62年発掘調査
8	小牧	中之上小牧	〃	縄文早期	塞ノ神式・磨石	〃
9	赤石牟田	長谷　赤石牟田	〃	縄文（前期）	曽畑式・塞ノ神式土器・打製石鏃・黒曜石破片	表面調査による出土
10	長谷	長谷	〃	縄文（早期）	吉田式土器	〃
11	上里城跡	茎永　上里	〃			中世城館跡（昭58県文化課調査）
12	松原	茎永　松原	〃	縄文（後期）	弥生式土器	表面調査による出土
13	野大野	西之	〃	〃	市来式土器・磨製石斧・敲石	〃
14	野大野A	中之下野大野	〃	縄文	土器片	平成１年分布調査 平成２年発掘調査
15	上瀬田B	中之下上瀬田	〃	〃	〃	昭和63年分布調査
16	上瀬田A	中之下上瀬田	〃	〃	〃	平成２年発掘調査
17	田代	西之	〃	縄文（前期）	塞ノ神式土器	表面調査による出土
18	本村　塚の峯	西之　本村　塚の峯	斜面地	弥生（後期）	弥生式土器片	
19	本村　丸田	西之　本村　丸田	畑	〃	〃	
20	本村　宇都	西之　本村　宇都	斜面地	〃	弥生式土器	
21	鰐口	中之下　真所				(県)昭42．3．31 考古資料
22	一陣長崎鼻貝塚	中之下	砂　丘	縄文（晩期）	土器(黒川式)・磨製石斧・骨製髪飾り・骨錐・貝輪・人骨・貝類	
23	浜田嵐	平山　浜田嵐	平　地	弥生（中期）	弥生式土器片（須玖式）	
24	広田	平山　広田	砂　丘	弥生（中期） （後期）	弥生式土器・人骨100体余・貝製品・紡錘車・石錘・鉄製釣針・獣骨貝類	埋葬址考古学雑誌43巻３号、日本考古学協会発表（24回総会）、福岡医学雑誌52巻８号種子島民俗特集７号広田の民俗

第３章　南種子町横峯Ｃ遺跡の火山噴出物（成尾英仁）

１．遺跡の基盤岩類

遺跡の基盤をつくる地層は熊毛層群、（橋本1962、早坂他1983）で主に砂岩・頁岩・砂岩頁岩細互層からなり、島間北部の立石海岸付近では枕状溶岩なども認められる。島間付近での走向は概ね北東－南西方向で、傾斜は北西方向であるが、場所によっては小規模褶曲や小断層などが顕著で走向・傾斜は変化に富んでいる。

遺跡周辺ではこれらの堆積岩類を覆って、厚さ数ｍの薄い段丘堆積物が谷沿いの狭い範囲に分布する。段丘堆積物の大半は円～亜円礫で、主に熊毛層群起源の砂岩・頁岩からなる。遺跡内ではこれらの堆積物は認められない。



第２図　横峯Ｃ遺跡の位置（番号は第３図に対応）

２．遺跡周辺の火山噴出物

１．阿多火山灰

段丘礫層の上に厚さ数十cmのロームを挟んで、風化が著しく濃いオレンジ色を帯びる火山噴出物が堆積する。島間付近では一部で火山豆石の濃集部分が認められる（奥野1990）。厚さが約30cm程度で旧地形を平行に覆って堆積し、付近一帯では噴出物内部に軽石や岩片が認められないことから降下火山灰と考えられる。

この火山灰は、a．次に述べる西之表テフラ（長岡1988）の下位、小瀬田火砕流堆積物（町田1977）の上位にある　b．鉱物組合せが普通輝石、シソ輝石、斜長石である　c．遺跡付近から北方に追跡すると厚さを増す　d．北方ではその下位に火砕流堆積物を伴うことなどから、阿多火山灰（町田・新井1983）に対比できる。

第２表　遺跡周辺の火山噴出物

名　　称	鉱物・ガラス	噴　出　源	年　　代	関連テフラ	文献
幸屋火砕流	opx cpx pnG bwG	鬼界カルデラ	6.3ka	K-Ah, Ky-p	1,2
AT火山灰 大隅降下軽石	opx cpx (qt) pnG bwG	姶良カルデラ	22ka		3,4
種Ⅳ	opx cpx	鬼界カルデラ（？）	30ka		5
種Ⅲ	opx cpx	鬼界カルデラ（？）	38ka		5,7
種Ⅱ	opx cpx	指宿唐山	？		5
種Ⅰ	opx cpx	指宿唐山	？		5
西之表テフラ	opx cpx qt pnG bwG	鬼界カルデラ	75ka	K-Tz	6,7
阿多火山灰 阿多火砕流	opx cpx (ho) pnG bwG	阿多カルデラ	95ka		8,9

1.宇井1973　2.町田・新井1978　3.町田・新井1976　4.Kobayashi et al.1983　5.奥野・小林1992　6.町田・新井1983
7.長岡1988　8.大場1991　9.町田・新井1992

２．西之表テフラ

阿多火山灰の上には厚さ数十cmの茶褐色ローム層が堆積するが、その上には特徴的な鮮黄色を帯びる火山噴出物が堆積する。

遺跡周辺では鮮黄色と淡黄橙色の色調の違い、および堆積相の違いから２層に区分できる。下部層は最下位に結晶の目立つ薄い層があり、その上に弱い葉理を持つ細粒な火山灰が堆積する。上部の層は細粒な火山灰からなり多量の火山豆石を含む。大きなものはウズラ卵大のものも認められるが、大半のものは大人の小指大である。火山灰は全体に塊状で、成層構造や級化構造は見られない。両者の間にはっきりした不連続面が認められず、全体として一連の堆積物と考えられる。下部層の厚さは30～40cm、上部層の厚さは30cm前後である。

この連続した２枚の火山噴出物は、a．弱い成層構造や斜交葉理を持つ下部層と、多量の火山豆石を含む上部層のセットになっていること　b．特徴的な鉱物として高温型石英を含むこと　c．北方へ追跡すると厚さが増すことなどから、長岡（1988）の西之表テフラに対比できる。長岡は模式地において西之表テフラを下部から順にNs－１・Ns－２・Ns－３の３層に区分したが、遺跡周辺で見られる西之表テフラは、その特徴から下部層はNs－１に上部層はNs－２に対比できる。

西之表テフラの上位には、赤茶色～茶褐色を帯びた粘質の強いロームが１～1.5mの厚さで堆積する。下部はやや赤っぽく上部はやや茶色っぽいが、両者の境界は不鮮明ではっきりしない。

3．遺跡内の火山噴出物

1．種Ⅲおよび種Ⅳ

遺跡外ではAT層の下位に約30cmの厚さの風化土壌帯があり、さらにその下位に明瞭な2枚の火山灰層が堆積する。奥野・小林（1992）はこの2枚の火山灰層を区別し、下位の火山灰層が長岡（1988）により種Ⅲと命名されたものに相当するとし、上位の火山灰層を新らたに種Ⅳとして定義した。

遺跡内では種Ⅳ火山灰と推定される層の堆積状況はやや不明瞭であるが、全体にやや硬質で薄いオレンジ色を帯びた風化の著しい堆積物となっている。ブロック状の堆積状態で上部層との境界は不規則に入り組んでいるが、下位層との境界は比較的安定しており直線的である。ただ、一部では下位の土壌帯と漸移するように見えることもある。

種Ⅲに対比される火山灰層は、種Ⅳに対比される層の約30cm下位にある。全体に濃いオレンジ色をした細粒の火山灰層で、風化が進んで粘土化が著しい。火山灰層の連続性は良好でしっかりした堆積状況である。

種Ⅲおよび種Ⅳの鉱物組成およびopxの屈折率は第3表に示されるようであり、これから両者を区別することは困難である。また、両者には火山ガラスがわずかに含まれるが、それらの化学組成は第4表に示される。SiO_2の量は両者とも76%前後で、他の組成もほぼ似通っている。火山ガラスの量も少ないことから、これらの火山ガラスがそれぞれ別の層に由来する一次的なものか、それともどちらか一方の層に由来し他方に混入するのか、現時点では判断ができない。

この層の下位には、AT火山灰上に発達するいわゆるチョコ層と呼ばれる層に良く似た、粘質の強い黒茶色の土壌がある。

2．大隅降下軽石とAT火山灰

黒茶色土壌の上位には鮮赤橙色でオガクズ状の火山噴出物が堆積するが、粘度や色調の違いにより3層に区分される。

① 下部層は濃いオレンジ色をしたオガクズ状の火山灰様堆積物であるが、やや粒状であり軽石の壊れた破片が多く見られる。全体に含水率が大きくベトベトする。この部分は肉眼的にも軽石を含むこと、含まれるガラスの半分が軽石型の形態を示すこと、北部にいくに従い厚さが増してくること、および火山ガラスの屈折率などから姶良カルデラ起源の大隅降下軽石（Kobayashi・et al、1983）と判断される。

② 中部はやや粗粒な結晶の多い層で、白色をした長石の結晶が目立っている。上部になるにつれ結晶粒は小さくなっていく。全体の厚さは1～2cmで、それほど厚くない。

③ 上部は中部から連続する。やや明るい黄橙色をした火山灰様堆積物で、全体に細粒で粘質が強い。遺跡付近では厚さ10cm前後であるが、北部に行くに従い厚くなる。この火山灰には無色透明なバブルウォール型火山ガラスが多量に含まれるが、火山ガラスおよびopxの屈折率は第3表のようであり、また火山ガラスの化学組成も第4表のようであり、姶良カルデラ起源の入戸火砕流堆積物に伴うAT火山灰（町田・新井1976）のそれと一致する。中部層と上部層の

第３表　火山ガラス屈折率

テフラ名称	記号	噴出源	火山ガラス標準値 [1]		火山ガラス値　横峰C		opx標準値	opx値 横峰C
			タイプ	n	タイプ	n	γ	γ
幸屋火砕流	Ky	鬼界カルデラ	bwG,pnG	1.508－1.516	bwG	1.509－1.516	1.708－1.713	1.708－1.712
			(nodal range)	1.509－1.511	(nodal range)	1.510－1.512	1.710－1.711	
AT火山灰	AT	姶良カルデラ	bwG,pnG	1.498－1.501	bwG	1.498－1.501	1.728－1.734	1.727－1.734
			(nodal range)	1.499－1.500	(nodal range)	1.499－1.500	1.732	1.731－1.733
種IV [2]	TnIV		――――		――――		――――	1.700－1.710
							(nodal range)	1.705－1.709
種III [3]	TnIII	鬼界カルデラ	――――		――――		――――	1.704－1.709

1:町田・新井1992　2:奥野・小林1992　3:長岡1988　　新井房夫氏による

第４表　火山ガラスの化学組成

	SiO_2	Na_2O	MgO	Al_2O_3	K2O	CaO	TiO_2	FeO	備　考
2層	75.35	3.21	1.04	10.13	2.46	2.94	0.45	4.42	ｱｶﾎﾔ
4層	75.57	3.02	1.11	9.63	2.62	2.84	0.46	4.76	ｱｶﾎﾔｶﾞﾗｽ混入
6層	79.42	2.92	0.68	9.89	2.93	1.81	0.11	2.24	AT
8層	76.61	2.79	0.95	9.85	2.52	2.49	0.48	4.31	TnIV
10層	76.95	2.65	0.77	9.52	2.63	2.40	0.53	4.56	TnIII

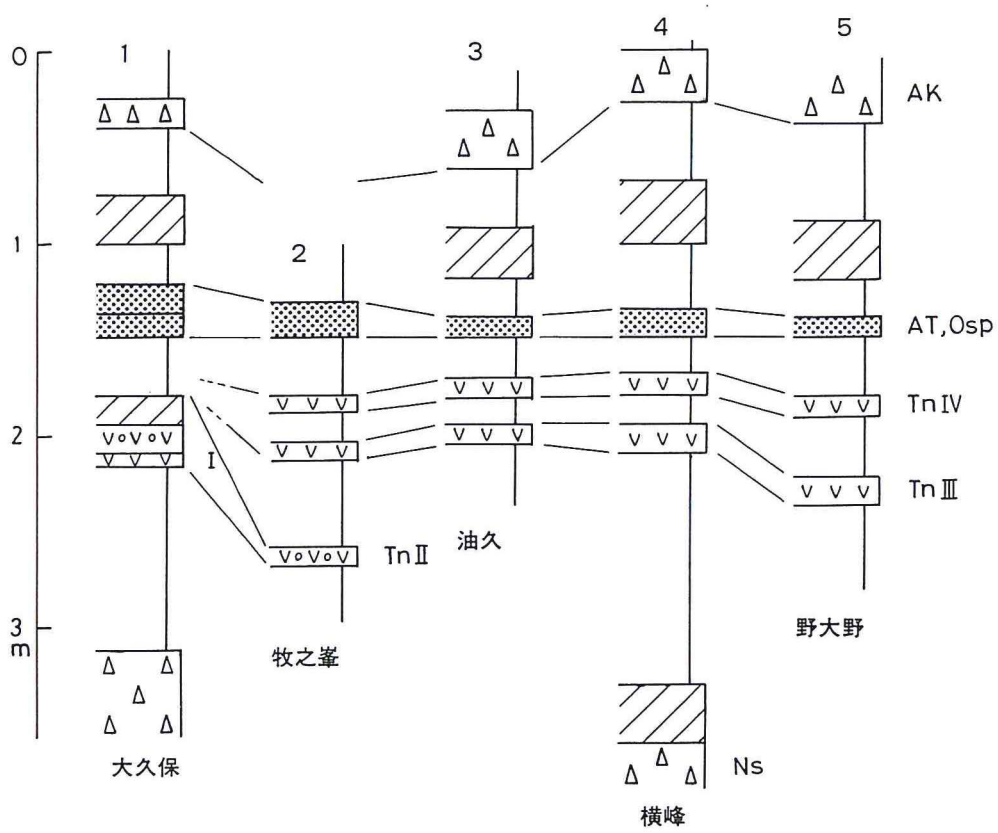
西田史朗氏による

間には風化土壌帯や侵食面などが存在しないことから両者は連続した噴火の堆積物であり、粒度の違いによりふるい分けられたと推定される。

AT火山灰層の上位には黒茶褐色を帯びる粘質土壌が厚く堆積するが、遺跡付近も含めた種子島全島で、この層中に薄いベージュ色をした火山灰様堆積物が挟まれる。この層は上下層との境界が不鮮明であること、厚さの変化が一定しないことなどからローム性堆積物と考えられる（奥野私信）。

３．アカホヤ

黄褐色土壌の上位には、軽石・岩片の混じりで厚さ30～50cmの赤橙色火砕流堆積物が堆積する。遺跡内ではこれに伴う降下軽石や火山灰は見られない。種子島南部の多くの地点で、火砕流堆積物上位に火山灰層が認められる（奥野1990、成尾・奥野1991）ことから、ここでは侵食により失



第３図　火山噴出物の対比

われたと推定される。また、降下軽石も分布主軸からはずれ最初から堆積しなかったか、堆積した量が少なく侵食により失われた可能性がある。

火砕流堆積物中の軽石は硬質のものが多く、スポンジ状の良く発泡したものはあまり見られない。軽石は最大でも径３㎝程度で、一般的な軽石の大きさは１～２㎝程度で全体に小さい。大きな岩片はほとんど認められないが、径５㎜前後の小岩片はかなり多く入っている。火砕流堆積物は全体に良く締まった印象である。

この火砕流堆積物は地表面に一番近い噴出物で、種子島の大半の地域で下部に降下軽石を伴い上部に火山灰を伴う。また、淡茶褐色のバブルウォール型火山ガラスを多量に含んでいるが、火山ガラスおよびopxの屈折率は第３表のようであり、火山ガラスの化学組成は第４表のようでアカホヤのものと一致する。このようなことから、この層はアカホヤ中の火砕流（幸屋火砕流、宇井1973および町田・新井1978）に相当すると考えられる。

種子島中～南部では、アカホヤの上位に真黒色をした腐植土が厚さ数十㎝で堆積するのみで、火山噴出物は認められない。

4．火山噴出物の年代

1．阿多火山灰

町田・新井（1983）らは関東地方の火山灰層序との対比を行い、阿多火山灰が箱根起源のKmP8テフラとKmP9テフラの間に挟まることから、阿多火砕流堆積物の噴出年代をおおよそ8.5−9万年前と求めた。一方、大場（1991）は海底に堆積する阿多火山灰と有孔虫との関係から、阿多火山灰の噴出年代はステージ5.3と5.4の間にあると推定し、噴出年代は10−11万年前にさかのぼる可能性を指摘している。

2．西之表テフラ

西之表テフラについては^{14}C法による年代測定値は無く、2つのTL年代（76.9±7.1、101±12Ka）が得られている。一方、段丘堆積物との関係や関東地方におけるK−Tz火山灰の層序（御岳第1軽石層の直上）などから、約7.5万年前と推定されている。（町田・新井1983）。ただ、これまでの年代の枠組みが古くなる可能性があり（町田・新井1992）、今後の研究の結果によっては古くなるかもしれない。

3．種ⅢおよびⅣ

遺跡内では西之表テフラと大隅降下軽石の間には種Ⅲと種Ⅳのみが挟まっているが、種子島の広い範囲で種Ⅲの下に種Ⅱ・Ⅰが堆積している。模式地においては種Ⅱ・Ⅰは間に薄い風化層またはローム層を挟んでいるが、大半の地点でほとんど連続的に堆積するように見える。第3図に示されるように西之表テフラ、種Ⅰ・Ⅱ、種Ⅲ・Ⅳ、大隅降下軽石の間はほぼ等間隔であり、奥野・小林（1992）は年代の判明している上下の噴出物との関係から、種ⅢとⅣは約8,000年の間隙をおいて噴出したと推定した。これに従えば種Ⅲの噴出年代は約38,000年前、種Ⅳの噴出年代は30,000年前と考えられる。ただ前述のように、西之表テフラと大隅降下軽石の年代が古くなれば、種Ⅲ、Ⅳの年代も古くなる可能性がある。

4．大隅降下軽石およびAT火山灰

大隅降下軽石やAT火山灰は間に顕著な侵食面や風化土壌帯を挟まないことから、数ヶ月の間をおいて連続的に噴出したと考えられ、それらの噴出年代は2.1−2.2万年前（町田・新井1976）とされてきた。しかし、近畿地方の2地点で採取されたAT上下にある泥炭の^{14}C年代は24,720±290yBPであり（松元・他1987）、従来より約2,000年古い値が得られている。町田・新井（1992）はこのことも考慮し、これまでに測定された80余例をもとに2.1−2.5万年の間に入ることは確実であるとした。

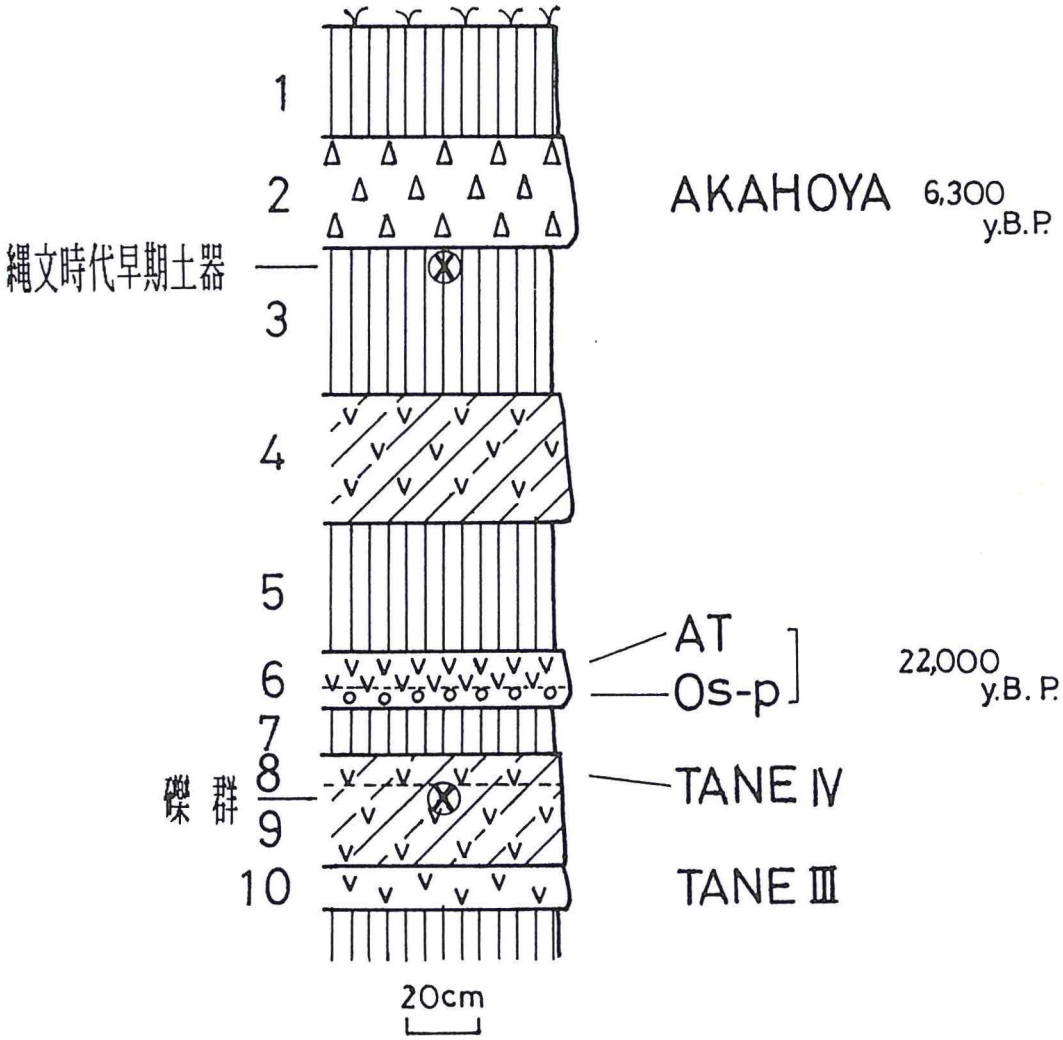
5．アカホヤ

アカホヤについては多数の^{14}C年代が測定されているが、町田・新井（1978）はそれらをまとめて約6,300年前の噴出物であるとした。アカホヤについてはそれ以降さらに多数の年代が測定されているが、大半が6,000年前後におさまっており町田・新井による噴出年代は妥当である。

5．遺構・遺物の出土層準

旧石器時代の遺構と考えられる礫群が遺跡内の西端で検出されたが、その出土層準はＡＴ火山灰・大隅降下軽石の約50㎝下位で、硬質の種Ⅳ層直下の位置に相当する。付近一帯で広範囲に調査を行ったにもかかわらず、どの地点においても種Ⅳ層とその下位の種Ⅲ層との間には段丘礫や転石などの岩片は挟まれておらず、黒茶～茶褐色のいわゆるロームのみが堆積していた。このことから判断して、遺跡内で検出された集石は自然の作用によるものでは無いと思われる。

縄文時代早期の遺構はアカホヤ直下に検出されている。遺跡でのアカホヤは火砕流堆積物のみであり、厚さ数十㎝もあることからアカホヤ上位の遺物が下位に混入する可能性は少なく、この遺物はアカホヤ直前の遺物と判断される。



第４図　遺物、遺構の出土層位

謝辞：本報告を書くにあたり、群馬大学教育学部名誉教授新井房夫先生にはテフラ中の火山ガラス、およびopxの屈折率を測定して頂いた。奈良教育大学助教授西田史朗先生には、火山ガラスのEDXによる化学組成測定をして頂いた。さらに、長崎大学教育学部長岡信治博士には種子島のテフラ全般についてご教示頂いた。最後になったが、金沢大学文学部奥野充氏には現地調査に同行して頂き、種子島のテフラについて詳細なご教示を頂いた。

以上の方々に対し心より感謝申し上げます。

文　　献

橋本　勇（1962）：九州南部における時代未詳層群の総括　九大教養地学研報　No.9　13－69

早坂祥三・岡田博有・福田泰英・児島正憲（1983）：種子島の地質　日本地質学会第90年学術大会巡検案内書　113－134

Kobayashi, T., Hayakawa, Y. and Aramaki, S. (1983)：Thickness and grain-size distribution of the Osumi pumice fall deposit from the Aira caldera.　火山　2集　28　129－139

町田　洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰　－姶良Tn火山灰の発見とその意義－　科学　46　339－347

町田　洋（1977）：テフロクロノジー（含資料集付2）　日本第四紀学会編「日本の第四紀研究－その発展と現状」　東大出版会　59－68　373－391

町田　洋・新井房夫（1978）：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ　－アカホヤ火山灰　第四紀研究　17　143－163

町田　洋・新井房夫（1983）：鬼界カルデラ起源の新広域テフラと九州における更新世後期大規模火砕流の噴出年代（演旨）　火山　2集　28　206

町田　洋・新井房夫（1992）：火山灰アトラス　東京大学出版会　p.276

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）：姶良Tn火山灰（AT）のC年代　第四紀研究　26　79－83

長岡信治（1988）：最終間氷期末に起きた鬼界カルデラの珪長質火砕流噴火と火砕サージの形成　地学雑　97　156－169

成尾英仁・奥野　充（1991）：アカホヤ火山灰の研究史　潮流　No.5　15－21

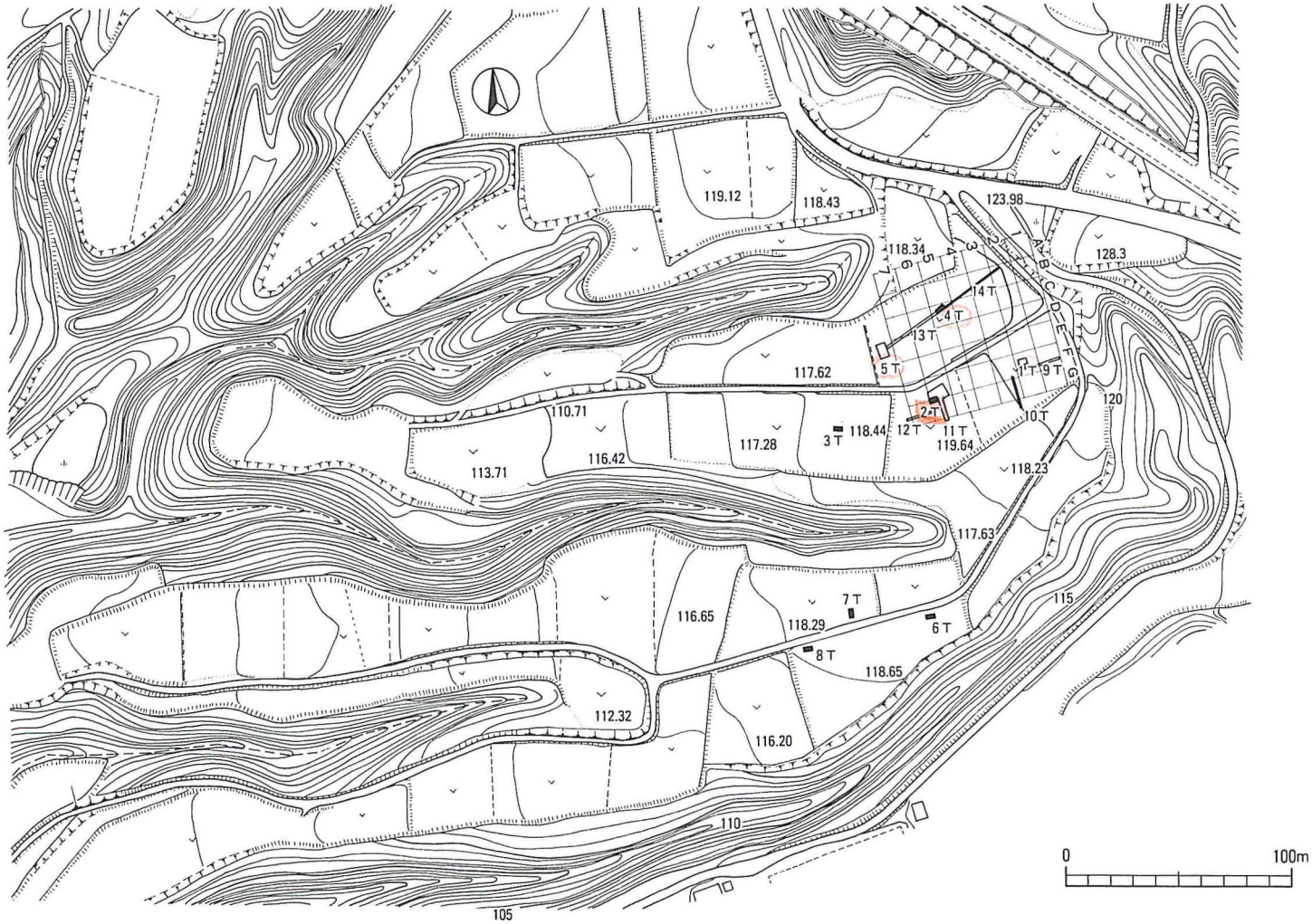
奥野　充（1990）：種子島に分布するテフラ　－考古学と地質－　潮流　No.4　1－4

奥野　充・小林哲夫（1992）：種子島に分布する後期更新世テフラ　日本第四紀学会講演要旨集　66－67

大場忠道（1991）：酸素同位体比層序からみた阿蘇4テフラおよび阿多テフラ　月刊地球　13　2　24－227

宇井忠英（1973）：幸屋火砕流　－極めて薄く拡がり堆積した火砕流の発見　火山　第2集18　1　53－168

第５図　横峯Ｂ遺跡地形図及びトレンチ配置図



第６図　横峯Ｃ遺跡地形図及びトレンチ配置図

第７図　横峯Ｃ遺跡工事施行後の地形図

第４章　調査の概要

第１節　調査の概要

南種子町横峯Ｃ遺跡は、西側にゆるやかに傾斜する標高120ｍの台地上に立地する。西側に屋久島が全貌でき、北側の尾根からは太平洋が望める。地形は種子島特有の低い山地に、小谷が入り込んでおり、本遺跡も両側を小谷に挟まれ舌状に突き出した台地にある。調査は、10月19日（月）から行い、２×４ｍを基本とするトレンチを１～５トレンチまで分布調査で確認された表採域ないしその周辺に設定し、６～８トレンチを表採域の南側のやや幅の狭い、表採域と同一地形の台地に設定し、それぞれ掘り下げた。その結果、１・２・４・５トレンチで鬼界カルデラ起源のアカホヤ層の直下から縄文時代早期の遺物が出土し、１トレンチからは過熱によって破砕したと判断される小礫が、数十個検出され、集石遺構が存在する可能性があった。そこで、さらに１トレンチの拡張と、範囲確認のために９トレンチ（２×14ｍ）・10トレンチ（１×15ｍ）・11トレンチ（１×12ｍ）・12トレンチ（１×30ｍ）・13トレンチ（１×26ｍ）を設定し、掘り下げた（第６図）。南側の台地については、すでに縄文時代早期の包含層の下まで削平されており、遺物の散布も見られなかった。遺跡の範囲は約3000㎡（第７図）で、昭和30年代に行われた、畑地造成によって、Ⅲ層のアカホヤ層から上位はすでに削平されており、遺物は浅いところでは深さ10㎝から出土する状況で、遺跡については現状保存（地区除外）ないし盛土による保存が必要であった。遺物包含層の下層については、この時点では縄文時代早期の包含層から約１ｍ下までは無遺物層であることを、各トレンチで把握した。

遺跡範囲とその状況について把握できた段階で、町教育委員会・町農地整備課・熊毛支庁に現地で状況を説明し、今後の取り扱いについて協議した。その結果、現状保存は困難で緊急発掘調査を行ってほしいとの申し入れがあり、県立埋蔵文化財センター・県文化課とはかりながら、その判断に従って、期間を当初の２週間にさらに２週間延長し、緊急発掘調査を実施することとなった。南側の谷部分は盛土されることから、調査面積は3,000㎡足らずと予測された。

確認トレンチの状況を踏まえながら、アカホヤ層から上位を重機によってはぎとり、残土処理後に磁北を基準として、10ｍグリッドを設定し、北からＡ～Ｆ区、東から１～７区とした。調査は表土剥ぎの手順から、南側のＤ～Ｆ区から随時北側のＡ区に進めて行った。遺物出土状況は、Ａ－３区・Ａ－４区・Ａ－５区・Ｅ－３区・Ｅ－４区・Ｅ－５区・Ｆ－３区・Ｆ－４区が多く出土し、尾根の上部が削られたために、南北の谷側に馬蹄形に遺物包含層が残存していた状況と判断される。ただし遺物の地表での散布が少なく、Ⅴ層上面のコンタ図から、南北両側の谷頭に遺跡が形成された可能性もある。南側に集石炉が５基、北側に２基検出したが、過熱によると考えられる破砕礫が全体に散乱している状況が特に北側に顕著であった。出土遺物は、削り出しの微隆突帯文をもつ土器、口縁部に刻目を施す貝殻条痕の土器、貝殻条痕に削り出しの刻目突帯を施す土器、貝殻条痕に貼り付け瘤をもつ土器などの土器と、石鏃・石匙・磨石・凹石・敲石・石皿などの石器が出土した。なお出土状況はアカホヤ直下で、アカホヤ層と包含層は間層を挟まず、

特に土器はアカホヤの下部に一部入り込んでいた。

調査は南側のＦ・Ｇ区から順次進み、終了した南側の旧２トレンチに下層確認のため、さらに重機によって掘り下げた。包含層の下層であるＶ層上面の約１ｍ50㎝下で、重機が礫を引っかけたため、その周辺を清掃したところ、角礫による礫群らしい遺構を検出した。これは、掘り込みを伴い、炭化物を伴うもので、角礫はひび割れし赤化していた。このため以下礫群として扱うこととする。礫群は黄色パミスの下に、暗赤褐色ローム層があり、その下の固くしまった淡黄褐色層の途中に掘り込み面が観察された。礫群の平面全体の検出と、石器などの遺物の検出、遺構の性格を把握するため、旧２トレンチを北側に６ｍ東側に８ｍ拡張し調査を行った。黄色パミスについては、姶良カルデラを起源とする火山灰の可能性が考えられた。

こうした状況から、玉龍高校の成尾英仁氏に火山灰の同定を、土器などの遺物と遺構についての指導を県文化財保護審議会委員の河口貞徳氏に依頼し、11月６日（金）と、11月９日（月）にそれぞれ指導を受けた。火山灰については姶良カルデラの噴出物で、出土土器については苦浜式として従来轟系の土器として前期に編年されていたものであった。苦浜式がアカホヤ層の下から出土し、年代が確定されたことは大きな成果である。礫群もさらに１基検出された。１号礫群、２号礫群、２号礫群の検出層からは炭化物を採集して、放射性炭素による年代測定をすることとし、１号礫群については、半分を発掘しより精査を行った。２号礫群から１号礫群にかけて、２ｍグリットの千鳥掘りで検出層の発掘も一部行った。当初、緊急発掘調査に組み直した期間と予算の限度が近づき、再度現地で設計等の説明を聞き、協議を行った。その結果、工期と調査者側のスケジュールの都合上、これ以上の調査の延長は不可能で、工事を行っても遺構面の上に最低でも１ｍの厚さ以上は削らないことを確認し、事業報告書をもとに設計書とともに、後に協議を経てから工事に入ることで合意して、緊急発掘調査は一応終わることとした。礫群の検出層の掘り下げは正味で３日程度で、完掘には程遠く、石器類は検出できなかった。検出層と１号礫群と２号礫群は白砂で埋めたのちに、全体を埋めもどした。

１号礫群は半分はそのままにして埋めもどした。掘り込みのプランは80㎝×70㎝の楕円形プランで、深さ10㎝まで掘り込まれている。結局縄文時代早期包含層のⅣ層を掘りあげて、11月17日（火）に調査を終了した。

なお基本土層は第４図に準じるが、次のように対比させる。（第８図参照）

Ⅰ層　耕作土

Ⅱ層　黒褐色火山灰層　パサパサした土質で、縄文時代の包含層であるが、ここではこの層からの遺物の出土はなく、またほとんど削平され一部のトレンチにわずかに残っていた。

Ⅲ層　黄橙色火砕流噴出物層　鬼界カルデラ起源のもので、詳細は第３章に詳しい。第４図－２層にあたる。

Ⅳ層　茶褐色弱粘質火山灰層　この上位、Ⅲ層の直下に遺物が出土する。第４図－３層。

Ⅴ層　淡褐色粘質火山灰層　Ⅳ層より粘質が強く、固くしまっている。

Ⅵ層　暗褐色粘質火山灰層　第４図－４層

Ⅶ層　淡褐色粘質火山灰層　第４図－５層

Ⅷ層　黄色火山灰層　断面ではブロック状に入っているが、面的に剥ぐと、クラックがわずかに入っているようにしか見えず、一面に黄色い層が検出される。下位にはざらざらした白色の礫や軽石が含まれる。第４図－６層。姶良カルデラ起源の噴出物である。

Ⅸ層　暗赤褐色粘土層　第４図－７層。断面図作成時には１層としてとらえたが、その後検討したところ、下位に赤褐色の火山灰層（タネⅣ）が入っており、掘り込みはこの層の下からである。

Ⅹ層　黄褐色粘質土層　固くしまった層で、この層に礫群が掘り込まれている。第４図－９層

Ⅺ層　黄色火山灰層　非常に固くしまった、粒子の細かい火山灰層である。第４図－10層

第２節　トレンチの状況（第６図、第８図）

第６図が旧地形であるが、すでに調査区の近くまで（浅い谷の谷頭の部分、３トレンチから西へ畑２枚のところ、８トレンチから西へ畑１枚）、事業が行われており調査対象地区は限定されていた。

１トレンチ

遺跡の東側は、旧地形と段差があり、畑地造成時に削平されたことが予測された。東側の状況を確認するために、２×４ｍのトレンチを設定した。20㎝程の耕作土の下にアカホヤ層がかすかに残り、その下の集石状の破砕礫が検出されたため、1.5×４ｍ拡張する。

２トレンチ

１トレンチの40ｍほど西側に２×４ｍで設定した。Ⅲ層の直下から土器片が出土した。またⅤ層の上面でも、軟質の土器の底部が出土した。東側に土層の横転が見られる。

３トレンチ

土層堆積状況は、２トレンチと同様の堆積であったが、遺物は出土しなかった。なおこれより西側は削平され、表土にすでに淡褐色のローム層が見えており、縄文時代早期の包含層は残存していない。

４トレンチ

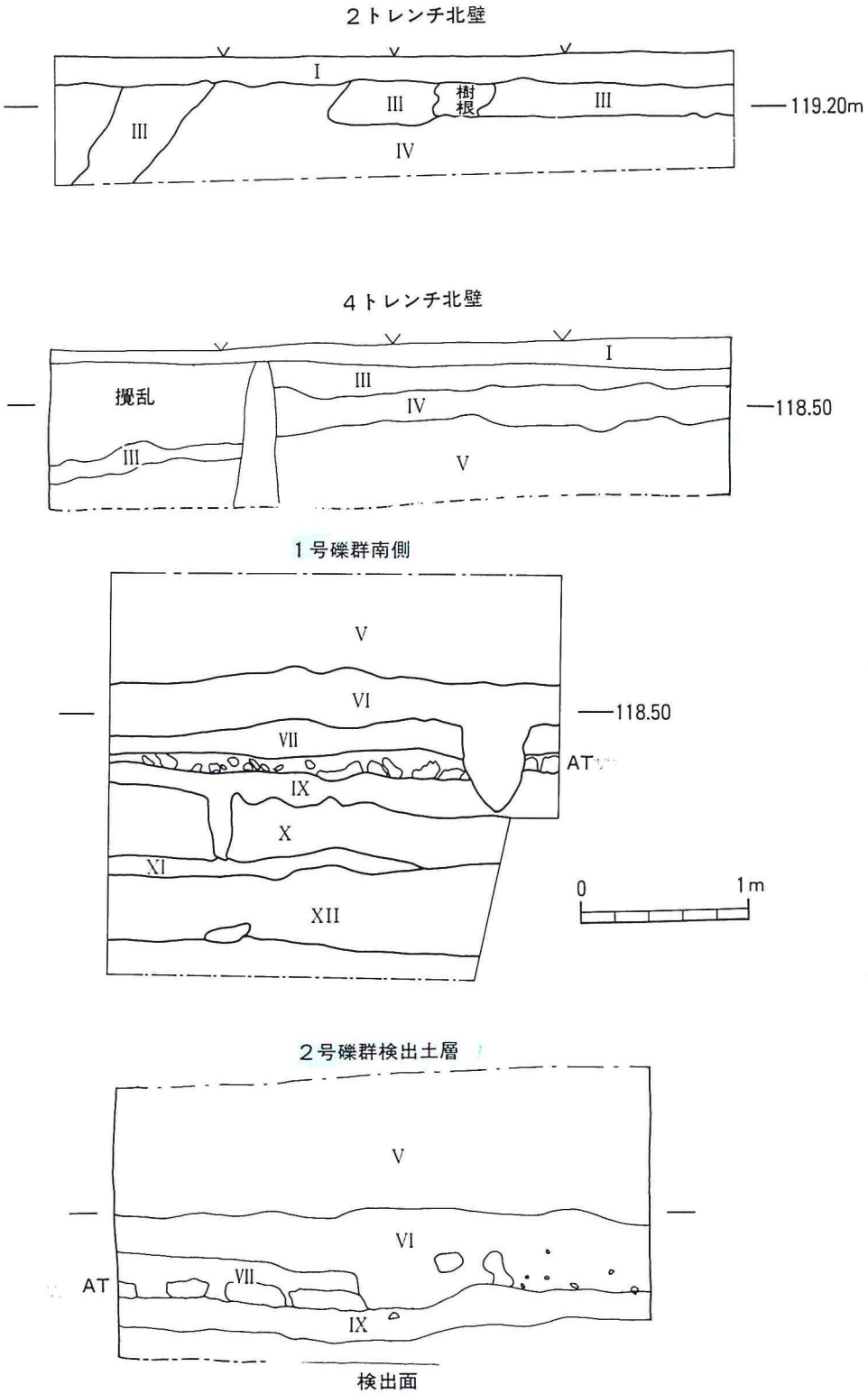
北側の谷頭に近いところに、２×４ｍで設定した。表土下40㎝ぐらいでⅢ層直下から微隆突帯の土器片と貝殻条痕の土器片と、破砕礫が出土した。

５トレンチ

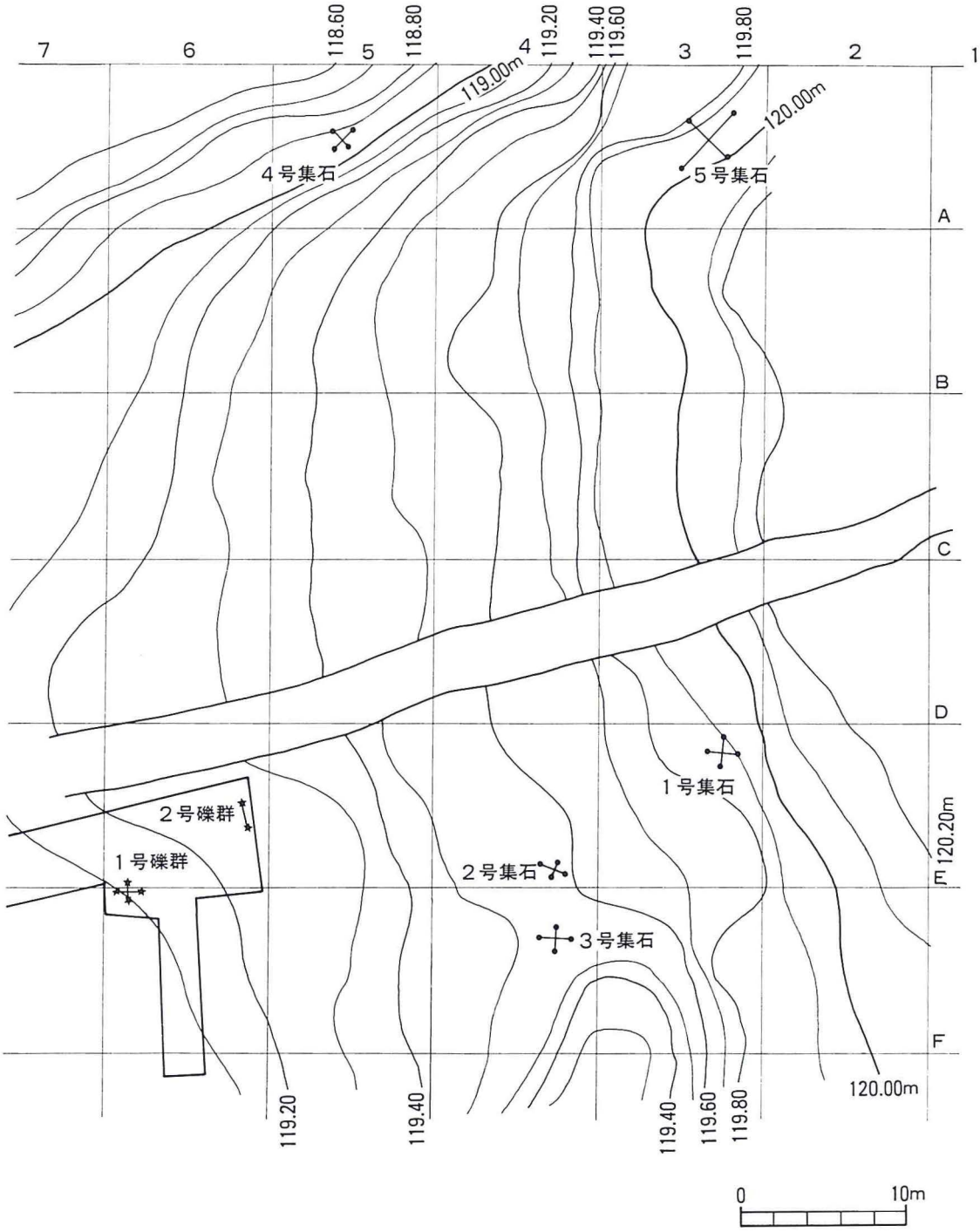
４トレンチの西側に２×４ｍで設定した。石器らしい遺物が出土したため、さらに南側に２×４ｍ拡張したが遺物・遺構は検出しなかった。５トレンチの西側は３トレンチの西側と同じ状況である。

６トレンチ～８トレンチ

それぞれ２×４ｍで設定したが、すべてのトレンチでⅣ層が削平されていた。



第8図　各トレンチの土層



第９図　グリッド図及び遺構配置図

9トレンチ〜13トレンチ

9トレンチ〜13トレンチは遺跡範囲確認のために、ほぼ1m幅で長く設定したものである。10トレンチと12トレンチでは表土の下10cmほどで遺物が出土する状況であった。9トレンチと11トレンチでは遺物はほとんど出土せず。13トレンチでは中央付近から西側では遺物は出土しなかった。縄文時代早期の遺跡のひろがりは、第16図の遺物出土状況にある部分と第7図の北側の谷頭部分の範囲である。第7図の範囲は遺跡の残存範囲で、南側は旧石器時代の遺跡の範囲としてとらえていただきたい。

横峯B遺跡（第5図）

1トレンチ

現況はさとうきび畑で、調査のしやすい道路沿いに2×4mのトレンチを設定した。表土層30cmの下に横峯C遺跡のⅣ層に相当する層から、土器片が3点出土した。縄文時代早期の時期の無文土器である。磨製石斧片（第31図 157）も出土した。

2トレンチ

道路を挟んで、西側の畑地は約2m50cmほど地下げされており、1トレンチの状況と考えあわせて、包含層の残存している可能性は小さいと判断されたが、2×4mの確認トレンチを設定し掘り下げた。Ⅴ層ないしⅦ層から上位は削平されていた。

3トレンチ

道路東側の遺跡のひろがりを確認するため、2×4mで設定し掘り下げた。表土の下にⅤ層が検出された。

以上から横峯B遺跡については、第5図に示した範囲で遺跡の残存するものと判断される。

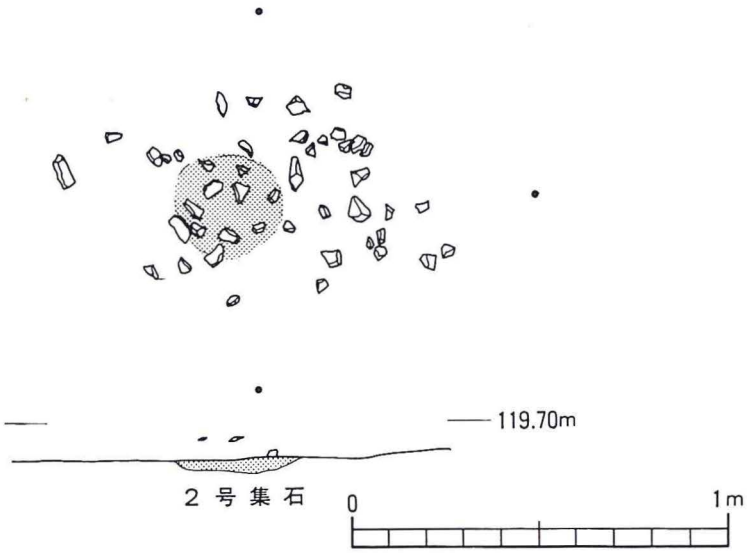
第3節　遺　　構（第9図〜第15図）

横峯C遺跡からは、5基の集石と2基の礫群が検出された。5基の集石はいずれもアカホヤ火山灰層下のⅣ層検出であり、下部に掘込みをもつ集石は遺跡の北側に2基（4・5号集石）、掘込みをもたない集石は南側に3基（1〜3号集石）検出された。2基の礫群は、遺跡の西側でいづれもⅩ層検出であった。1号礫群は重機による2トレンチ下層確認のための深掘り中に検出され、2号礫群は1号礫群付近の拡張により検出されたものである。

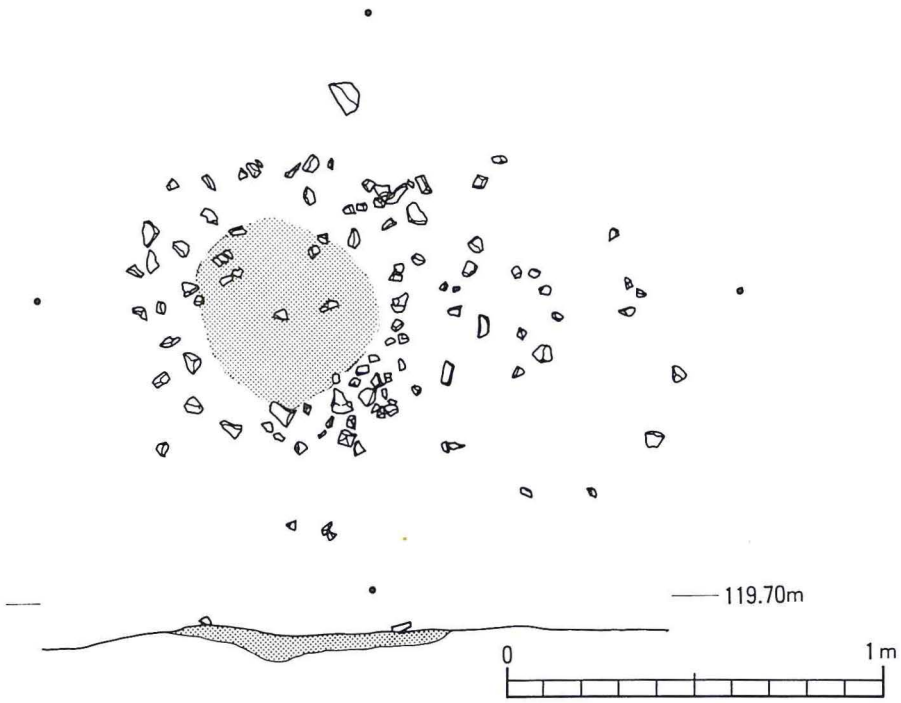
(1) 集　　石

1号集石（第10図）

E－3区の平坦部に検出された。130×90cmの範囲にほぼまとまっており、一部散在している。15cm程度の扁平な礫を最高にそのほとんどは赤化の見られる破砕礫で、総数225点であった。集石の中心部を北東側に外れた位置に45×35cmの範囲で赤褐色の焼土が見られ、深さは3cmであった。掘込みはなかった。



第10図　1 号 ・ 2 号 集 石



第11図　3　号　集　石

2号集石（第10図）

E－4区の平坦部で1号集石の南西側約12mの位置に検出された。100×60cmの範囲に10cm未満の赤化した礫が45点散在する。赤褐色の焼土が30×30cmの範囲でみられ、深さは5cmであった。掘込みはなかった。

3号集石（第11図）

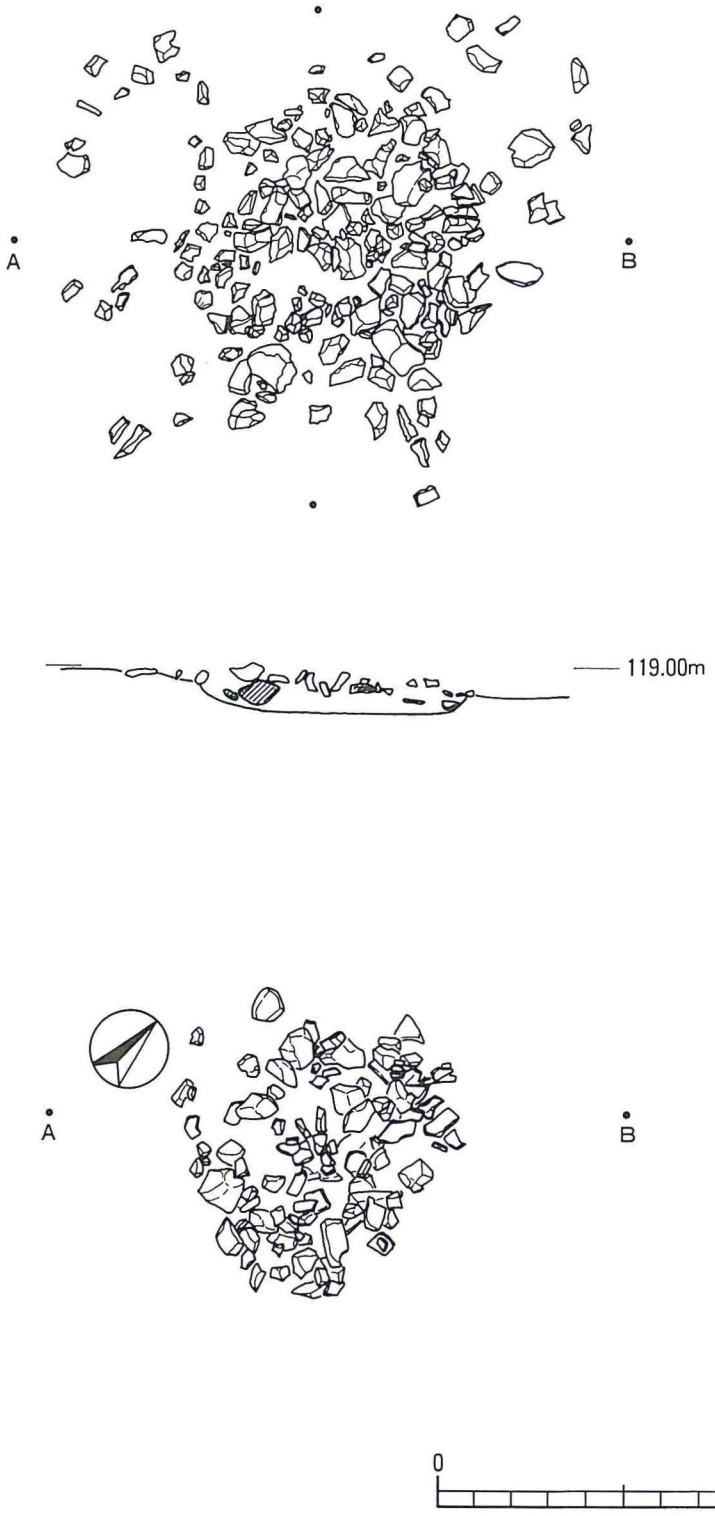
F－4区で2号集石の南側約4m、1号集石の南西側約15mに位置し、南西部から入り込む浅い谷の谷頭付近の平坦部に検出された。140×75cmの範囲に総数106点の礫を数え、若干東側に礫が流れて散在する。赤褐色の焼土は集石のほぼ中心部で大きさは50×45cm、深さ5～8cmであった。また、炭化物が多く見られた。

4号集石（第12図）

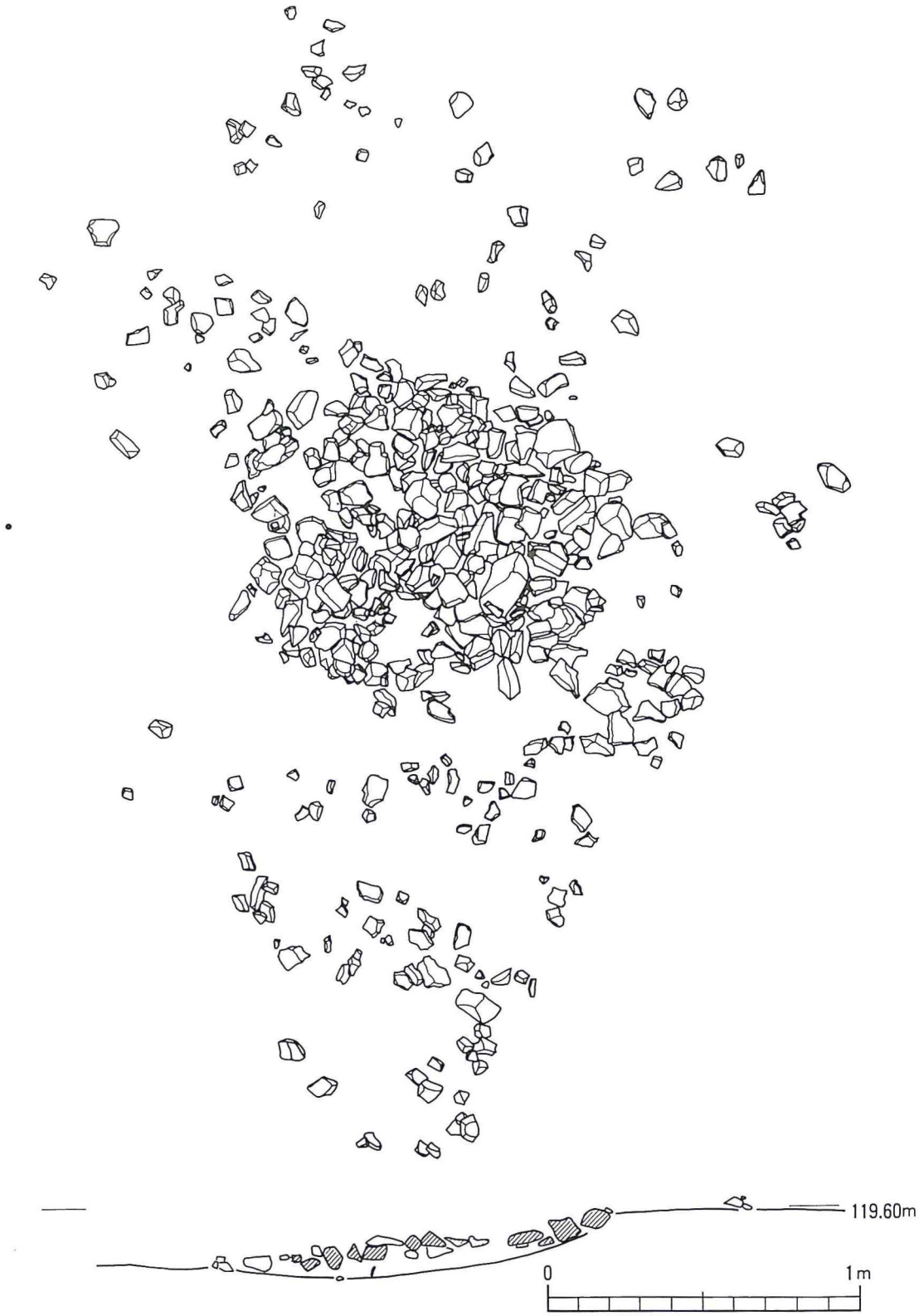
A－5区北西から南東方向へ大きく入り込む谷の谷頭付近で、北西への傾斜面に検出された。総数282点の礫が90×90cmの円形にまとまりを持ち、若干まわりに散在する。拳大の礫が多く、火熱による破砕礫や細片が多くみられた。掘り込みの大きさは70×70cmのほぼ円形で、深さは7～8cmである。

5号集石（第13図・第14図）

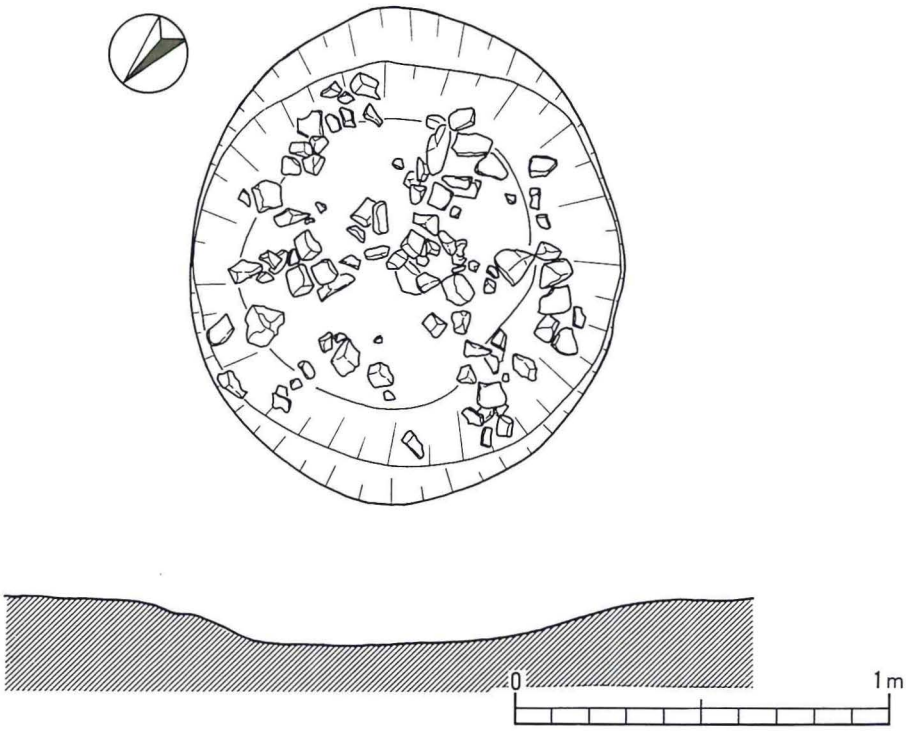
A－3区で4号集石から東へ23mに位置した傾斜面に検出された。総数580点の礫は、120×100cmの範囲に集中した部分と、そのまわりに散在した部分から構成される。径約20cmを最高にそのほとんどが拳大の角礫であった。火熱によると思われる破損礫や細片が多く、亀裂が入り赤



第12図　4　号　集　石



第13図　5　号　集　石



第14図　5　号　集　石（2）

化している。掘り込みは130×110cmでの大きさで深さは7～8cmである。中心部の埋土には炭化物が多く見られた。

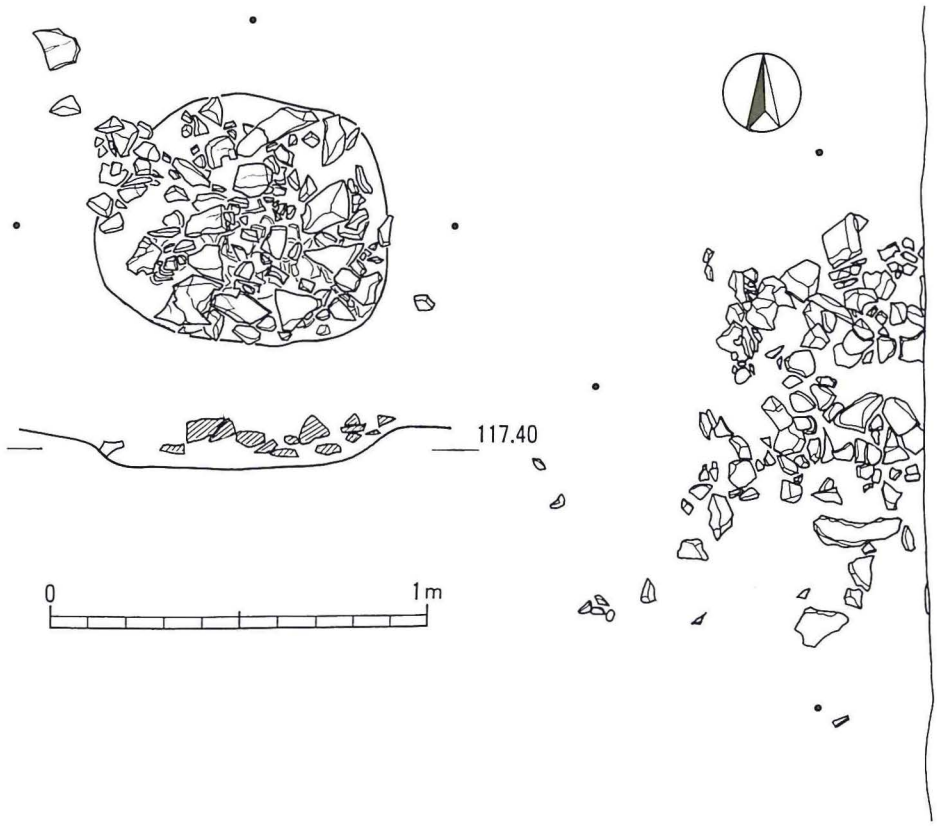
(2)　礫　　群

1号礫群

F－6区で2トレンチ下層確認中に検出された。80×70cmの楕円形の範囲に礫が集中し、一部北西側に流れている。礫は、火熱を受けその大部分は破砕礫・細片が占める。熱変成をかなり受けているため断定はできないが、石材は砂岩と思われる。掘込みは、75×65cmの楕円形で深さは約10cmであった。

2号礫群

1号礫群検出に伴い重機でAT層まで北東方向に約60㎡、南側に約20㎡拡張したのち、掘下げを進めた。その結果、E－6区の拡張区東側壁ぎわに検出された。1号礫群から北東に約8mに位置する。径が約80cmのほぼ円形の範囲に礫が集中すると思われるが、その全てを検出していないので明確ではない。掘込みの有無については確認していない。



第15図　１号礫群・２号礫群

第４節　土　　器（第17図～第29図）

出土した土器は、遺跡の南側ではⅣ層中に、北側ではⅢ層のアカホヤ層直下から出土したもので、近年の時期区分では縄文時代早期に位置付けられるものである[注1)]。土器は第１類から第６類に分類する。分類後出土層と出土状況について概観する。

第１類（第17図・第18図　１～16）

円筒形でやや口辺部でわずかに外反する器形をなし、口唇部外側に刻目を施す。口唇部内側に明確な稜をなす。外面は貝殻の背面を押し付けた条痕で、綾杉状に文様となしている。内面はナデられているが、かすかに条痕を残すものも有る。底部は平底である。

１～７は口縁部である。５と７については沈線文の土器で、文様モチーフは同じであるが、別に分類できる可能性がある。８～16は胴部である。

第２類（第18図・第19図　19～28）

円筒形もしくはやや外開きの器形で、内弯気味に立ち上がる。口唇部に刻目をいれ、外面は貝殻条痕が曲線で一見無秩序に施され、内面調整は丁寧なナデであるが、一部に貝殻条痕が残るものがおおい。器壁は薄手である。

18〜22は口縁部で、22には補修孔がある。28は条痕が直線で、内面調整が横方向に工具でナデられ（ヘラケズリ）、2類から分離できる可能性がある。器形・器壁の厚さなど量感は等しい。

第3類（第20図〜第25図　29〜108、143、146、147）

本遺跡の主体をなす土器群である。器形は口辺部が外反し、頸部がゆるくしまり、胴部が膨らみ平底の底部に至るものと、口縁部が内弯気味に立ち上がり、直線的に平底の底部に至るものが有る。口縁部は、前者が舌状で刻目を施し、後者が内側に稜をなし口唇部に面をつくり外側に刻目を施す。前者には波状口縁の可能性がある。この土器群の分類も最も特徴的なものは文様で、外面に貝殻条痕を地文に、整形時にかきあげたあるいはなで出した微隆起突帯に、貝殻で連続刺突様に刻目を施すものである。貝殻条痕は全面に施されるのではなく、空白部分をもって波状あるいは直線で引かれており、条線文と言い換えたほうが妥当である。波状のものは、施文の際の力加減によって、押し引かれているように見える。微隆起突帯は口辺部あるいは土器の上半部分になで出され、全周を巡るものと、部分的にとどまるものがある。また瘤を貼り付けたり、縦位に粘土紐を貼り付けるものも見られる。外側および口縁部の器面はナデられており、内側は工具によってナデられ、砂礫の横方向の移動がみられる（ヘラ削り）。縦位に粘土紐を貼りつけるものは、口縁部が直立するものもあると考えられる。

29・33〜35・38〜40が口縁部が外反し舌状をなすもので、30〜32・36・37・41・42〜51が円筒形に近い器形のもので、口唇部に面をつくるものである。42〜44が瘤付きの口縁部で、瘤にも貝殻の刺突がなされている。43は、口唇部の一部を押し潰して、見かけ状楕円形の瘤をつくっている。48・49は3類に特徴的な文様である波状の条痕があるが、器壁が厚くやや器高が低くなる。浅鉢形土器の可能性がある。50・51は灰色を呈し、内面にも条痕がはいり、64〜66とともに他の土器とは異質である。52〜108が体部で、52・53は頸部に当たるものと判断されるが、縦位の突帯を貼り付けている。突帯は同様に刻目をいれられている。54は瘤がついている。55〜69は微隆起突帯のあるもの、70〜92は微隆起突帯のないもの、93〜108は条痕が直線になっているものである。波状の条線と直線の条線は、87・92にみるように、組合わさっている場合もあることからも、同類とした。

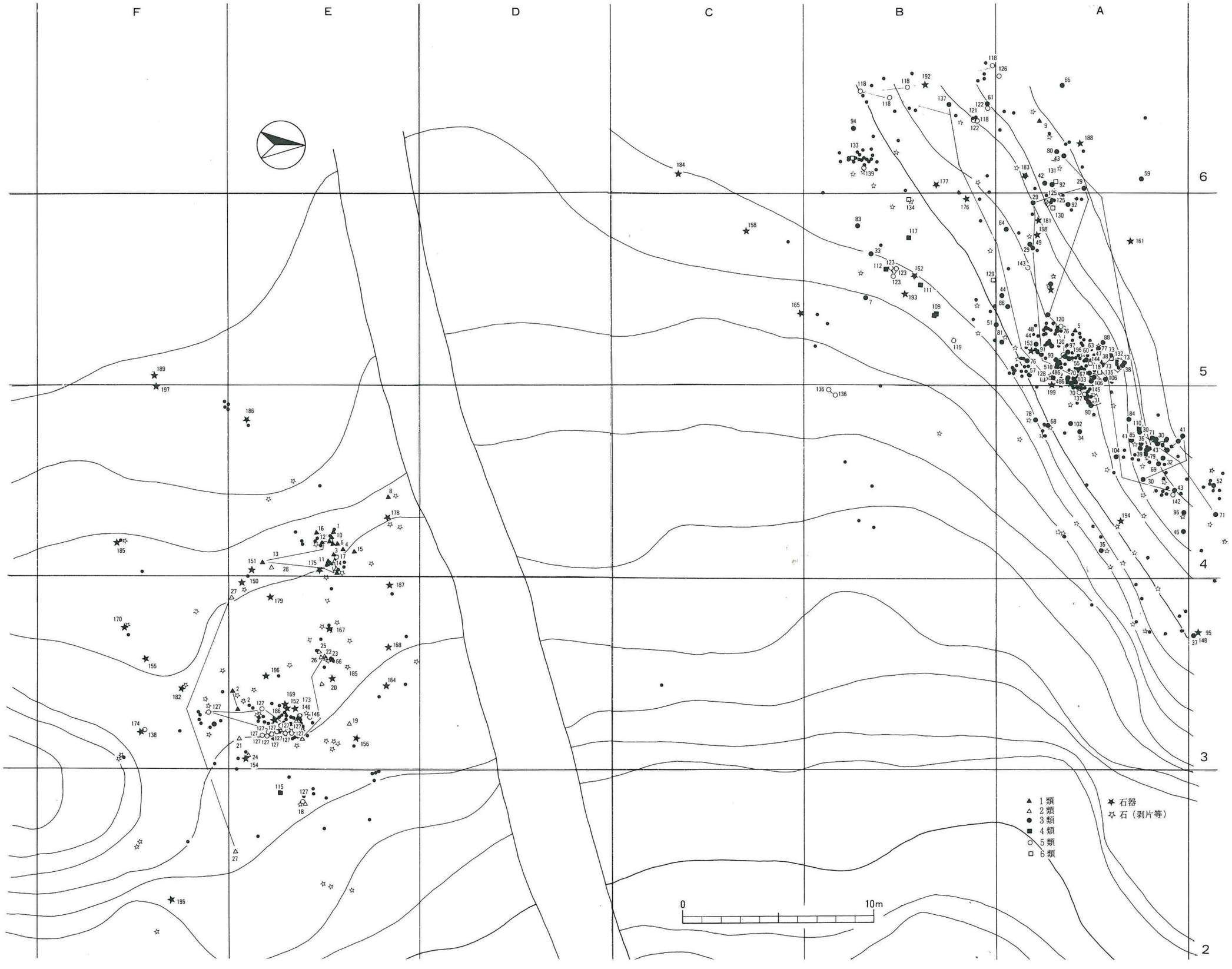
第4類（第26図　109〜117）

幅広の板状工具によってなでることで、粘土を隆起させた微隆起線文をなす土器群である。器形は外反して直線的に立ち上がる。口唇部は面をもち、外側に刻目を施す。内面は貝殻条痕によって調整されている。器壁は薄い。

109は、口縁下に10本の平行微隆起突帯と、さらにその下に3〜4本単位の微隆起突帯による直線と半円形の曲線を組み合わせた文様をなす。117まですべて同一個体であろう。器面はひび割れして、アカホヤ火山灰である黄色火山灰が付着している。

第5類（第27図　118〜127）

器形は深鉢形で、口辺部が外反するものと直立するものがある。波状口縁のものがあり、口唇部は刻目をもつものが有る。条痕は植物質のものを使用したのか、浅い条痕であるが、文様とし



第16図　遺物出土状況

て意識的に引いたものと考えられる。器面調整は外面は一部に条痕を残すナデ調整で、内面は工具によってナデられている（ヘラケズリ）ものが主体である。器形、内面調整、条痕の文様化の点で、3類と近しい。127については、くの字の口縁部をつくり、外側の一部分に沈線を浅く画くほかは無文で、内側は貝殻条痕で調整されており、一応5類として第16図にドットしたが、異質である。

第6類（第28図　128〜135）

口縁部が大きく外反し、頸部に明確な稜をもつもので、いわゆるラッパ状に外反するものである。口唇部に刻目をもつ。文様パターンは明確でなく、破片からは沈線を引くことしか看取されない。内外面とも丁寧にナデられている。胎土、色調、調整から他の土器と明確に区別される。破片のすべてを図化したもので、もっとも少量出土した。1個体分の可能性が強い。

底部（第29図　136〜147）

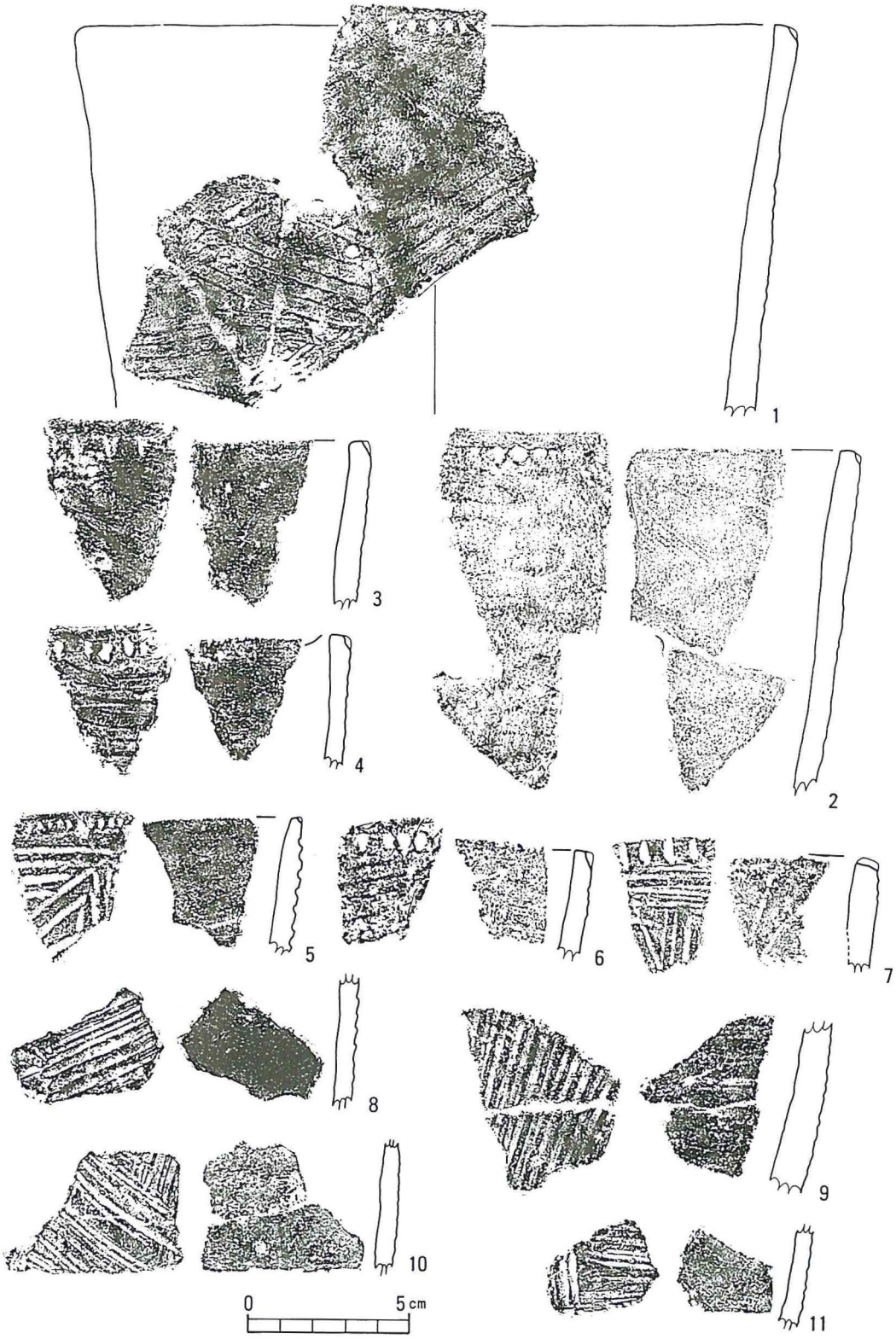
出土した底部は、すべて平底で尖底のものは見られなかった。円筒形の器形の底部（136〜138）と、142〜147のように外側に開いていく底部がある。前者が1類ないし2類の底部で、後者が3類の底部であろう。

なお個々の土器の群細は土器観察表を見られたい。

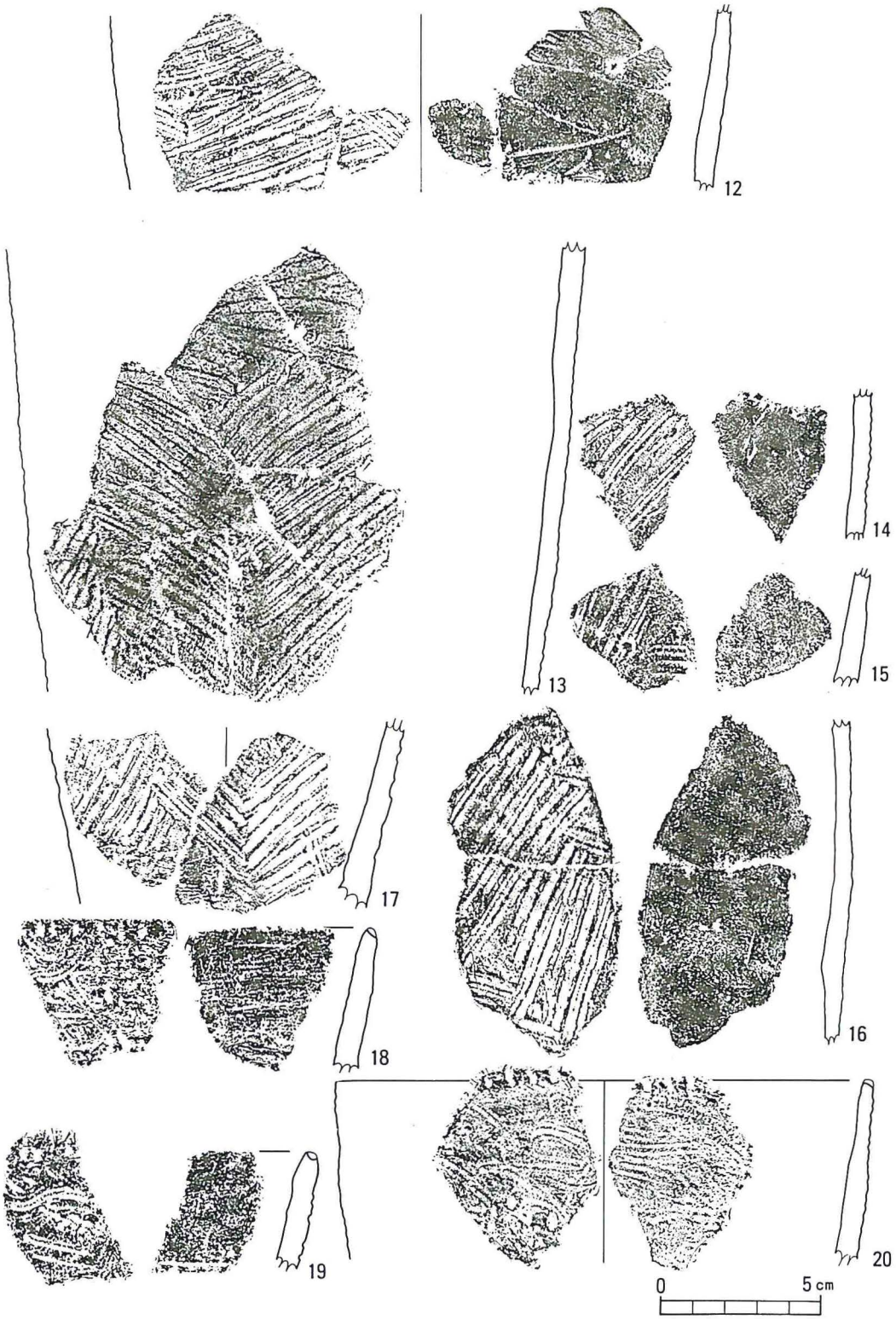
出土状況は第16図に有るように、類ごとにまとまった出土状況をなしている。大きくは南北で別れ、南側に1類・2類、北側に3類・4類・6類が出土している。出土層も相対的に3類・4類が1類より上位から出土しており、南北の分布域の違いは時期差と考えられる。1類は石坂式から系譜がたどれる型式で、貝殻円筒土器の一連の流れのものである。1類・2類を古く、3類・4類を新しく位置付けられる。共伴関係については、4類・6類がいずれも1個体分しか出土していないと考えられるが、4類は出土ドットがかなりまとまっており現位置に近く、出土層位もまず4トレンチで3類と同位から出土していることを確認しており、破片も大きいことから、3類と共伴するものと判断される。6類については、出土位置が散在しており、しかも他の土器と比べると、小破片である。土器の胎土・色調・焼成・調整からは、6類のみが異質である。北側の谷頭に広がった遺跡の状況で、塞ノ神式の分布の中心域がある可能性もある。1〜5類土器については、出土位置がよくまとまっている。

遺構の1〜3号集石と4・5号集石の形態差は、1・2類土器と3・4類土器の時代差に由来し、それぞれの文化形態に若干の差異があることを感じさせる。

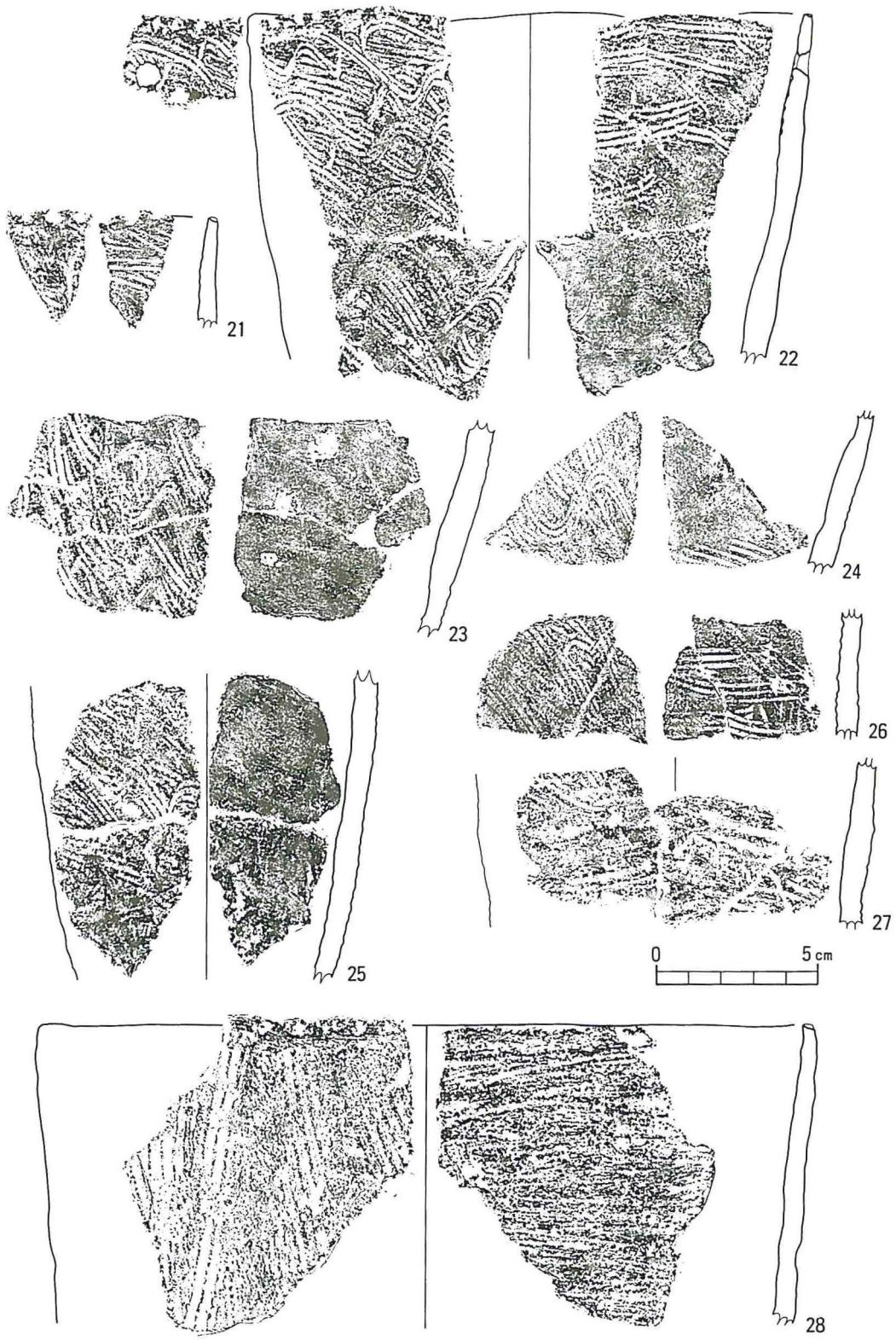
注1）新東晃一によって、鬼界カルデラの大爆発（アカホヤ）によって文化的な断絶がみられるとして、アカホヤ層を縄文時代早期と前期の時期区分にあてる学説が、発掘調査への利便さとあいまって、用いられることが多い。一方、河口貞徳は押型文土器を早期末において、塞ノ神式を前期とする。さらにアカホヤ層の下位に轟Ⅰ式（河口編年の）があり、土器文化に継続性があるものとして新東の時期区分に疑問を呈している。轟式は高橋信武によって整理され、ここでもアカホヤ以前から轟様式が存在し、土器文化に継続性があると主張されている。



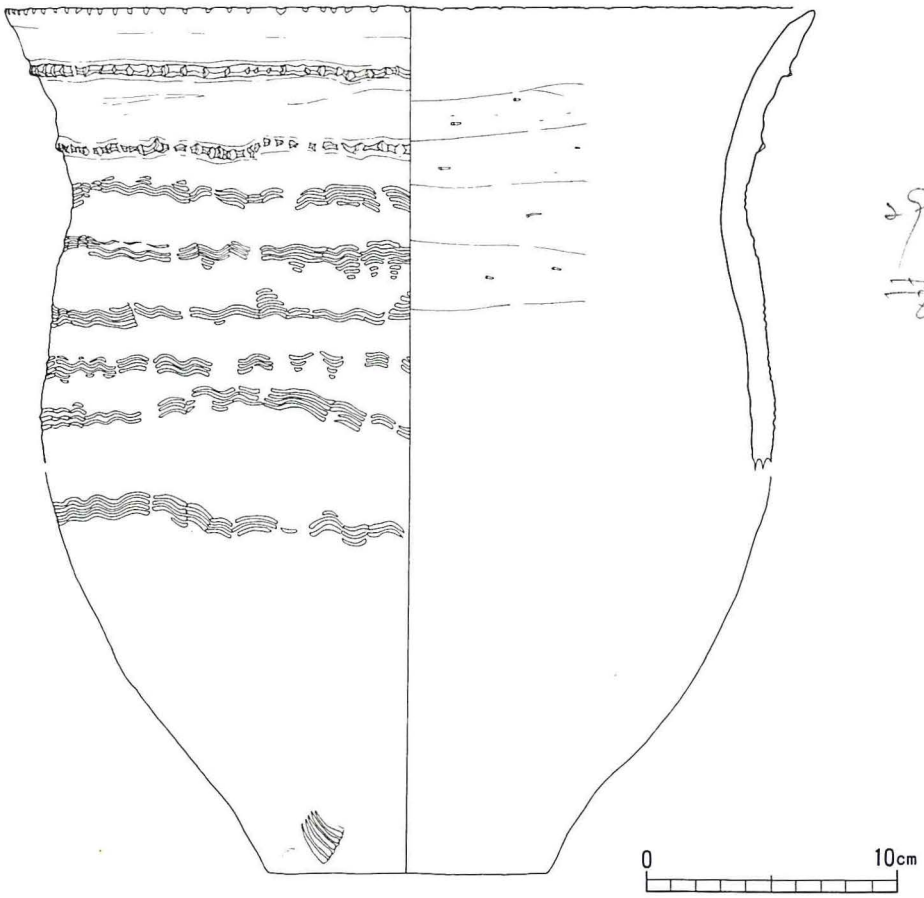
第17図　出　土　土　器（1）



第18図　出　土　土　器（2）

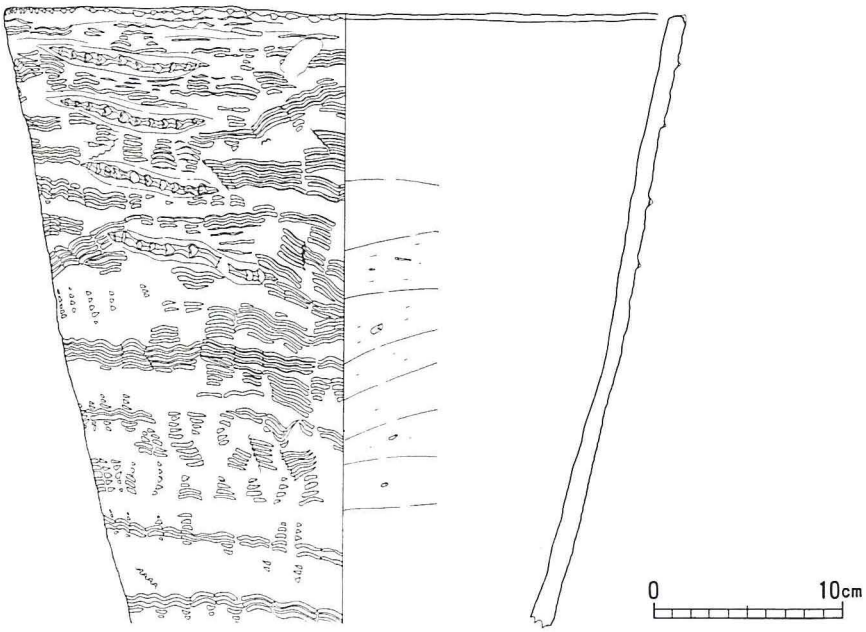


第19図　出　土　土　器（3）

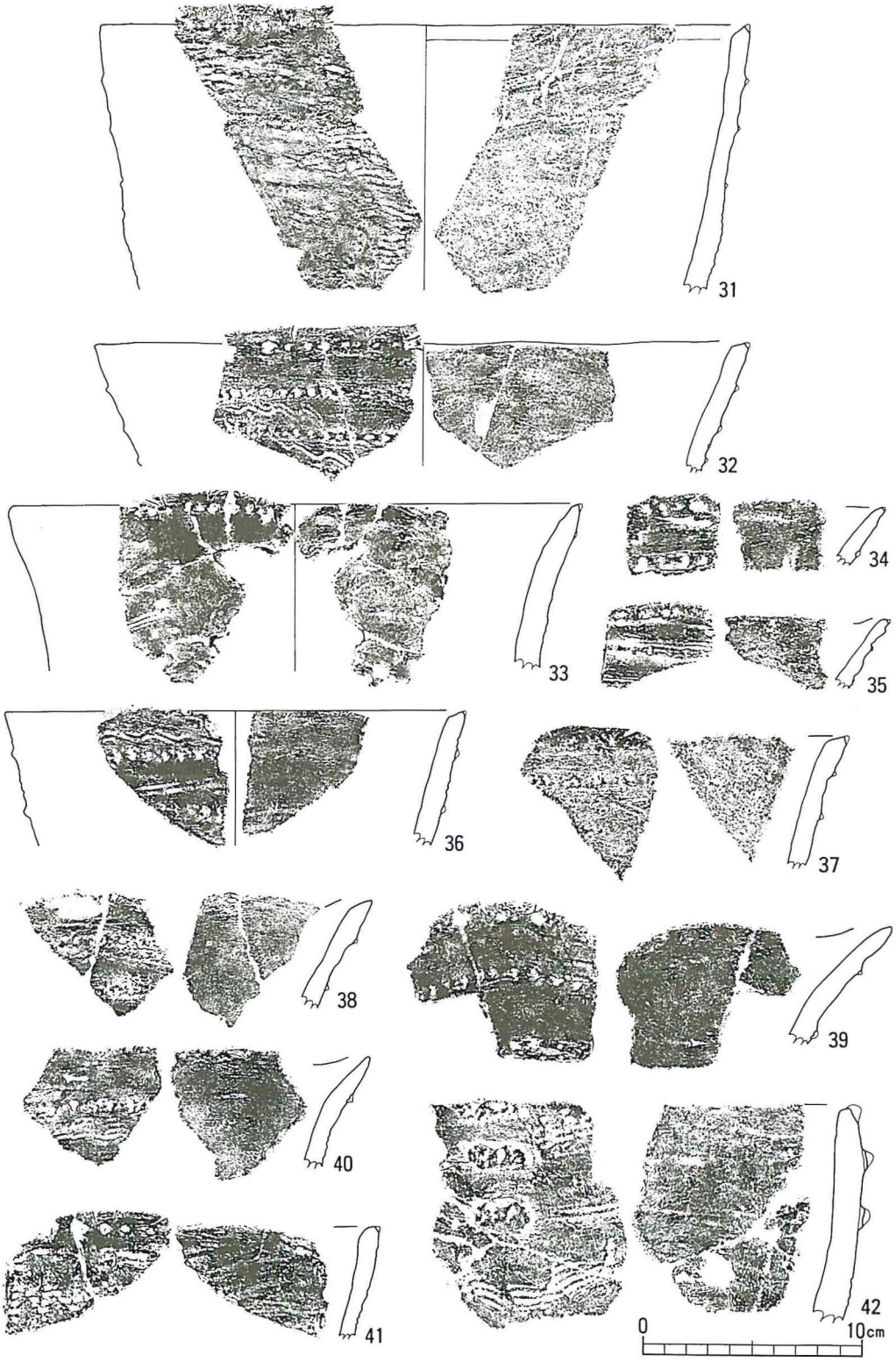


29~108
考察可

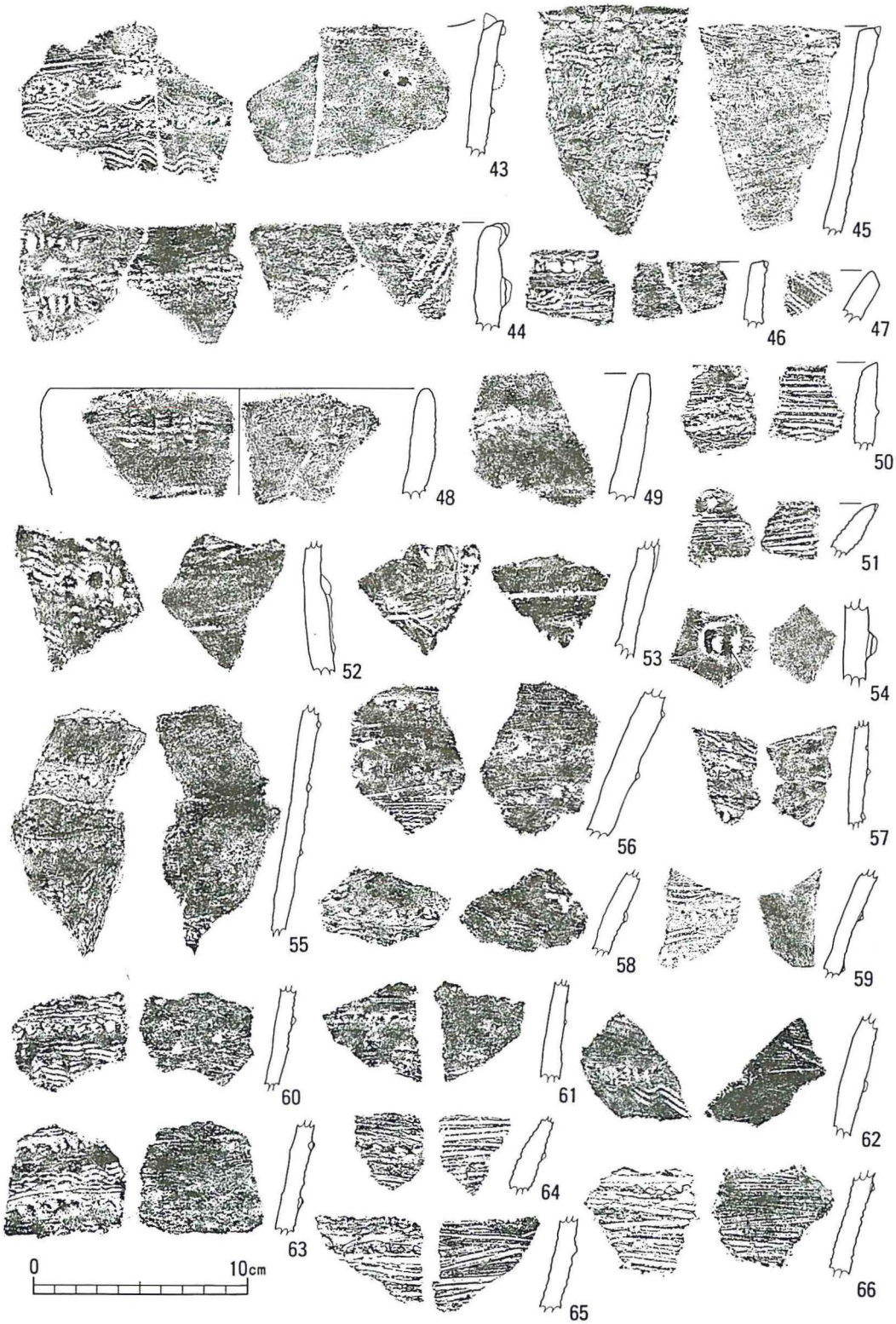
第20図　出　土　土　器（4）



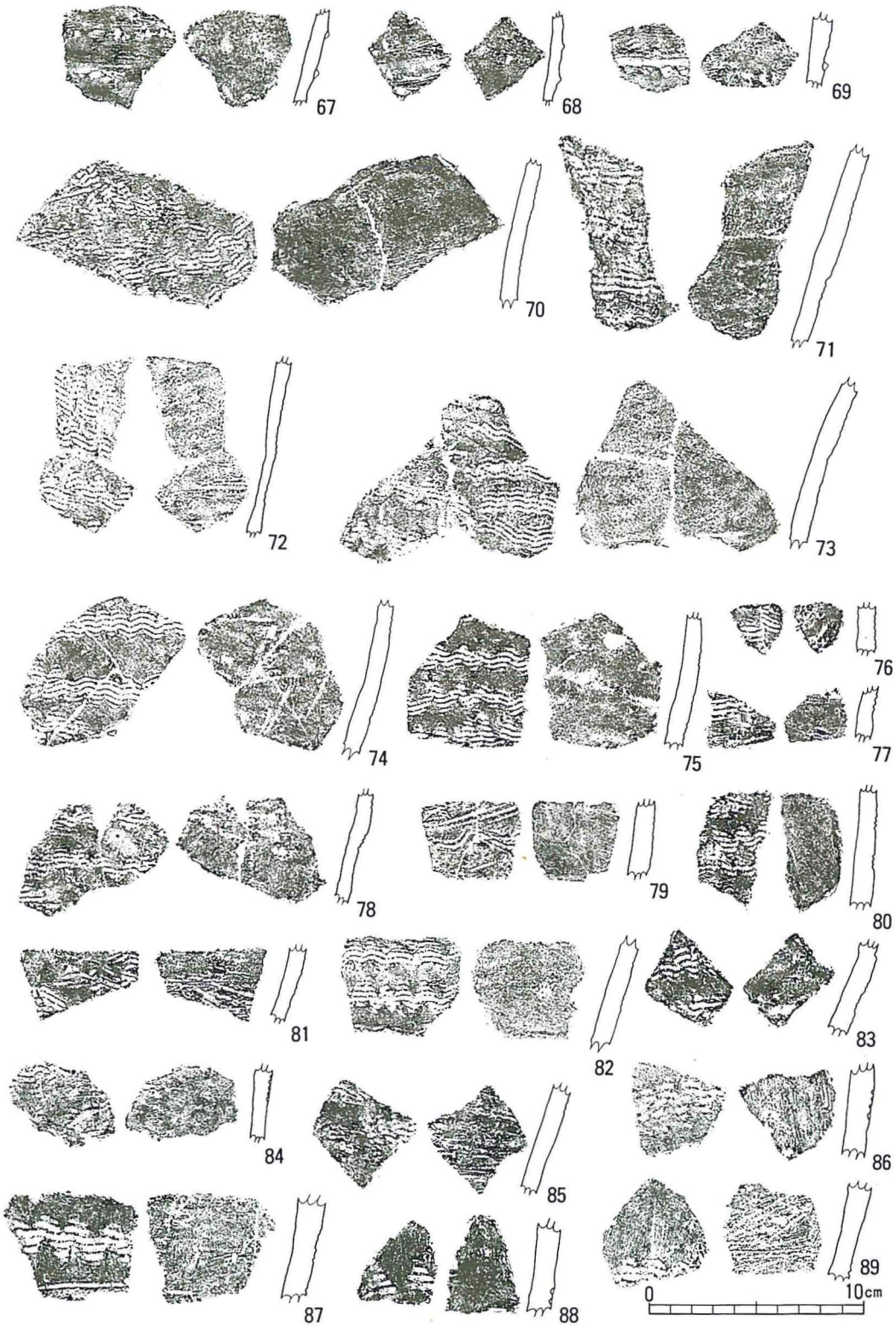
第21図　出　土　土　器（5）



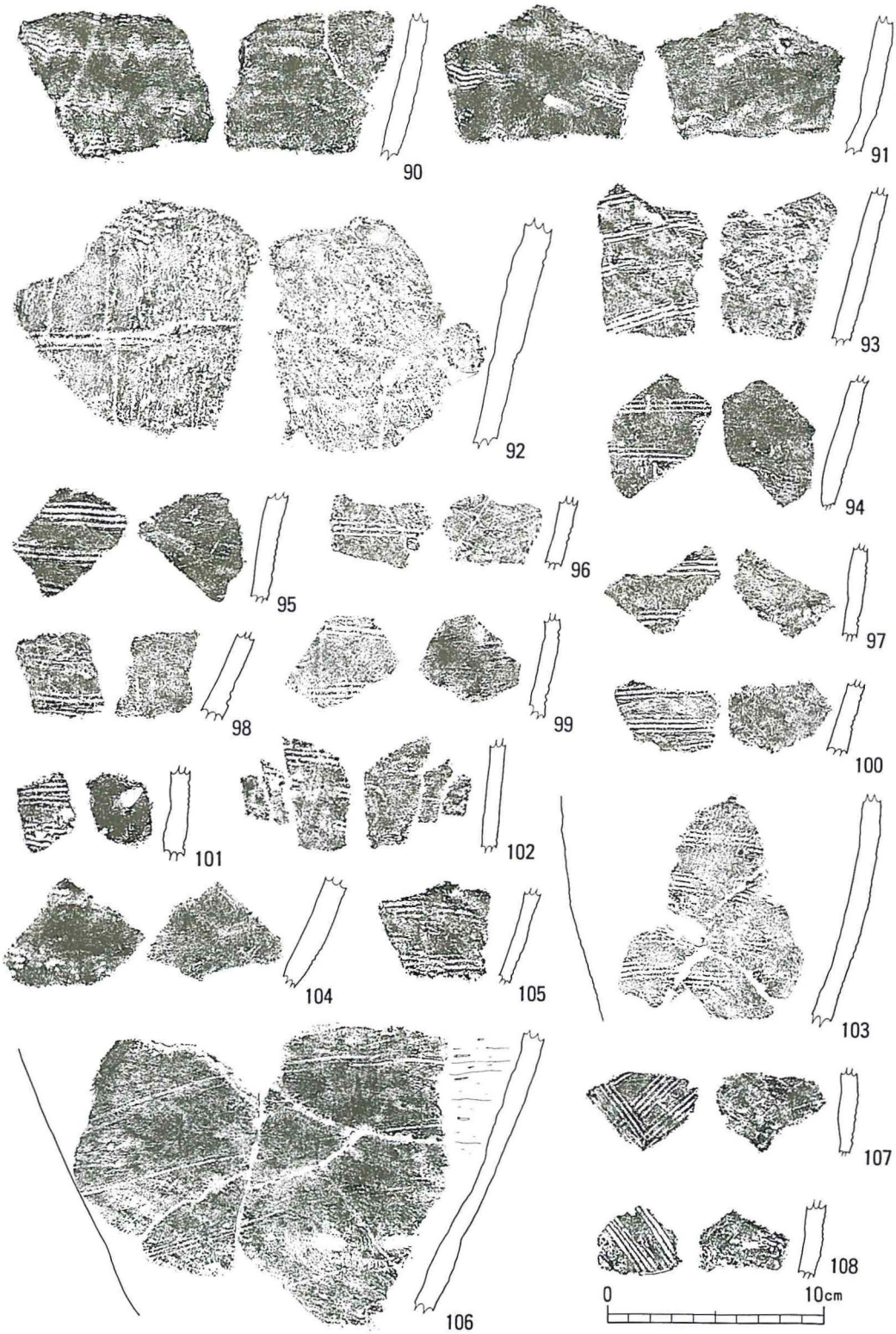
第22図　出　土　土　器（6）


43
45
44
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0
10cm

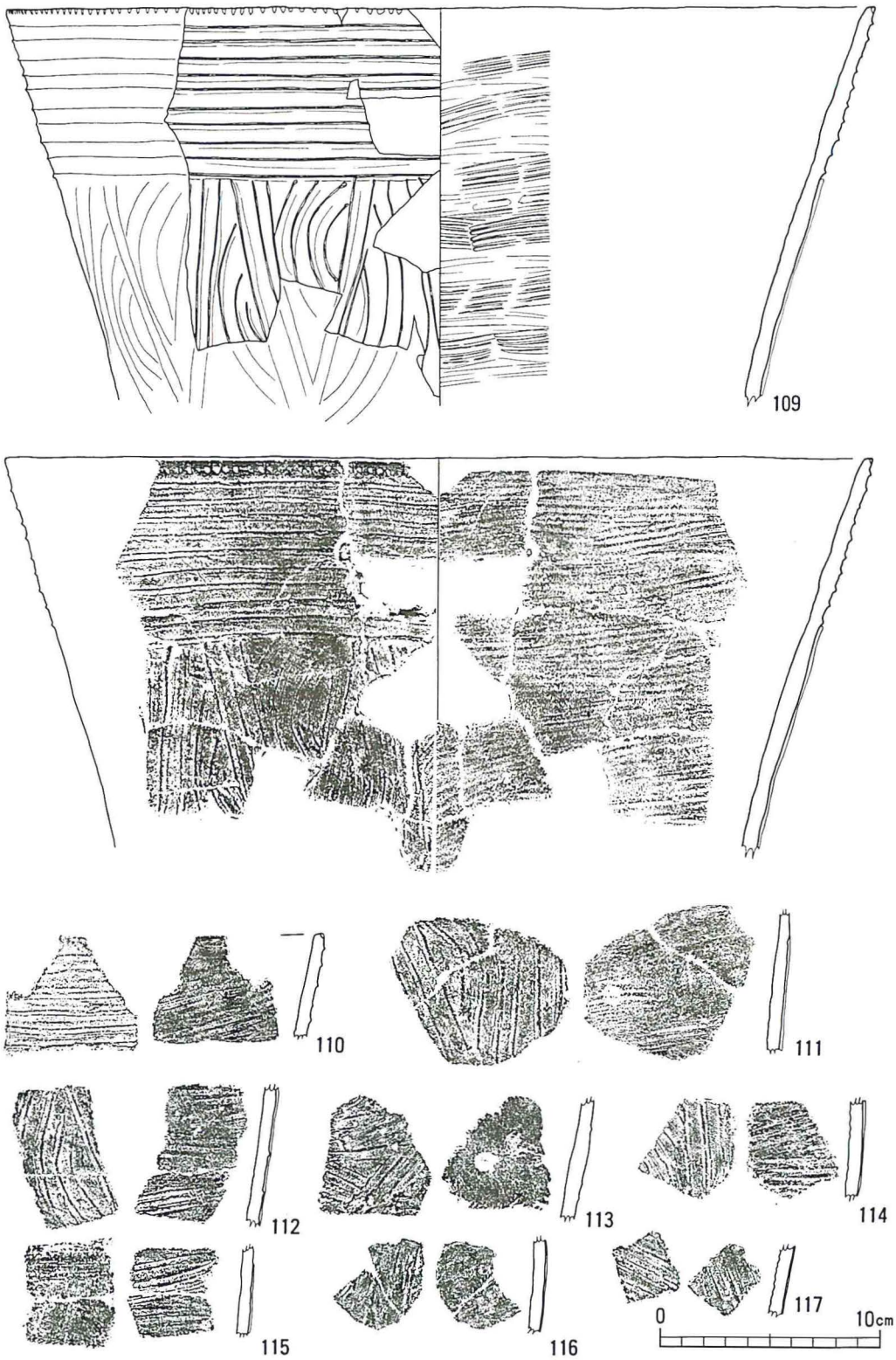
第23図　出　土　土　器（7）


67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
0
10cm

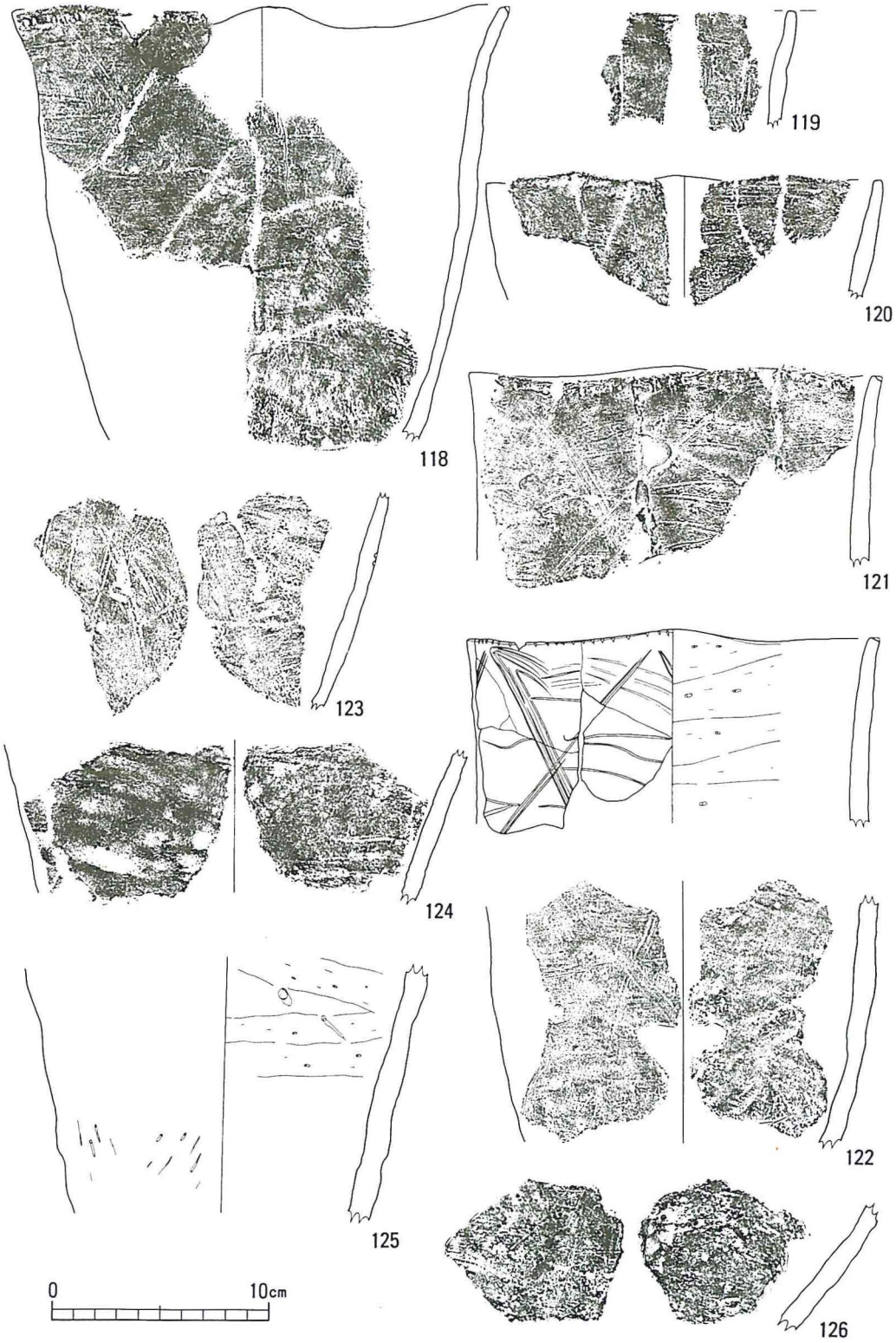
第24図　出　土　土　器（8）


90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0
10cm

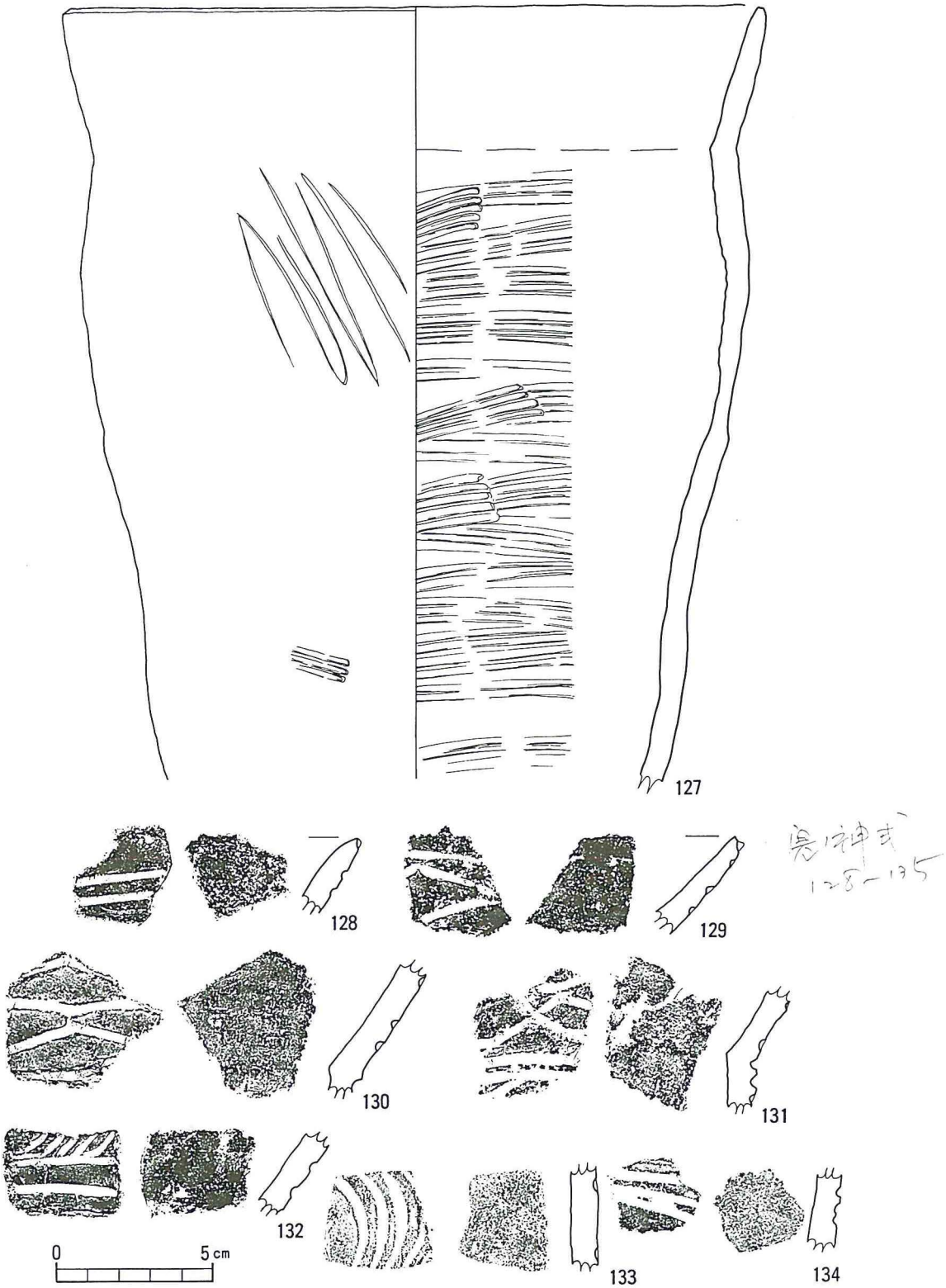
第25図　出　土　土　器（9）



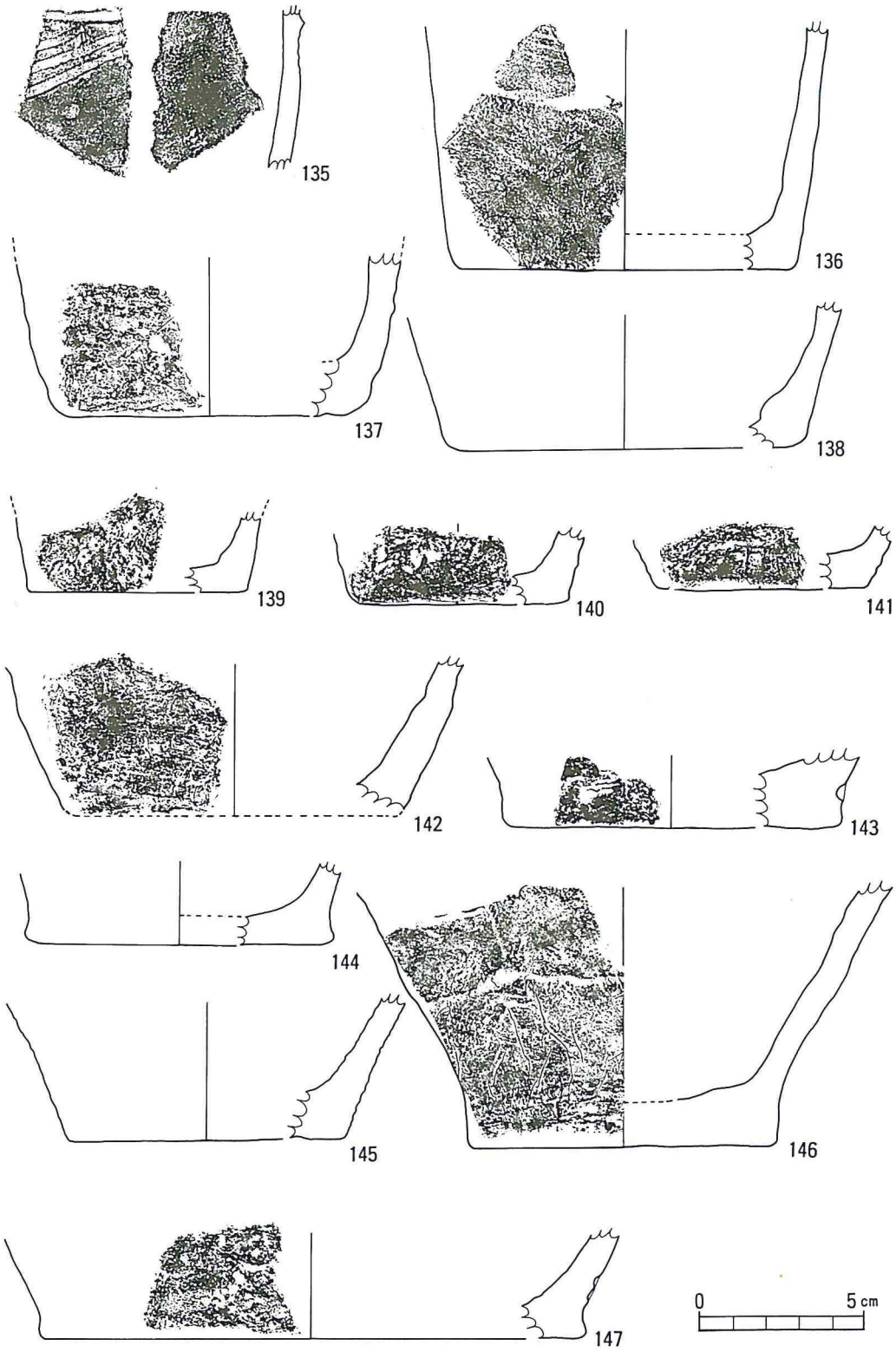
第26図　出　土　土　器（10）



第27図　出　土　土　器（11）



第28図　出　土　土　器（12）



第29図　出　土　土　器（13）

第５表　土器観察表(1)

図版番号	色調	胎土				焼成	文様・調整		備考
		石英	長石	角閃石	砂礫		外面	内面	
1	黄褐色	○	○	○	砂粒	良好	刻目・貝殻腹面押圧条痕	条痕・ナデ	1類
2	黄灰色	○	○	○	砂粒	良好	刻目・貝殻腹面押圧条痕	条痕・ナデ	1類
3	黄褐色	○	○	×	砂粒	良好	刻目・貝殻腹面押圧条痕	条痕・ナデ	1類
4	黄褐色	○	○	×	砂粒	良好	刻目・貝殻腹面押圧条痕	条痕・ナデ	1類
5	赤褐色	○	○	○	少	良好	刻目・沈線	ナデ	1類
6	黄白色	○	○	×	砂粒	良好	刻目・貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
7	暗褐色	○	○	×	少	良好	刻目・貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
8	淡褐色	○	○	○	砂粒	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
9	赤褐色	○	○	×	少	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
10	淡赤褐色	○	○	○	少	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
11	赤褐色	○	○	○	砂粒	堅緻	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
12	黄褐色	○	○	×	砂粒	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
13	赤褐色	○	○	×	砂粒	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
14	黄褐色	○	○	○	少	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
15	黄褐色	○	○	○	少	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類、傾き不明
16	黄褐色	○	○	○	砂粒	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
17	黄褐色	○	○	×	少	良好	貝殻腹面押圧条痕	ナデ	1類
18	黒褐色	○	○	×	少	良好	刻目・貝殻条痕	ケズリ(横)	2類
19	暗灰色	○	○	○	少	良好	刻目・貝殻条痕	ナデ	2類
20	灰褐色	○	○	×	少	良好	刻目・貝殻条痕	貝殻条痕	2類
21	黄灰色	○	○	×	少	良好	刻目・貝殻条痕	貝殻条痕	2類
22	黄白色	○	○	×	少	良好	刻目・貝殻条痕	貝殻条痕	2類、補修孔
23	黄灰色	○	○	×	少	良好	貝殻条痕	ナデ	2類
24	暗灰色	○	○	×	少	良好	貝殻条痕	ナデ・条痕	2類、傾き不明
25	黄灰色	○	○	×	少	良好	貝殻条痕	ナデ・条痕	2類
26	黄灰色	○	○	○	少	良好	貝殻条痕	貝殻条痕	2類
27	黄灰色	○	○	×	少	良好	貝殻条痕	条痕	2類
28	黄褐色	○	○	×	少	良好	刻目・貝殻条痕	ケズリ(横)	2類?
29	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ・ケズリ(横)	3類、波状口縁?
30	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ・ケズリ(横)	3類
31	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕	ナデ・ケズリ(横)	3類
32	暗褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ・ケズリ(横)	3類
33	暗黄褐色	○	○	×	多・大	やや良	刻目・貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
34	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ・ケズリ(横)	3類
35	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ・ケズリ(横)	3類
36	茶褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
37	暗褐色	◎	○	×	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	不明	3類
38	茶褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
39	黄褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
40	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ・ケズリ(横)	3類
41	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	刻目・貝殻条痕	ナデ・ケズリ(横)	3類
42	灰褐色	○	○	×	多・大	良好	刻目瘤付き・貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
43	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕・瘤	ナデ・ケズリ(横)	3類
44	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	刻目瘤付き・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
45	茶褐色	○	○	×	多・大	良好	刻目・貝殻条痕、ナデ	ナデ・ケズリ(横)	3類
46	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	刻目・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
47	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
48	黄褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
49	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	不明	3類
50	黒褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ・条痕	3類・傾き不明

第6表　土器観察表(2)

図版番号	色調	胎土				焼成	文様・調整		備考
		石英	長石	角閃石	砂礫		外面	内面	
51	黄褐色	○	○	○	多・大	良好	刻目・条痕	条痕	3類
52	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕・縦位刻目突帯	ナデ	3類
53	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕・縦位刻目突帯	ケズリ(横)	3類
54	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	瘤	ナデ	3類
55	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
56	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
57	暗灰色	○	○	○	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
58	暗褐色	○	○	○	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
59	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
60	茶褐色	○	○	○	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
61	黄灰色	○	○	×	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
62	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕	条痕	3類
63	黄灰色	○	○	×	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
64	灰色	○	○	×	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕	条痕	3類
65	青灰色	○	○	×	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕	条痕	3類、傾き不明
66	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕	条痕	3類、傾き不明
67	茶褐色	○	○	○	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕	条痕	3類、傾き不明
68	茶褐色	○	○	○	多・大	やや良	微隆起突帯・貝殻条痕	不明	3類、傾き不明
69	暗褐色	○	○	○	多・大	良好	微隆起突帯・貝殻連続刺突・貝殻条痕	ケズリ(横)	3類
70	黄褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
71	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
72	暗褐色	◎	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
73	黄褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
74	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
75	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
76	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕	ナデ	3類、傾き不明
77	暗褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類、傾き不明
78	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
79	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類
80	暗赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
81	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	条痕	3類、傾き不明
82	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ナデ	3類、傾き不明
83	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
84	暗褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
85	茶褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
86	暗灰色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
87	黄灰色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
88	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
89	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
90	黄褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
91	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
92	黄褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ、ケズリ	ケズリ(横)	3類
93	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
94	黄灰色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
95	褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
96	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
97	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	不明	3類
98	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
99	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
100	黄白色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕	ケズリ(横)	3類、傾き不明

第6表　土器観察表(2)

図版番号	色調	胎土				焼成	文様・調整		備考
		石英	長石	角閃石	砂礫		外面	内面	
101	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
102	暗褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
103	黄褐色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
104	黄褐色	○	○	×	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類、傾き不明
105	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	不明	3類、傾き不明
106	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	ケズリ(横)	3類
107	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕（格子目）、ナデ	ケズリ(横)	3類
108	黄灰色	○	○	○	多・大	良好	貝殻条痕、ナデ	条痕	3類、傾き不明
109	黒褐色	○	○	×	多	良好	刻目、ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類
110	黒褐色	○	○	×	多	良好	刻目、ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類
111	黒褐色	○	○	×	多	良好	ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類、傾き不明
112	黒褐色	○	○	×	多	良好	ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類、傾き不明
113	淡赤褐色	○	○	×	多	良好	ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類、傾き不明
114	赤褐色	○	○	×	多	良好	ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類、傾き不明
115	黒褐色	○	○	×	多	良好	ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類、傾き不明
116	黄褐色	○	○	×	多	良好	ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類、傾き不明
117	赤褐色	○	○	×	多	良好	ヘラナデ、微隆起線	貝殻条痕	4類、傾き不明
118	黄褐色	○	○	×	多	良好	ナデ、条痕	ケズリ(横)	5類、波状口縁
119	赤褐色	○	○	○	多	良好	ナデ	ナデ	5類
120	赤褐色	○	○	○	多	良好	ナデ、条痕	ケズリ(横)	5類、波状口縁
121	黄褐色	○	○	×	多	良好	条痕、ナデ	ケズリ(横)	5類、波状口縁
122	赤褐色	○	○	○	多	良好	ナデ、条痕	ケズリ(横)	5類
123	黄灰色	○	○	×	多	良好	ナデ、条痕	ケズリ(横)	5類
124	赤褐色	○	○	○	多	良好	ナデ	ケズリ(横)	5類
125	黄灰色	○	○	○	多	良好	ナデ	ケズリ(横)、ナデ	5類、内炭化物
126	黄灰色	○	○	×	多	良好	ナデ、条痕	ケズリ(横)	5類
127	黄褐色	○	○	×	多	良好	ナデ、条痕	貝殻条痕	
128	褐色	○	○	○	砂粒	良好	刻目・沈線、ナデ	ナデ	6類
129	褐色	○	○	○	砂粒	良好	刻目・沈線、ナデ	ナデ	6類
130	淡褐色	○	○	○	砂粒	良好	沈線、ナデ	ナデ	6類
131	黄褐色	○	○	○	砂粒	良好	沈線、ナデ	ナデ	6類
132	褐色	○	○	○	砂粒	良好	沈線、ナデ	ナデ	6類
133	暗褐色	○	○	○	砂粒	良好	沈線、ナデ	ナデ	6類、傾き不明
134	褐色	○	○	○	砂粒	良好	沈線、ナデ	ナデ	6類
135	淡褐色	○	○	○	砂粒	良好	沈線、ナデ	ナデ	6類
136	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	条痕、ナデ	ケズリ(横)	
137	暗褐色	○	○	×	多・大	良好	条痕、ナデ	不明	
138	褐色	○	○	○	多・大	良好	ナデ	ナデ	
139	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	条痕、ナデ	ナデ	
140	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	条痕、ナデ	ナデ	
141	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	条痕、ナデ	ナデ	
142	淡褐色	○	○	×	多・大	良好	条痕、ナデ	不明	
143	黄白色	○	○	×	多・大	良好	条痕、ナデ	不明	
144	赤褐色	○	○	○	多・大	良好	ナデ	ナデ	
145	黄白色	○	○	×	多・大	良好	ナデ	ナデ	
146	赤褐色	○	○	×	多・大	良好	条痕、ナデ	ナデ	
147	黄白色	○	○	×	多・大	良好	条痕、ナデ	ナデ	

第５節　石　　器（第30図～第38図）

第Ⅳ層出土の石器と調査中に採集された石器を取り扱っている。図化した石器の器種と内訳は、石鏃４点、石錐１点、石匙３点、石斧７点、礫器２点、石核２点、剥片11点、磨石・敲石類16点、石皿６点である。

石鏃（第30図　148～151）

形態的には、いずれも凹基で抉り深い。148は、表裏両面からの調整によって中央部を分厚く仕上げている。先端部が鋭く、脚部の一端を欠損する。表面は、風化により白っぽくなっている。149は、完形品で石材は透明度の高い良質の黒曜石である。下部両縁が、鋸歯状を呈する。基部は若干内弯ぎみで先端部、逆刺ともが鋭い。150は、左右両縁とも鋸歯縁を呈する。基部の一端を欠損する。151は、出土した石鏃４点の中で一番小さい。先端部は鋭く、基部は内弯ぎみである。全体的に風化している。

石錐（第30図　152）

石材は、姫島産の黒曜石である。フレイクの稜を利用している。疑問は残るが、先端部の観察からここでは石錐として扱う。

石匙（第30図　153～155）

いずれもつまみ部を上にしたとき刃部が横位となり、石材は頁岩である。153は、上下縁が平行をなし、調整によって素材面をとどめない。154の刃部は舟底形を呈し、正面・裏面とも多く素材面を残す。風化が進み、全体的に白っぽくなっている。155は大型の石匙で、つまみ部が小さく形成され、両面とも素材面を、また表面の右肩部と裏面の右端部に礫皮面をも残す。

石斧（第31図　156～162）

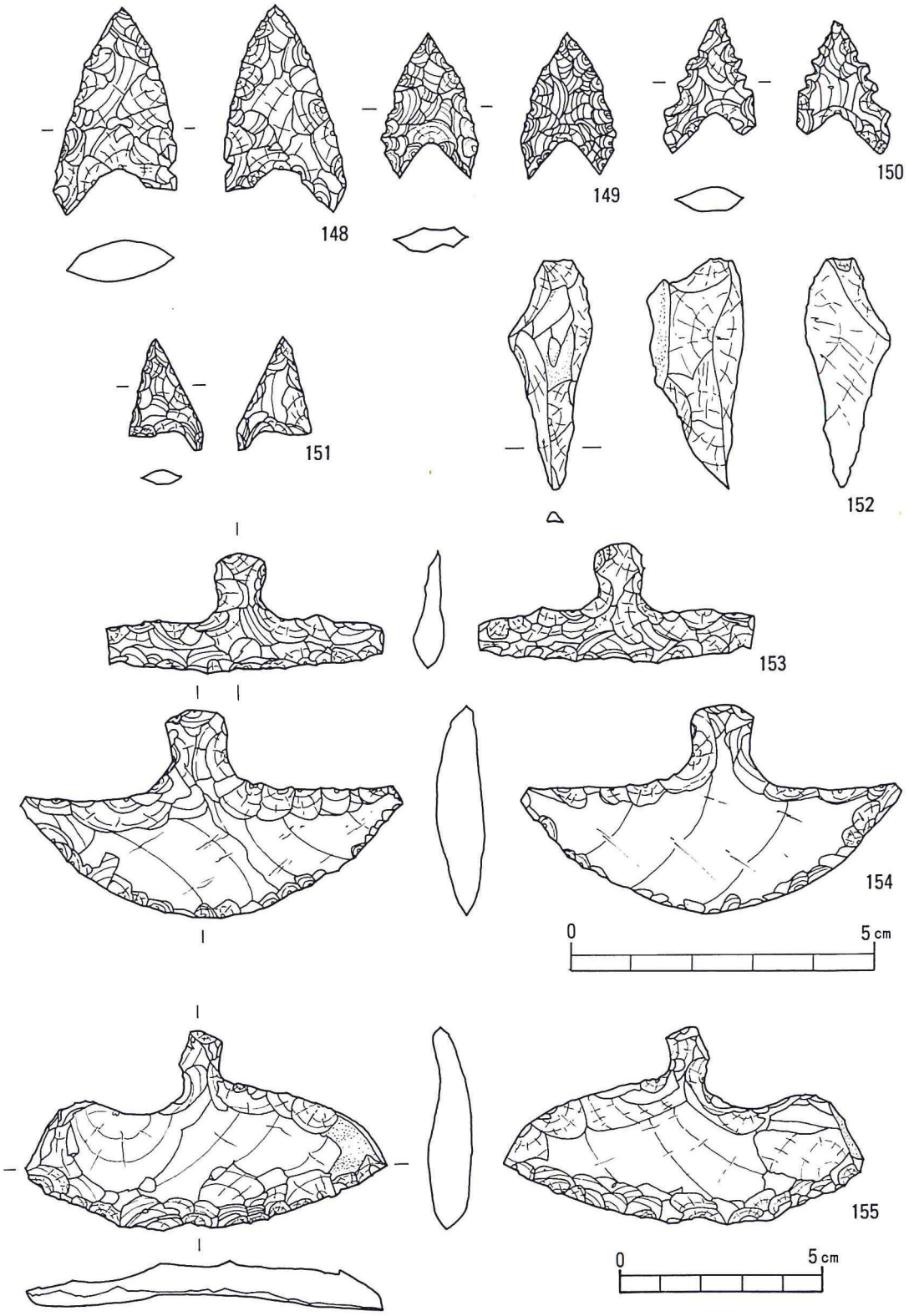
出土した全てに風化が顕著である。156は、欠損品で基部が失われている。両刃の磨製石斧で裏面には若干ながら刃縁に対して直交する線状痕がついている。157は、横峯Ｂ遺跡出土で欠損品である。両刃の刃部形態を呈し、表裏面とも刃縁に対し直交する線状痕がみられる。158は、磨製石斧の欠損品である。159・160とも風化が著しく、ともに欠損品である。161は、刃部のみの欠損品である。裏面に線状痕がみられる両刃の磨製石斧である。162は、両刃の小型磨製石斧である。

礫器（第32図　163・166）

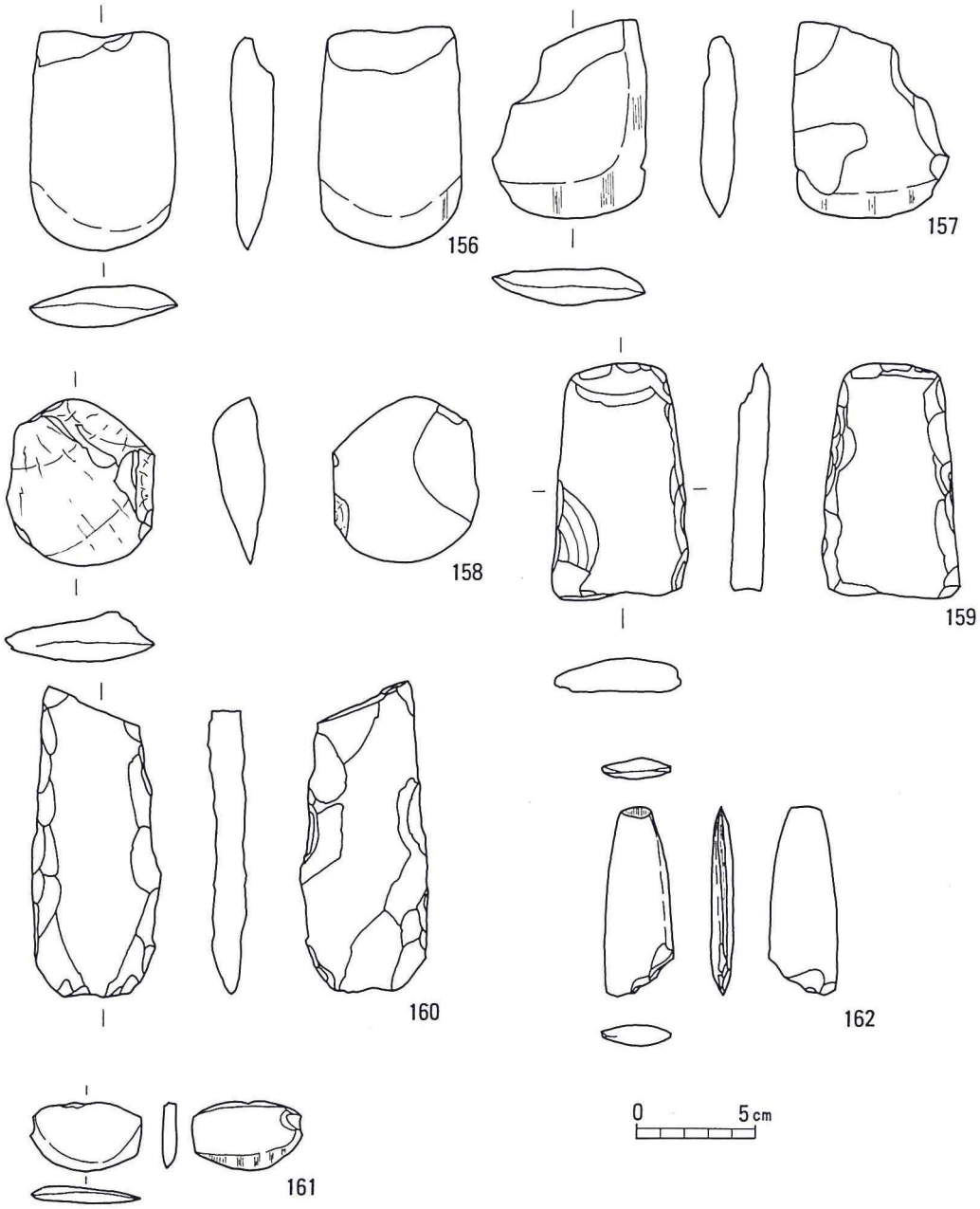
163・166とも石皿を転用している。163は、下位の半円部分を主要剥離面から数回の加撃によっる剥離で刃部を作出している。166は刃部の作出が顕著ではないが、ここでは一応礫器として扱った。

石核（第32図　164・165）

164は、表皮の残る剥片を利用し、正面は少なくとも３回以上の、裏面は打点を変えて多くの剥離を行っている。石材は頁岩である。横峯Ｃ遺跡では、頁岩を使った石鏃や多くの剥片が出土している。165は、石皿の欠損品を石核として再利用したものと思われる。下部に大きな作業面を，周縁部に小さな作業面を残す。



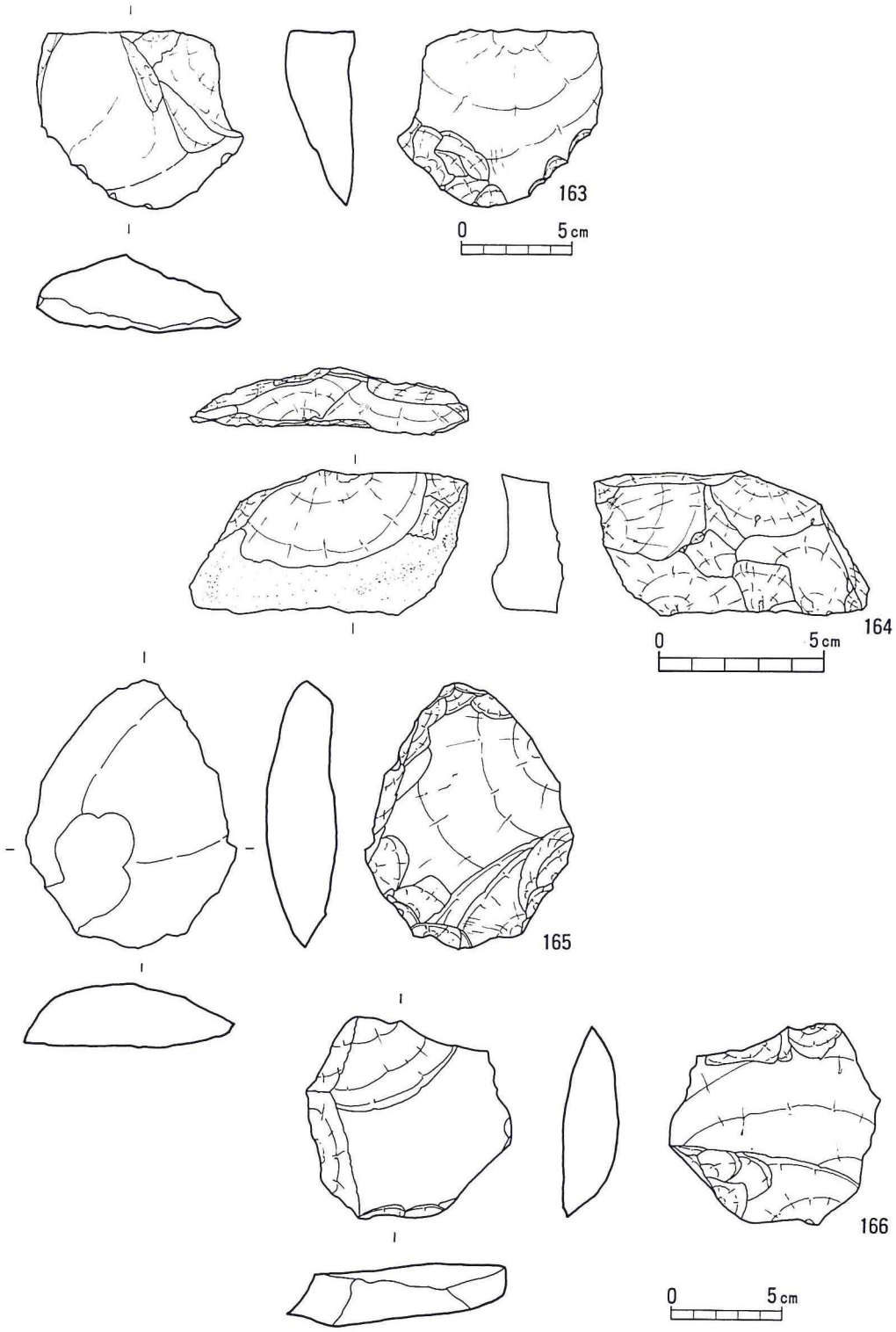
第30図　出　土　石　器（1）



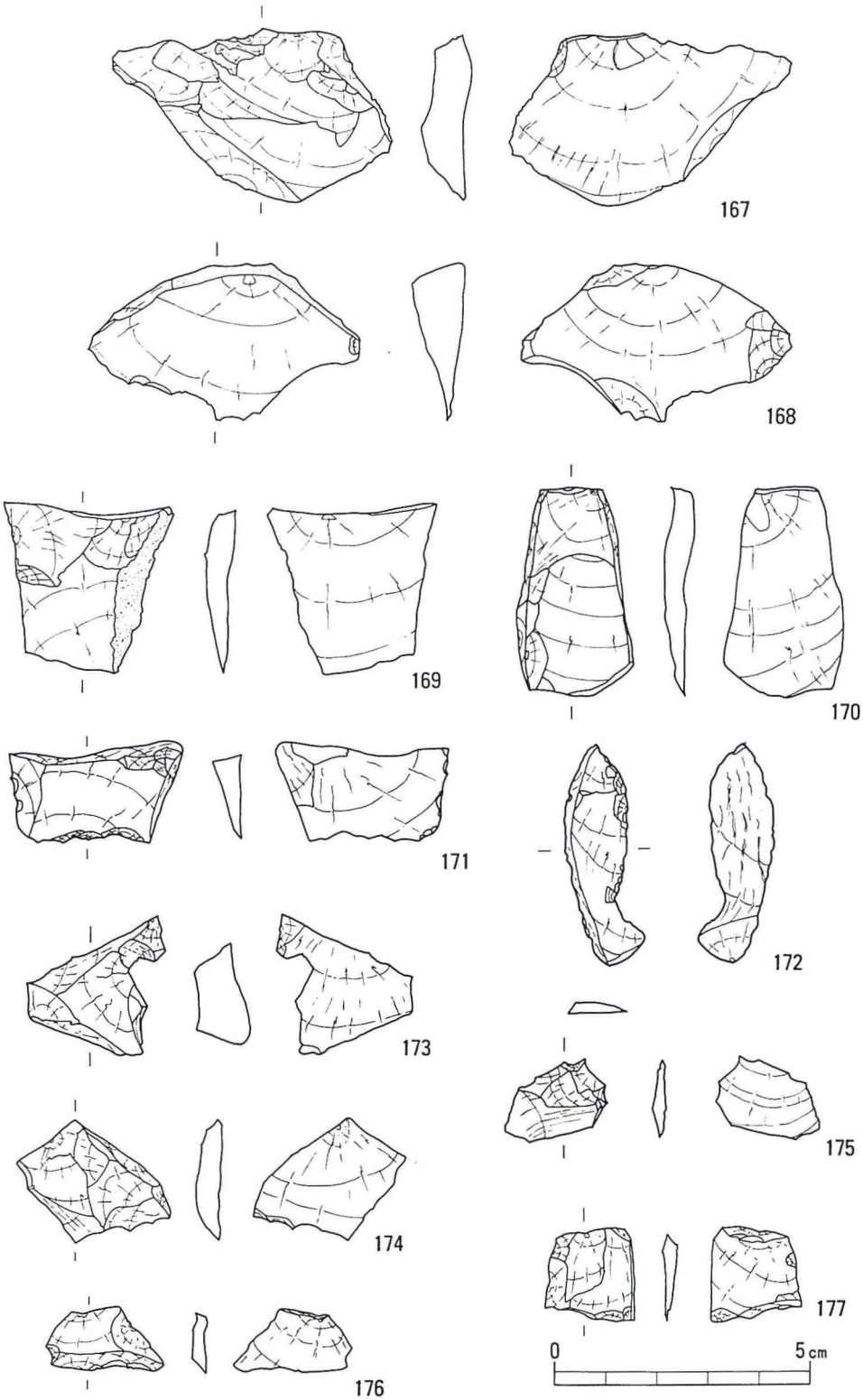
第31図　出　土　石　器（2）

剥片（第33図　157〜177）

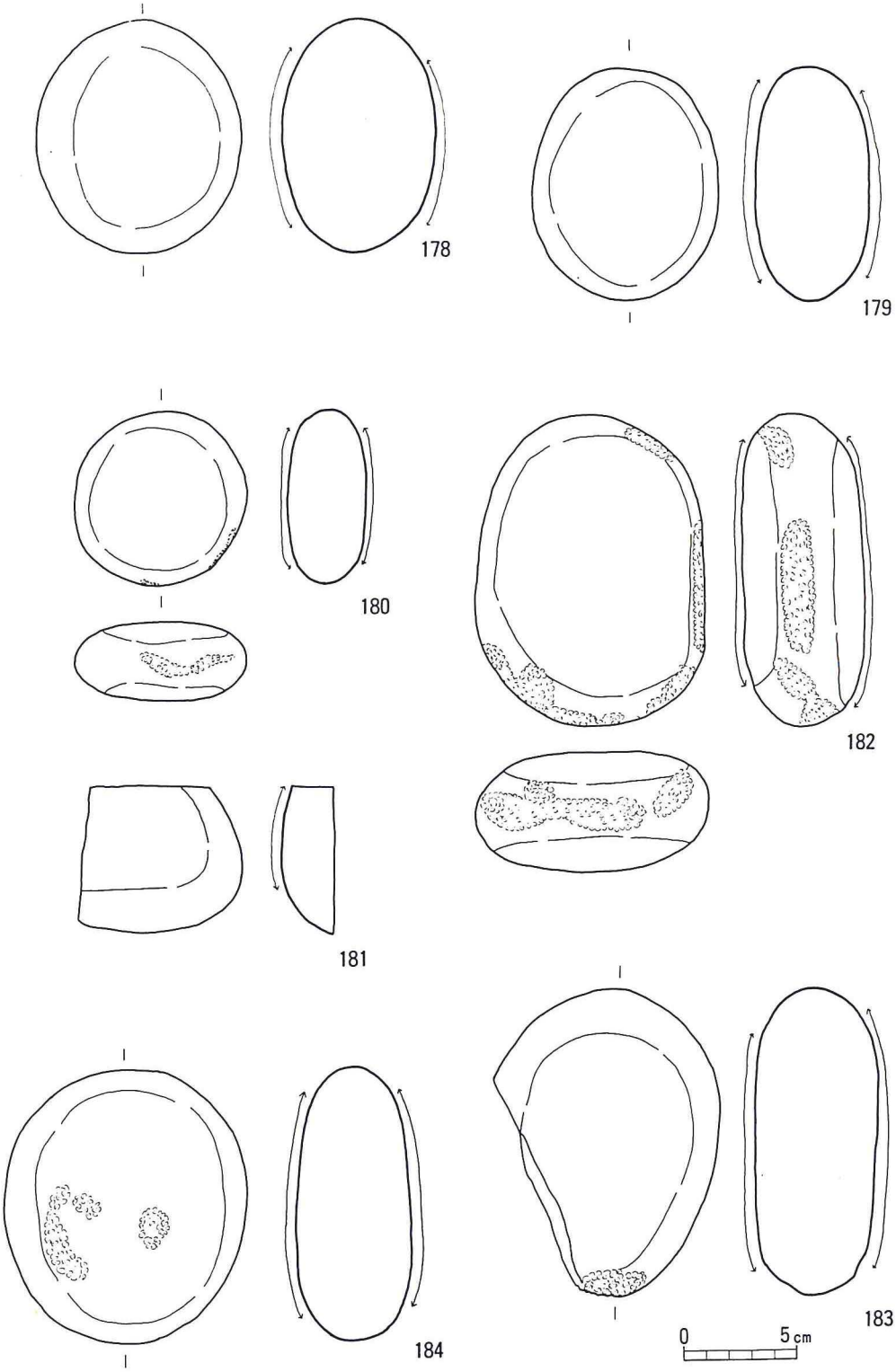
石材は変成岩（167・168・170）、頁岩（169・171・172・176・177）、黒曜岩（173・174・175）である。168は、残存する礫面から推定して円礫を用いたものであろう。171は、下縁的に使用痕がみられる。172は縦長の剥片で、正面右縁部に使用痕がみられる。173・174・175の剥片は、い



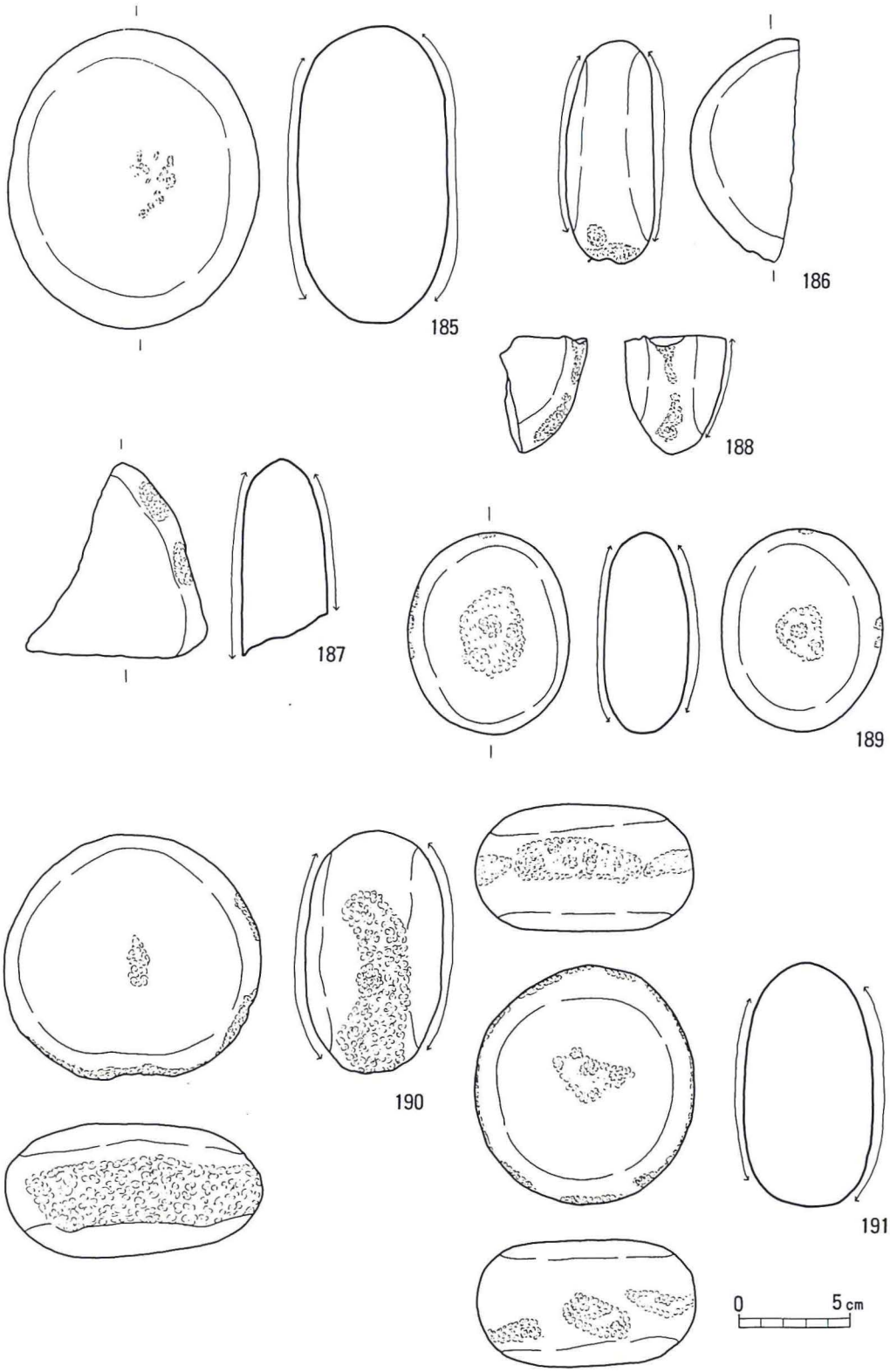
第32図　出　土　石　器（3）



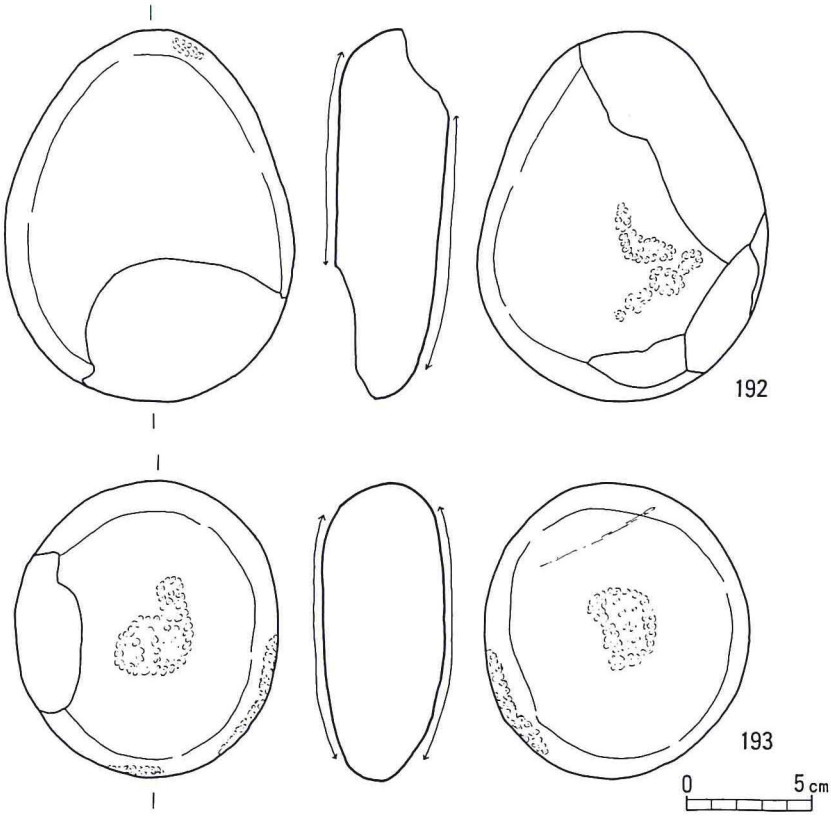
第33図　出　土　石　器（4）



第34図　出　土　石　器（5）



第35図　出　土　石　器（6）



第36図　出　土　石　器（7）

ずれも姫島産の黒曜石である。174の側縁部には使用痕が観察される。

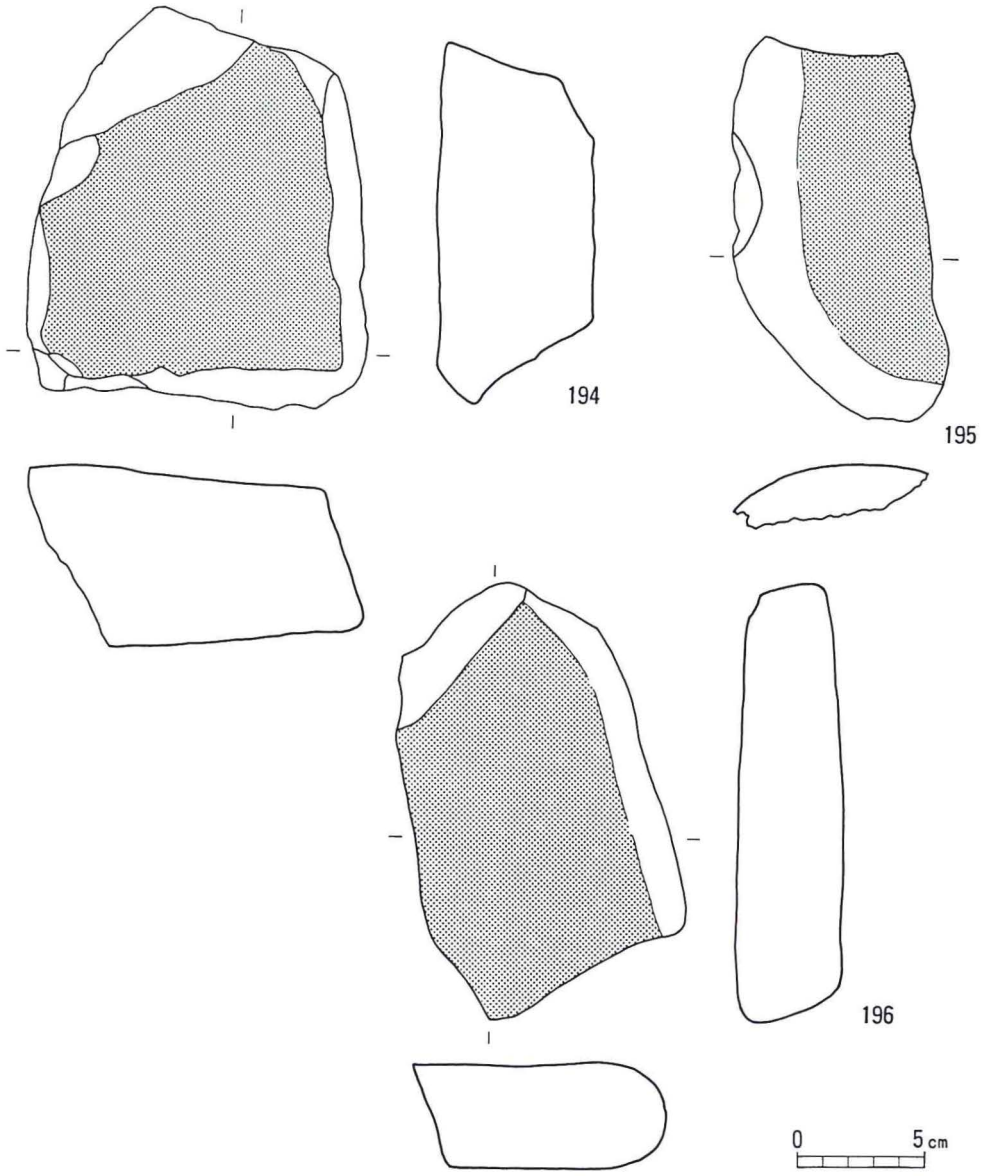
磨石・敲石・凹石類（第34図〜第36図）

風化の進んだ多くの礫が出土したが、ここではその機能を類別できる16点を図化した。石材は、ほとんどが砂岩で花崗岩が2点あった。これらの石器には複合的な機能を持つものが多いが、凹石に関しては凹みの顕著なものは少ない。

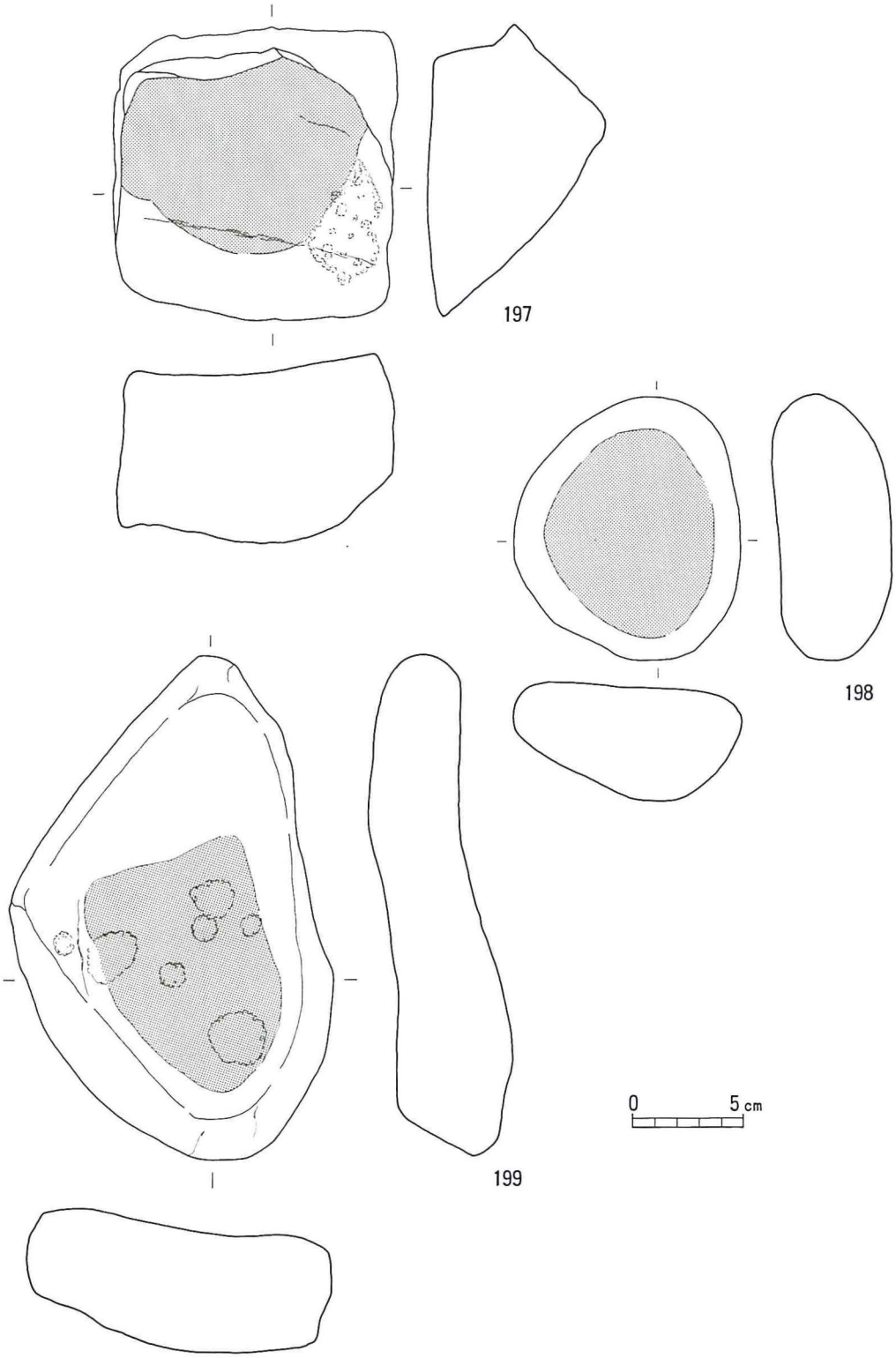
磨石単独の機能を持つもの（178・179・181）、磨石と敲石の機能を持つもの（180・182・186〜188）、磨石と凹石の機能を持つもの（184・185）、磨石と敲石と凹石の機能を持つもの（189〜193）に分けられる。181・188の欠損品を除けば磨製の機能を持つものは両面に磨面を持つ。190は、周縁部に敲打痕が顕著であり、よく使い込まれている。192の上部欠損は敲きによるものと思われ、赤化が顕著である。

石皿（第37図〜第38図）

石皿は6点出土したが、そのほとんどにおいて風化が見られる。石材は，全て砂岩を利用している。欠損品は不明だが、ほかは片面のみを使用している。198・199の完成品を見るかぎり整形は見られない。197・199は敲打痕が見られ、台石的用途も考えられる。



第37図　出　土　石　器（8）



第38図　出　土　石　器（9）

第8表　出土石器計測表

挿図	番号	器種	石材	区	層	最大長cm	最大幅cm	厚さcm	重さg	備考
第30図	148	石鏃	頁岩	A－3	Ⅳ	3.35	2.0	0.78	2.56	
	149	〃	黒曜石	D－4		2.45	1.65	0.38	0.95	
	150	〃	〃	E－3	Ⅳ	2.20	1.55	0.40	0.63	
	151	〃	頁岩	E－4	〃	1.85	1.25	0.22	0.38	
	152	石錐	黒曜石	E－3	〃	3.80	1.40	1.58	4.64	
	153	石匙	頁岩	A－5		2.0	4.55	0.6	2.88	
	154	〃	〃	E－3	Ⅳ	3.48	6.3	0.8	10.0	
	155	〃	〃	F－3	〃	4.9	8.9	1.05	37.54	
第31図	156	石斧	ホルンフェルス	E－3	〃	9.2	6.1	1.7	135.56	
	157	〃	〃			8.25	6.4	1.5	95.49	横峯B遺跡出土
	158	〃	砂岩	C－5		7.0	6.15	1.95	82.0	
	159	〃	〃			9.6	5.7	1.40	163.0	
	160	〃	ホルンフェルス			13.0	5.4	1.55	160.0	
	161	〃	〃	A－5		4.6	2.85	0.65	11.22	
	162	〃	〃	B－5		7.95	3.0	0.9	30.0	
第32図	163	礫器	砂岩			8.92	9.3	3.1	220.0	
	164	石核	頁岩	E－3	Ⅳ	4.5	8.35	2.15	65.0	
	165	〃	砂岩	C－5		12.12	9.5	3.15	355	
	166	礫器	〃			9.1	9.4	2.45	260.0	1T出土
第33図	167	剥片	変成岩	E－3	Ⅳ	3.35	5.5	0.85	12.40	
	168	〃	〃	〃	〃	3.1	5.3	1.0	12.51	
	169	〃	頁岩	〃	〃	3.4	3.45	0.5	7.08	
	170	〃	変成岩	F－3	〃	4.15	2.35	0.55	6.92	
	171	〃	頁岩			2.0	3.35	0.55	3.75	1T出土
	172	〃	〃	A－5		4.25	1.3	0.2	1.72	
	173	〃	黒曜石	E－3	Ⅳ	2.70	2.75	1.05	3.62	
	174	〃	〃	F－3	〃	2.35	3.05	0.5	2.36	
	175	〃	〃	E－4	〃	1.60	2.0	0.3	0.77	
	176	〃	頁岩	B－5		1.30	2.35	0.25	0.86	
	177	〃	〃	B－6		1.85	1.80	0.26	1.67	
第34図	178	磨石	砂岩	E－4	Ⅳ	10.4	9.1	6.8	882	
	179	〃	〃	E－3	〃	10.35	8.3	5.0	605	
	180	磨石・敲石	〃	A－7		7.65	7.6	3.45	302	
	181	磨石	〃	A－5		6.45	7.3	2.4	170	
	182	磨石・敲石	花崗岩	F－3	Ⅳ	13.8	10.3	5.3	1,060	
	183	〃	砂岩	A－6		13.6	9.95	5.5	925	
	184	磨石・凹石	〃	C－6		12.1	10.7	5.05	950	
第35図	185	〃	〃	F－4	Ⅳ	13.5	11.4	6.8	1,510	
	186	磨石・敲石	〃	E－4	Ⅳ	10.1	5.0	4.05	205	
	187	〃	〃	E－3		8.9	8.2	3.9	250	
	188	〃	〃	A－6		5.35	4.7	4.7	95	
	189	磨石・敲石・凹石	〃	F－5	Ⅳ	6.05	7.4	3.8	375	
	190	〃	花崗岩			11.65	11.2	6.1	1,090	
	191	〃	砂岩	E－4	Ⅳ	11.0	10.1	5.8	970	
第36図	192	〃	〃	B－6		14.6	11.4	4.5	855	
	193	〃	〃	B－5		11.75	10.6	5.0	860	
第37図	194	石皿	〃	A－4		14.3	13.6	7.2	2,000	
	195	〃	〃	F－2	Ⅳ	15.2	8.0	2.1	265	
	196	〃	〃	E－3	〃	17.4	11.7	4.15	1,160	
第38図	197	〃	〃	F－4	〃	25.1	34.3	15.9	14,500	
	198	〃	〃	A－5	〃	23.8	20.6	10.15	6,790	
	199	〃	〃	A－4	〃	45.45	31.1	10.4	18,350	

第5章　ま　と　め

横峯C遺跡では、アカホヤ層の下位から集石遺構が5基、AT層の下位から礫群が2基検出された。アカホヤ層の下位から集石遺構については、遺構の状況が南北で異なり、それに伴うであろう出土土器も、集石遺構と分布域が重なるかたちで類別できることから、2時期に別れるものと判断される。縄文時代早期に2時期と旧石器時代のつまり3時期の文化層が検出されたこととなる。礫群については、放射性炭素年代測定でほぼ3万年以前の年代が与えられるが、これは火山灰からの年代と予盾せず、妥当な年代であると考える。この時期の礫群としては、静岡県沼津市土手上遺跡や群馬県新里村武井遺跡があるがいずれも3万年を逆上らず、現在のところでは日本で最古の礫群といえる[1]。ただし石器が出土しておらず、この遺構の取り扱いについては慎重にならざるを得ない。むしろ種子島においてAT以下に複数の火山灰層が存在し、場所によってはローム層が良好に堆積している事実が再確認され、AT以前の旧石器研究のフィールドとなり得ることが認識されたことが重要であろう。1号礫群については半栽し、取り上げた礫は、県立埋蔵文化財センターに持ち帰ったが、とくに計量は行わなかった。ひび割れにより砕けたものが多い。

土器については、1類が石坂式土器の系譜の土器群、3類が苦浜式土器（盛園　1953）、4類が轟1式土器（高橋　1989）、6類が塞ノ神式土器の範疇に入るものと考えられる。6類については平栫様式の石坂タイプがもっとも近似する[注1]。苦浜式土器については、中種子町苦浜貝塚の資料から土器型式が設定され、その出土層位（火山灰との比較）は不明であった。土器資料から、轟式系として従来前期に比定されていたが、本遺跡でアカホヤ層の下から出土し、その年代的な位置付けが確定したことは非常に大きな成果である。まだ類例が少なく、型式としても周知されていなかった苦浜式の詳細が明らかになった。苦浜式は、盛園尚孝によって次のように型式設定された。「本遺跡から発掘された土器は胎土が粗く混砂量が多く、色調は赤褐色乃至黒褐色で稀に黒灰色も見られる。比較的厚手のものが多く焼成は割に脆弱で特に下腹部は粗である。

器形は単純な深鉢形で頸部に緩るい括りのある腹部の張ったもので口縁が梢々外曲するもの（図版番号略）と、直口するもの（略）があり又口縁部から頸部へ少しく肩の張ったもの（略）がある。鉢形は（略）である。なお口縁に緩やかな山形突起のあるものが有り底部はすべて平底である。

文様は一見轟式土器に類似の細帯隆起文（凸帯）が口頸部にあるものがあり、この凸帯には全て刻みがあるが、これは直線に横走するもの（略）、縦走するものとの複合（略）がある。特に最後のものは口頸部に対して四隅に対称的に付せられている。

地文はほとんどがAnadara属の貝殻唇縁による圧痕のあるもの（略）、（略）は外縁に箆書による刻みがある。

（略）は貝殻条痕文と箆書による圧痕との組合せによるもので、無文のもの（略）もある。

内面は全て無文でほとんどが植物質による擦痕と指頭の痕が見られる。製作は輪積みの手法を用いたと思われる。

前略……一轟式と比較すると一、この苦浜の土器はみみずばれの凸帯を呈さず相当に単純化されて刻目が有り装飾的な意図が強い。貝殻条痕も文様が異なり凸帯との組合わせにより器面の調整というより装飾的な観が強く感じられる。……略……。現在のところ轟式土器との関係を同じ祖形を有するもの、特に轟式一との対比が近いと考えられるが、苦浜式土器の名称を付したい。」

そして、種子島においては中種子町女洲遺跡・同高峯遺跡・同畠田遺跡・同千草原遺跡・同牛ノ原遺跡・西之表市大平遺跡と苦浜貝塚と合わせて7遺跡が報告されており（盛園　1987）、地域性の強い土器として認識されていた。

このように型式設定された苦浜式は横峯C遺跡の3類土器と同じものと判断できる。3類土器で明かになったこの土器型式に含まれると思われる土器を県内に探すと、栗野町花ノ木遺跡[2]、栗野町山崎B遺跡[4]、溝辺町木屋原遺跡[3]、溝辺町東原遺跡[3]、宮之城町大畝町園田遺跡[5]、金峰町高源寺遺跡[6]、鹿屋市榎木原遺跡[7]などでみられ、種子島にとどまらず鹿児島県内に普遍的であった可能性もある。4類土器が九州に広がって編年的に縄文時代早期末に位置付けられる（高橋　1989）とすると、共伴する苦浜式の編年的位置付けもそれに伴って位置付けられる。一方鬼界カルデラの噴火つまりアカホヤ火山灰をもって縄文時代早期の終わりとし、その土器型式を塞ノ式土器とすると（新東　1982他）、円筒形の塞ノ神式を最も古く位置付け、それらを貝殻系円筒土器の系譜でとらえていることから、本遺跡の3類は塞ノ神式の前に位置付けられるだろうということが推定される。今までの塞ノ神式土器の型式変化についての考察はいくつかあるが（河口　1972・1985、木崎　1985、多々良　1985、松永　1987）、型式変化は可逆的にもとらえられる可能性があり、それぞれが立論する前提について検討を終えていない段階で結論を得ていない。しかしながら、いずれによっても本遺跡の3類の苦浜式は、塞ノ神式の編年観でその前後に位置付けられることになる。ここでは本遺跡出土の3類と4類が共伴するという判断と、アカホヤ層の直下から出土したということ、苦浜式が轟式土器系としてとらえられてきた今日までの各調査者の判断と、調査中に同様に轟式としてとらえたことから、とりあえず縄文早期の終末に位置付けたい。この詳細な検討は稿を改めたい。現在のところ種子島に分布の中心をもちながらも、苦浜式は南九州の縄文時代早期の編年に組み込む必要があろう。

石器では、磨製石斧が石材に恵まれなかったのか風化が激しく、軟質である。磨石・敲石と石皿が、集石遺構とともなって出土し、居住地としての遺跡の性格を表している。大分県姫島産の黒曜石の剥片が見られることは、縄文時代早期の交流・交易の資料として興味深い。

遺跡は、町長をはじめとする町の関係者や、事業の受益者の方々の理解と努力で、事業地区から除外され、縄文時代早期包含層を残す北側の谷頭部分と、礫群が検出された周辺で旧石器時代文化層の可能性が強い今回の調査範囲が現状保存された。町としては今後の調査・活用について構想を練っておられる所であろう。いずれにしても縄文時代早期の土器資料からみても重要な遺跡であり、旧石器時代の研究においても重要な課題を抱えた遺跡となった。

ＡＴ下位のさらにタネⅣ下位の礫群については再調査が必要であるが、この検出層までローム層が良好に堆積しており、再調査の場合は礫群検出層の上位にも、旧石器文化層の存在の可能性があり慎重を期す。１号礫群と２号礫群の検出面にレベル差があり（もちろん地形上の差かも知れないが)、放射性炭素年代も２号礫群が新しく出ていることから、２文化層の可能性もぬぐえない。今後の確認調査で考慮していただきたい。

注１）県立埋蔵文化財センター主任文化財主事　新東晃一氏よりの教示

参考・引用文献

盛園　尚考　1953「中種子町の遺跡について」『鹿児島考古当会紀要　第３号』鹿児島考古学会

盛園　尚考　1987「先史時代」『南種子町郷土誌』南種子町

高橋　信武　1989「轟式土器再考」『考古学雑誌』第75巻第１号　日本考古学会

新東　晃一　1982「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』３　雄山閣

同　1988「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論集

河口　貞徳　1972「塞ノ神式土器」『鹿児島考古　第６号』鹿児島考古学会

同　1985「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古　第19号』鹿児島考古学会

木崎　康弘　1985「熊本県大丸、藤ケ迫遺跡の塞ノ神式土器について」『塞ノ神式土器』1985　縄文研究会資料

多々良友博　1985「塞ノ神式土器群の文様構成」『塞ノ神式土器』1985　縄文研究会資料

松永　幸男　1987「塞ノ神式土器小考」『古文化談叢』第18集　九州古文化研究会

(1)　旧石器時代の礫群については、㈱パリノサーヴェイの辻本崇夫氏に御教示をいただいた。

(2)　鹿児島県教育委員会　「花ノ木遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(1)』1975

(3)　鹿児島県教育委員会　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(10)』1978.2

(4)　鹿児島県教育委員会　「山崎Ｂ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(18)』1982.3

(5)　宮之城町教育委員会　「大畝町園田遺跡」『鹿児島県宮之城町文化財調査報告書(1)』1985.3

(6)　金峰町教育委員会　「木落遺跡　高源寺遺跡」『金峰町埋蔵文化財調査報告書(2)』1991.3

(7)　鹿児島県教育委員会　「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(44)』1987.3

付章　横峯C遺跡出土炭化物の^{14}C年代測定

パリノサーヴェイ㈱　辻本崇夫

1．はじめに

横峯C遺跡（鹿児島県熊毛郡南種子町島間横峯所在）の発掘調査では、姶良Tnテフラ（AT）より下位の火山灰層（TANEIV）直下より、掘り込みを有する礫群2基が検出された。石器類が共伴せずその編年的位置付けは不明な点が多いが、上記のような層位的事実より、これらの礫群が約2万年前よりはるかに古い事例であると予想された。今回、南種子町教育委員会および発掘調査を担当した鹿児島県立埋蔵文化財センター堂込氏より、その年代推定に関する自然科学分析調査の実施が要望され、協議のうえ礫群および包含層より出土した炭化材を用いて、^{14}C年代測定3点を行うこととした。以下に、その結果を報告する。

2．試　　料

測定に用いた試料は、TANEIV直下包含層より採取された炭化材1点、1号礫群および2号礫群より採取された炭化材各1点の計3点である。

3．測　　定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。半減期は、LIBBYの半減期5570年を使用した。

4．結　　果

結果は、表1に示した。

表1　^{14}C年代測定結果

試料名(出土位置)	試料の質	code No.	年代(1920年よりの年数)
包含層	炭化材	GaK－16775	＞30,260
1号礫群	炭化材	GaK－16776	＞31,080
2号礫群	炭化材	GaK－16777	＞28,110

5．考　　察

今回の^{14}C年代測定により、1号礫群・2号礫群の年代は、それぞれ＞31,080y. B. P.,＞28,110 y. B. P. と推定された。包含層より採取された試料でも＞30,260y. B. P. の年代値が得られており、これらの礫群が約3万年前より以前の遺構であることが理解された。その下限については、具体的な数値をあげることはできないが、試料採取層準の下位に堆積するTANE Ⅲより上位であることにより約4万年前頃と予想されている（堂込氏の御教示）ことからみて、これを遡らない。

ところで、旧石器時代の礫群の検出事例が多い関東地方では、AT降灰後に礫群形成のピークがみられるが、AT降灰以前の礫群は極めて少なく、礫群形成の不活発期と考えられている（辻本，1987)。これに対して、主に東九州や南九州ではAT降灰以前より礫群が形成され、AT降灰後も継続的に形成されることが知られている（徳永，1991)。本遺跡の礫群に関する年代測定結果は、九州地方における礫群の出自やその技術的伝播などの研究課題を解決するうえで、重要な資料となろう。今後、共伴石器群の摘出を目的とした発掘調査の実施をはじめ、礫群構成礫の給源、礫群の属性分析等が望まれる。

6．引用文献

辻本崇夫（1987）礫群の形成過程復原とその意味、古代文化、第39巻第7号、p.2－17.
徳永貞紹（1991）九州の礫群等に関する覚書、九州旧石器、第2号、p.40－49.

図版 1

遺 跡 遠 景　南側台地より

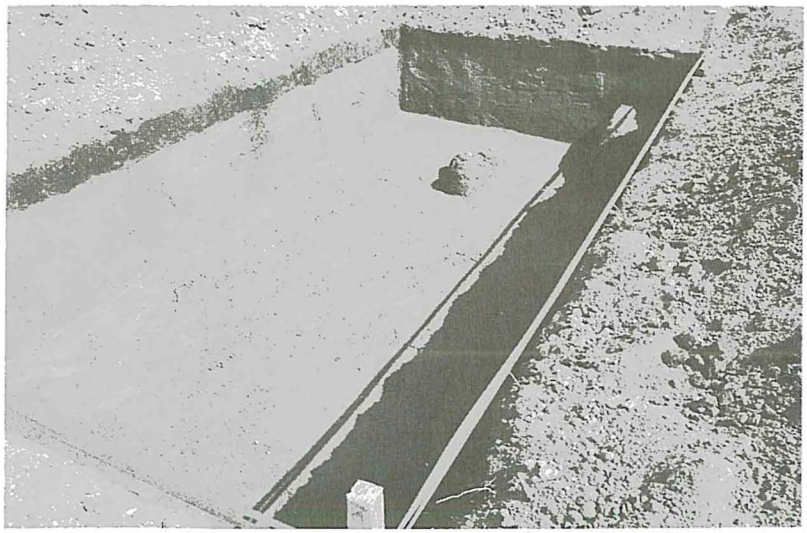
トレンチ調査状況

拡張トレンチ遺物出土状況

重機使用状況

図版 2

1トレンチ
出土状況

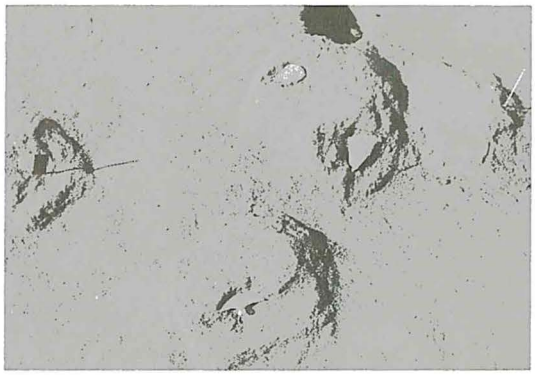


2トレンチ
出土状況

4トレンチ
出土状況

図版 3

遺　物　出　土　状　況



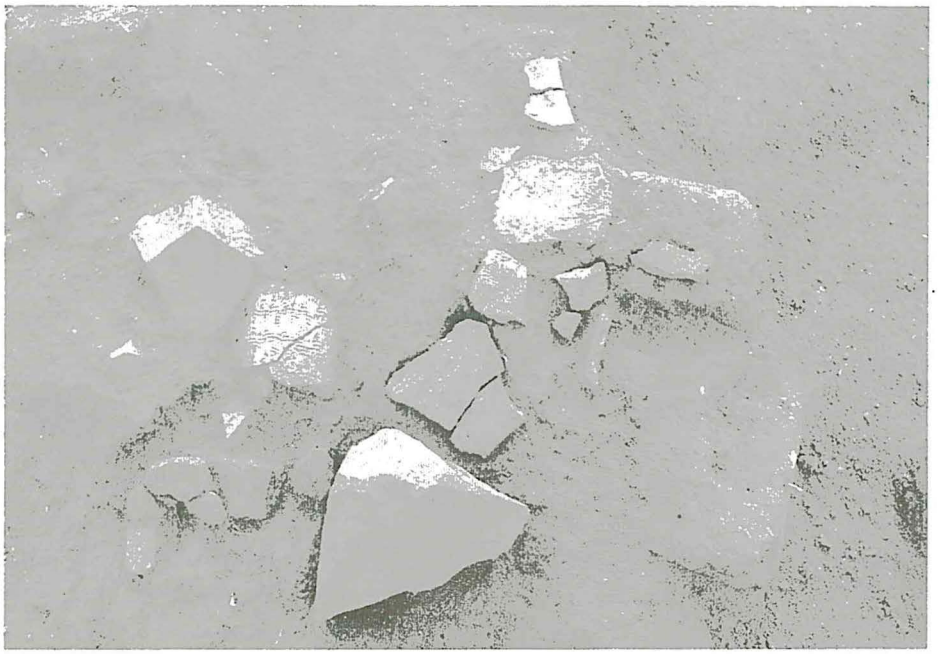
遺物出土状況

No. 154

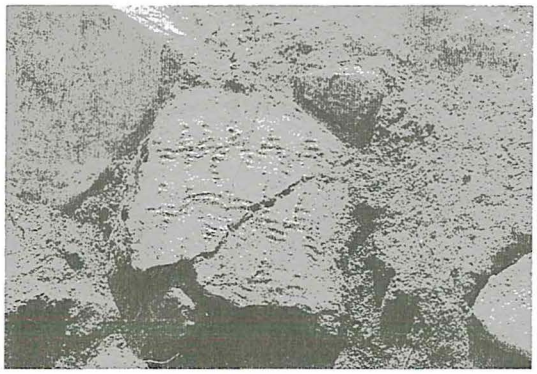
No. 128

No. 3

図版 4

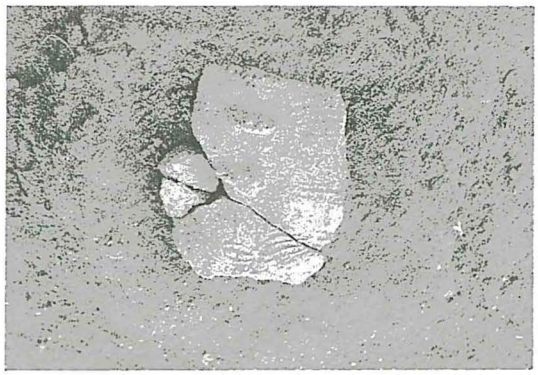


No. 30　出　土　状　況

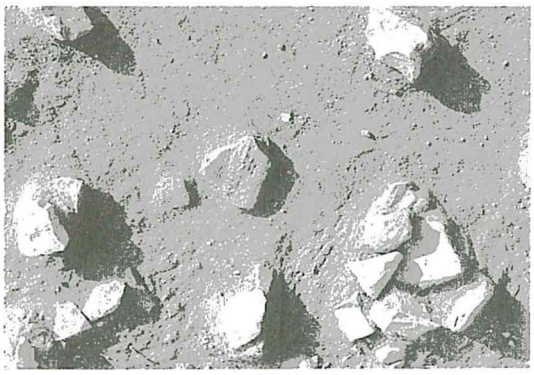


No. 30

No. 45



No. 42



No. 30 周辺

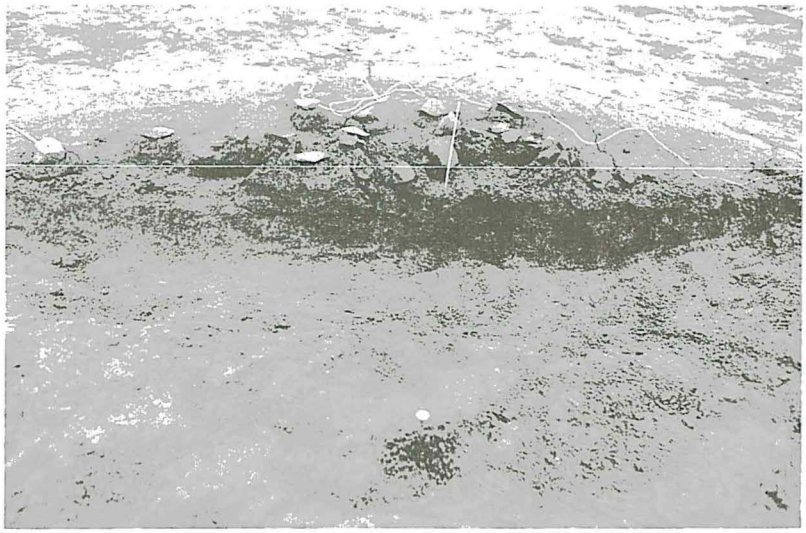
図版 5

1 号 集 石

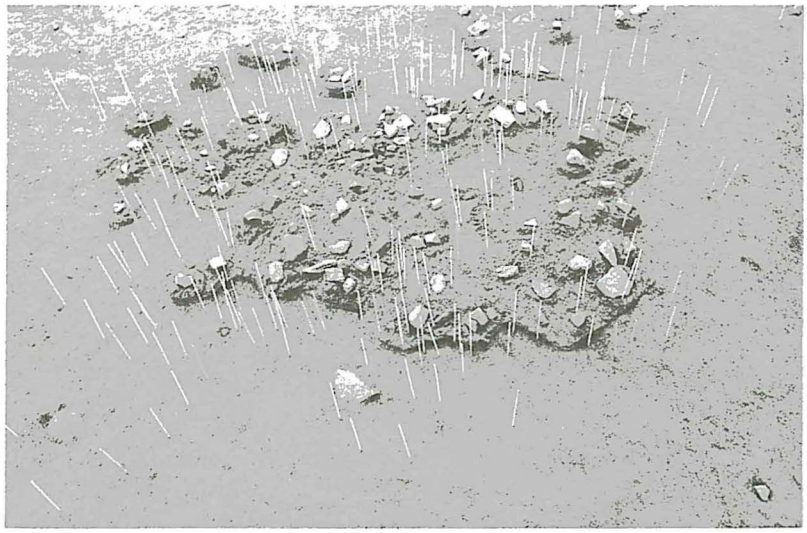
1 号 集 石
中 心 部

2 号 集 石

図版 6



1 号集石
断 面

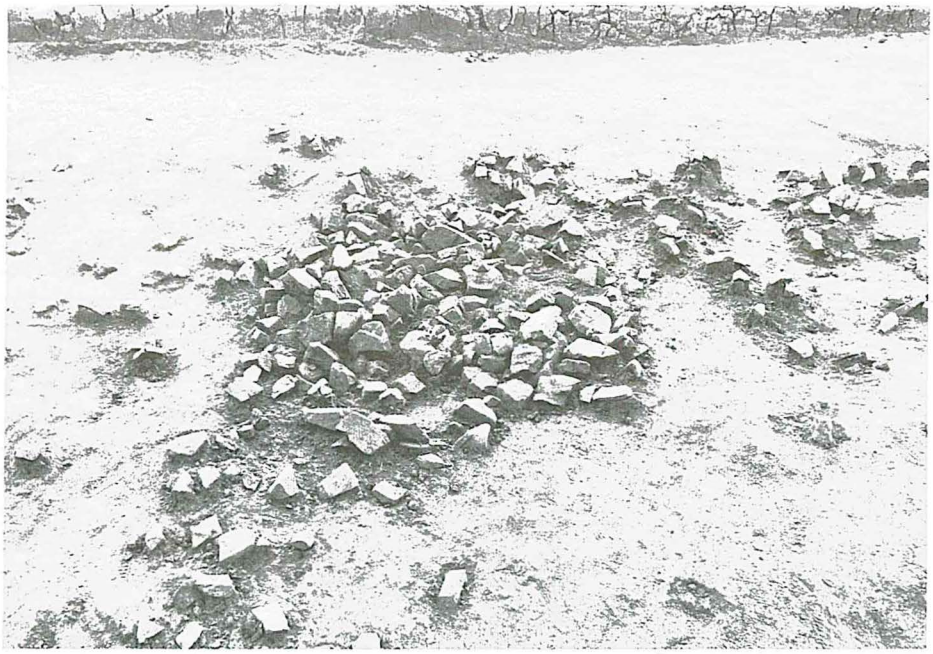


3 号集石
炭化物散布状況

3 号集石

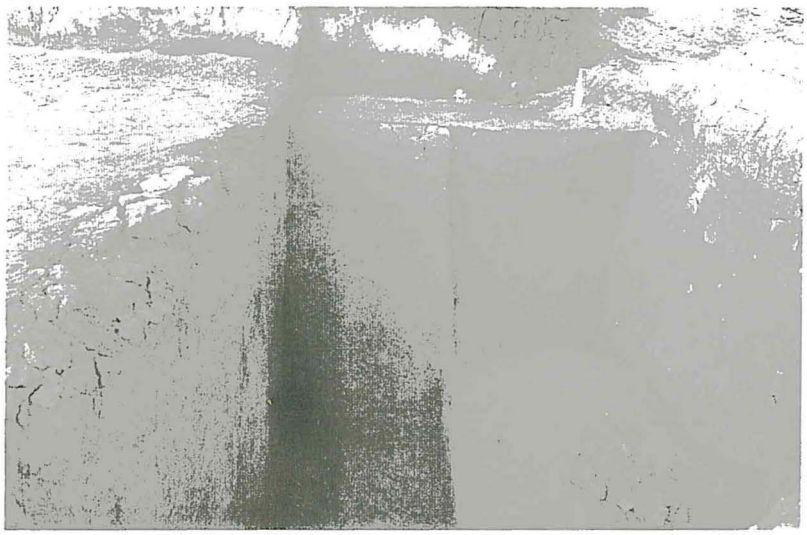
図版 7

4 号 集 石 検 出 状 況



5 号 集 石 検 出 状 況

図版 8



1 号 礫 群
検 出 状 況

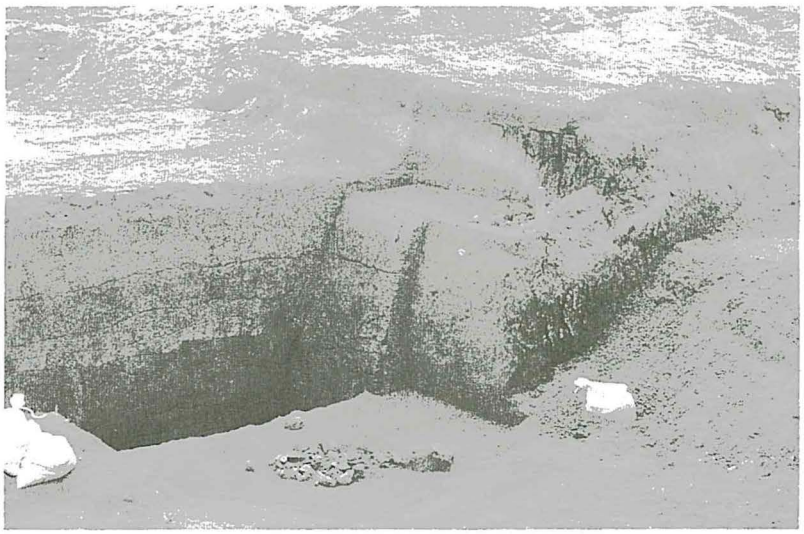
1 号 礫 群

図版 9

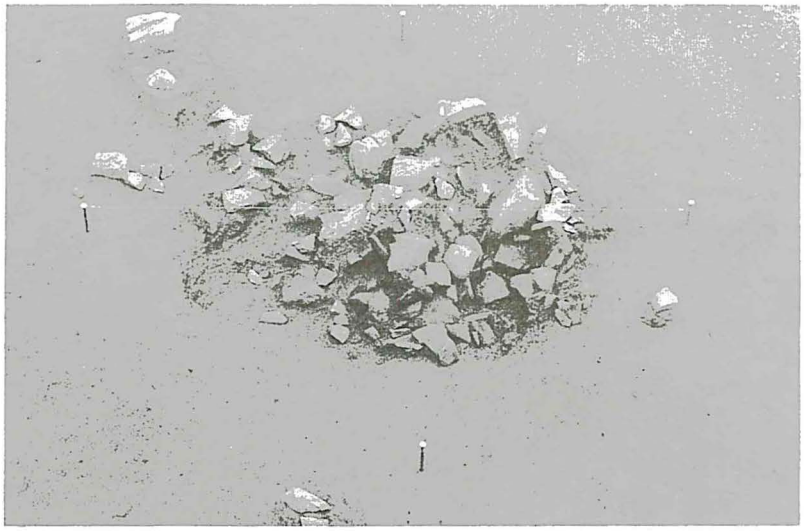
1 号 礫 群 出 土 層 位

2 号 礫 群 出 土 層 位

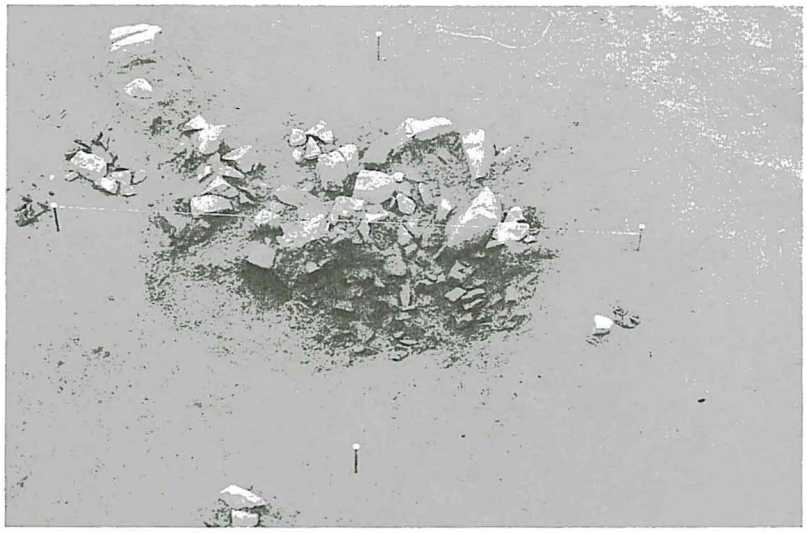
図版 10



1 号 礫 群
土層堆積状況



1 号礫群半裁
stage 1

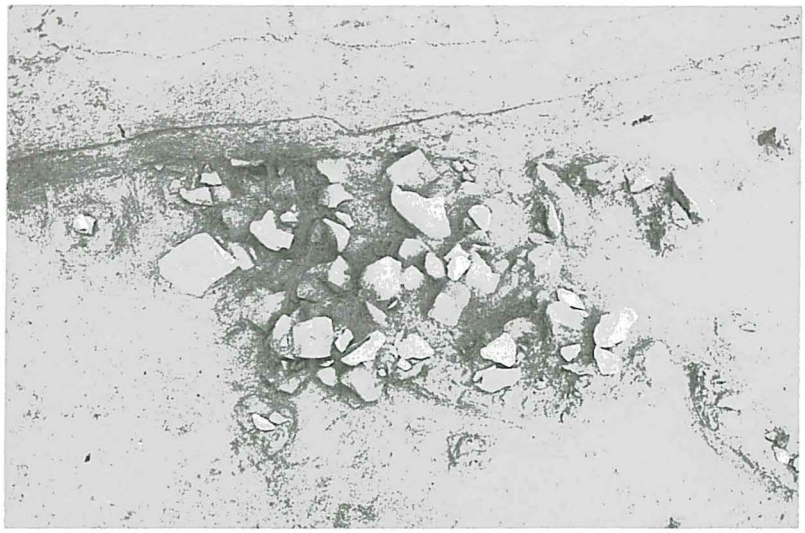


stage 2

図版 11

1 号 礫 群
stage 3

同　上



2 号 礫 群

図版 12

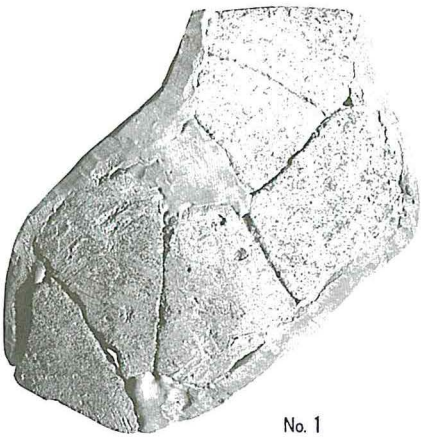
礫群部分
埋めもどし

同　上

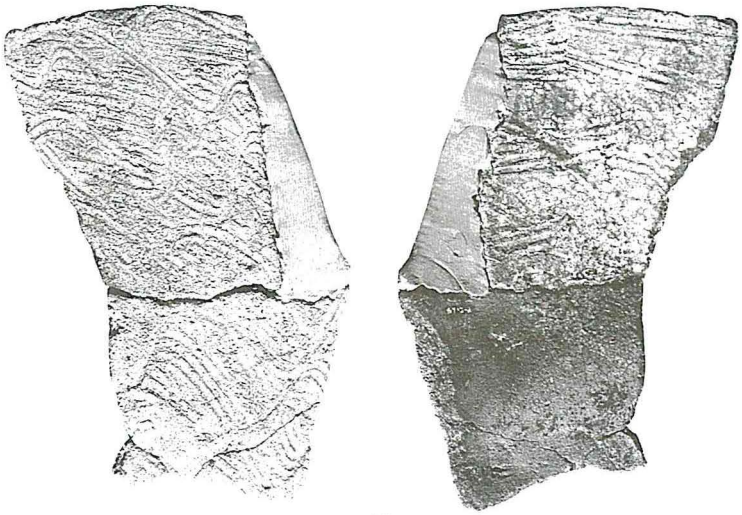
図版 13　出土遺物

No. 4

No. 5



No. 1

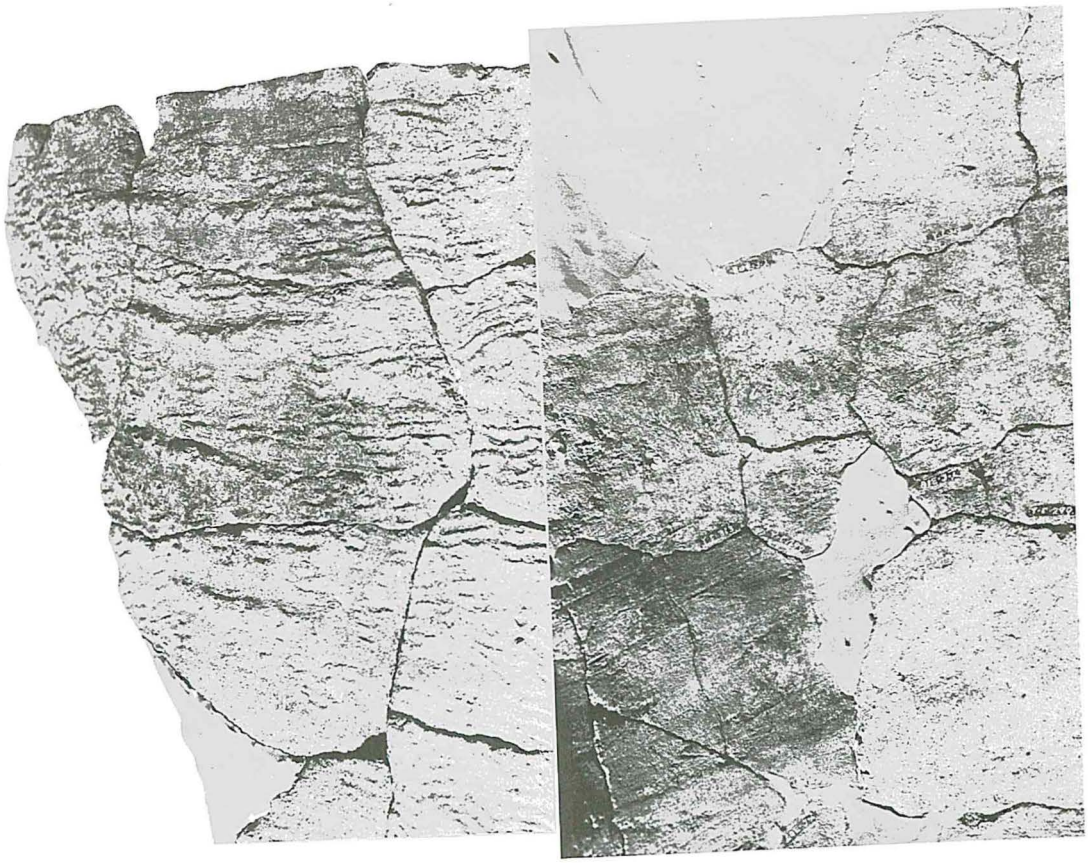


No. 22

No. 29

図版 14　出土遺物

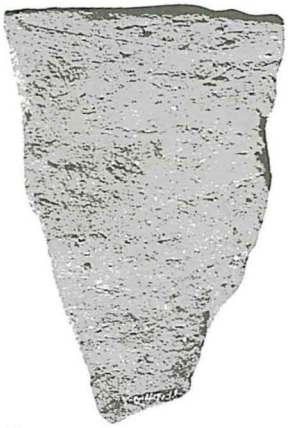
No. 30



図版 15　出土遺物

No. 43

No. 42



No. 45

No. 52

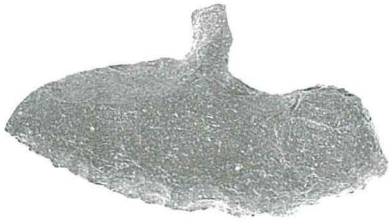
No. 109

図版 16　出土遺物

No.121

No.148～No.151

No.153



No.155

No.154

図版 17　出土遺物

No.161

No.162

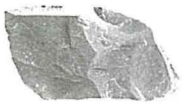
No.156

No.157

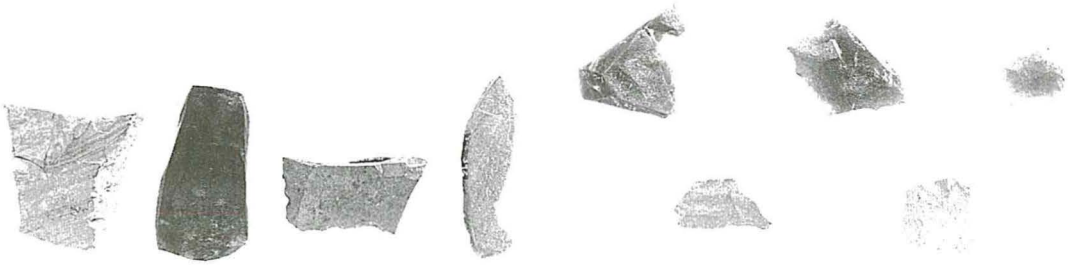
No.158

No.159

No.160



No.164



No.169～No.177

No.184

No.185

No.178

No.183

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

横　峯　遺　跡

１９９３年３月

発行　南種子町教育委員会
鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793－１
印刷　斯文堂株式会社
鹿児島市南栄３－１　Tel(0992)68－8211

鹿児島県
南種子町
4